

投稿誌

# わいふ

## 294

グラビア ● わが家の歴史写真—鈴木みち子さん

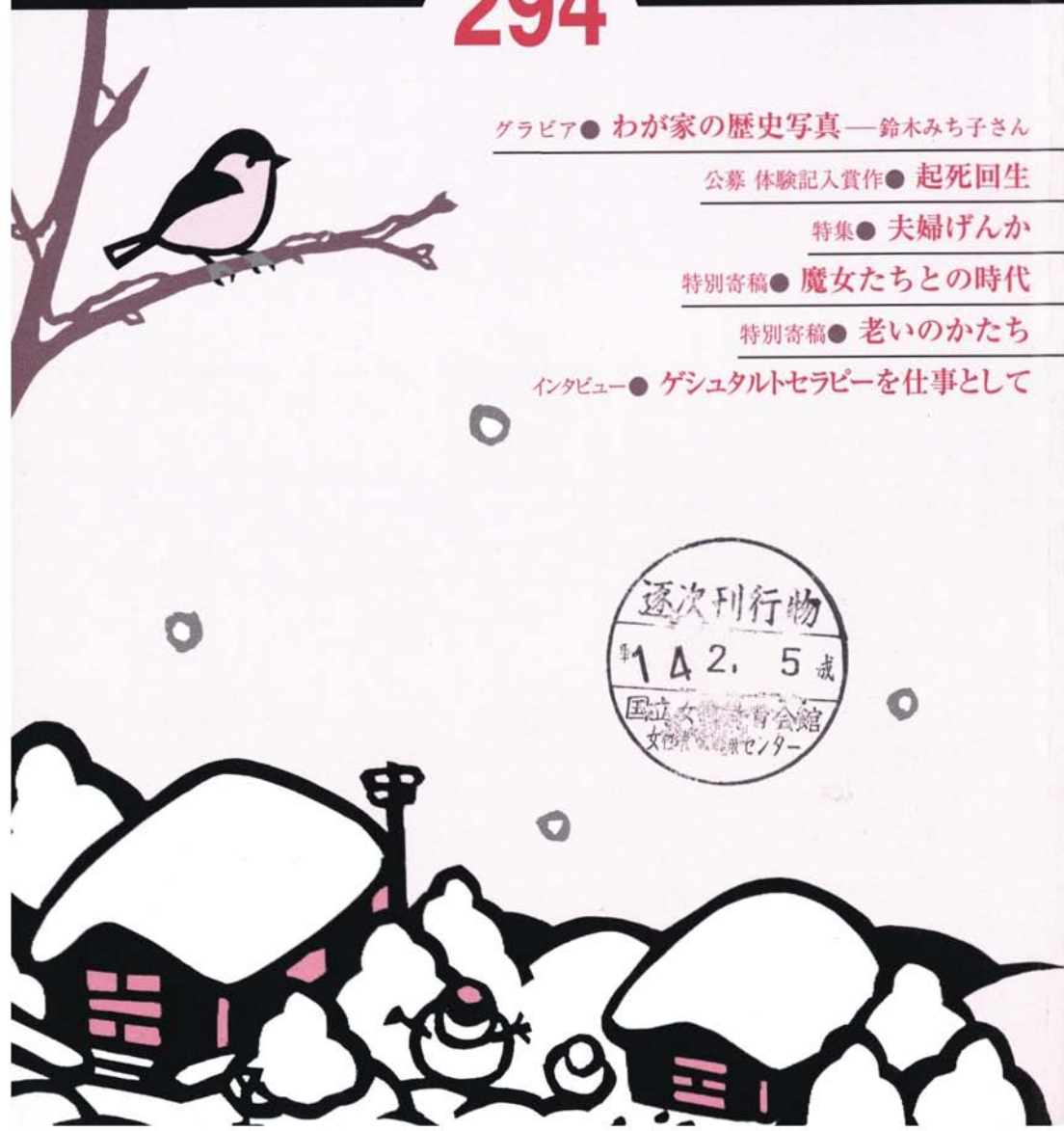
公募 体験記入賞作 ● 起死回生

特集 ● 夫婦げんか

特別寄稿 ● 魔女たちとの時代

特別寄稿 ● 老いのかたち

インタビュー ● ゲシュタルトセラピーを仕事として



# 超初心者のための パソコン通信講座「クラブネット」

電話でしっかりサポートだから安心です。



只今  
「わいふ」読者  
受講料10%OFF  
キャンペーン  
実施中!

クラブネットなら目的に応じて選べる特にお得なセットコースを設定。受講料はお手頃な月々7,500円から。必要な方には最新のパソコンセットを大型電気店に負けない価格でご提供。パソコン機材も受講料も、分割払いができますから安心です。

「手順に従って進めるだけで  
パソコンができるようになる!」

クラブネットでは、

コンピュータの専門用語を極力使わずに  
パソコンが全く初めての方にも

分かり易いテキストを作り上げました。

「パソコンはどうも苦手」という人にこそ  
チャレンジして欲しい。

それがクラブネットの通信講座です。

3、4カ月後にはきつとあなたも

パソコンを使いこなしてしまいます。

今こそ勇気を出して始めてみませんか?

クラブネットが最後までお手伝いします。

只今、「わいふ」読者一割引きキャンペーン中!

クラブネット通信講座を受講してできるようになること

●文章を書く ●案内状やお手紙、年賀状等を作る ●簡単な表やグラフを作る ●インターネットを使って、情報を集めたり買い物をする ●電子メールのやりとりで、友だちやサークルとの交流をはかる など、らくらく学習で、「中級程度のパソコン技術が身に付きます」

■お問い合わせ・資料請求は

# Club Net

初心者のためのパソコン操作通信講座 クラブネット

〒104-0045 東京都中央区築地2-4-10  
株式会社アイデックス  
「クラブネット事業部・わいふ係」

TEL 03-3544-4500 FAX 03-5565-1066

わいふ

読んで書いて、  
みんなでつくる

# わいふ

読んで書いて  
みんなでつくる

294号

## 目次

デザイン／宮塚真由美  
表紙イラスト／小林正子

イラスト／ 荒田ゆり子  
イシノフミ 小沢恵子  
カステラネンコ 栗田笑  
弘法堂建二 佐伯和美  
佐藤瑞江子 西宮さき  
橋本美智子 海砂  
箕輪絵衣子 山田安  
渡辺美帆

64

インタビュー  
ゲシュタルトセラピーを仕事として  
東京ヒューマニックス研究所・荒川旬美さん  
インタビューアー・柳沢順子

今これに夢中

ゴル・サン太・高梨陽子

パソコンワールド

柏木亜衣・石田ちえ

笑える！

神定黎子・加藤智恵子

フリートーク

大沢陽子・田口香織・林 直美・桜井淳子

匿名・永田道子・ももか

田口恵子・村田由香里・真野由美子

ブック情報

コミック これが子供の生きる道26

栗田笑

4

わが家の歴史写真  
父母の恋星になるまで

東京都世田谷区 鈴木みち子さん

写真提供・文／鈴木みち子

特集 夫婦げんか

夫婦ゲンカの効用 祥 まゆ美

信頼があればこそ 新井純子

夫の小言 三田サキ

エッセイスト・クラブ

布施幸子・山内志保・中松ミナ子

112

公衆体験記入選作  
起死回生

大石浩司

120

選考を終えて

田中喜美子



## ある英国女性の回想記

バーバラ・フォスター  
早川裕子訳

28

## 子育てフォーラム

●NMSのページ●

40

畑中珠美・由美あき子

## 魔女たちとの時代

赤井 猫

44

## 読んでよかった

林 夏子

51

## 家族のスケッチ

匿名・安村豊子・彩木ゆかり

52

## ズバリ一言

花岡京子

57

## 老いのかたち

井上暁子

58

## 私の意見・あなたの意見

鈴木貴子

63

## 国会議員になってしまった⑤

黒岩ちづこ

122

## あなたへスマッシュ

黒岩かおり・祥 まゆ美・真野由美子

134

## おすすめの一冊

野本美希子

137

## 私もひとつ

トト安田・太田啓子・永田道子・馬場紹美  
鴨川典子・石井しのぶ・藤岡 泉・林 直美  
本間美恵・武藤徳子・伊藤てる子・布施幸子  
あひる・象潟訓子・服部伸一・由美あき子  
福島みさを・井上暁子・伊藤琴子  
畑中珠美・藤原ゆき・林 夏子

138

## コミック 毎日が平日

海砂

142

## 情報コーナー

144

スタッフから

わいふインフォメーション

147

募集します

投稿のきまり

149

編集だより

投稿のきまり

152

バックナンバー

106

# 父母の恋星になるまで

東京都世田谷区 鈴木みち子さん



私の父と母は知り合ってからお互いの生を終えるまでずっとずっと「恋愛」をしていた。

父の家は千葉県北総台地で四百年近く続く農家で、母の家は千葉佐倉藩の役人であった。明治の廃藩置県で母の家は裁判所勤めとなったが、父親は母が八歳のときに他界し、長男がもう裁判所に出ていたので彼が一家の面倒を見ていたらしい。母の母親を私は知らない。「お写真のおばあちゃん」という名の人で美似という名があるとは十歳くらいまで知らないでいた。

昭和十一年四月十五日両親は結婚式をした。父の前妻が病死し、彼女と母が親友であったので「後ぞいはちいちゃん（母は千代という名なのでちいちゃんと皆に呼ばれていた）を……」と言い置いていった。彼女の母親の仲立ちで父と巡り合い死ぬまで



祖母と母と兄の友人たち



母の女学校卒業記念アルバムより（昭和3年・前列右から2人目）



国府台病院で



母千代

の「恋愛生活」が始まった。当日の母の母の衣装であった丸帯、かんざしは私のためにとってあったが、幸か不幸かそれはいつも眺めるだけの品物となった。

結婚後、転勤のため京都に移り住み「とても楽しい生活」が始まった。賛美歌をうたいながら山々を散策し、手をつなぎながら嵐山を歩き、うっとりもたれ合って大文字を見、またささやき合っては銀閣寺の辺りの紅葉を見たという（後に私はある男と両親の真似をして京都を歩いてみたが両親が語るほどムードイではなかった）。京都で家具を揃えよと、母が実家でもらってきた金子を京都見物で使い果たしてしまい、実母がやってくると聞いて大いにあわてて、兄たちのうちの誰かに泣きついて用立ててもらったとよく笑い話に話してくれた。

昭和十三年父は召集された。体が弱かったので近衛の補充兵役陸軍一等兵として上海へと向かって行った。が、何か月もしないうちにチフスにかかり、肺浸潤を患い、あげくマラリヤになり体力を使い果たして目が見えなくなつて廃兵となつて帰国した。千葉県市川の国府台病院で療養をしたが、この間の父の日記を見ると連日「千代来る」「千代来ズ」（来ズの日は大分気落ちしていたらしく字が

踊っている」と書き連ねてある。大東亜戦争下になると写真も日記もほとんどない。母は父の家へ疎開し、父は東京で勤めに出ていた。そのころの父の仕事の証明書があるのでごらんに入れましょう。週末には父は実家に戻り「恋愛」をしていたわけ。戦後まもなく私が生まれ、父は私の育児記録用のノートを作ったがなんと五日分しか書いてないのである。



戦時下の銀行員



陣痛が始まってから、降るような星空の夜中に私が生まれたこと、見舞いに来た人の名、命名のこと、「クリーム色の産着につつまれて、顔に黄ダンが出た」と私のことが書いてある。「乳の飲み方が下手」と書いてそれで終わり。この間オシメを洗ったり家事にいそしんでいたようす。我が家の歴史の中で父のほうも母のほうも、若干数名を除いては男性たちは家事をいとわずにし

ていたという。

私は中学生になるまで「病気の問屋」と言われるほど病弱でよく長く寝ついていた（いつも寝ながら本を読んだりラジオを聞いたりしていたので、今になっても、ときおり想いがあらぬ方向に進んでいくのだろうと思う）。

たいていのことは平和にすぎていった。その理由は両親がいつも恋愛をしていた



私、生後8か月



私、15歳のころ



父方の祖母と2歳の私



両親の思い出の地、京都にて



父と新宿御苑で  
5歳の私

のと嫁（母）と姑が仲がよかったからと私は思う。祖母が母によこした手紙のたばが残っているが、昭和三十六年に八十二歳であつた祖母の、エンピツ書きの大きな字であふれている便箋を見るたびに、私は子どもころの田舎で祖母とすごしたときに心が戻る。祖母から父へ伝えられた「人を愛する心」、母方の祖母から母に伝えられた「人を愛する心」を母はよく「母から娘へ……」と言つて人を愛することを私に話していた。

昭和六十年に母は亡くなった。亡くなった日の父の日記はスガスガしい、亡くなる前の数か月余りの日記を読むのはかなりつらいが、父から母への「愛・献心」にあふれている。

父は母が死んでも「恋愛」をしていた。二人ともいなくなった今、空の彼方、星空の中できつと「恋愛」をしていると私は思いたい。

地上に残された私は母の遺書どおり「強く生きよ」と生きているかどうか……。

両親から伝えられた愛の形を充分に全うしているかどうか……。

こればかりはあの世とやらにお使いを出して両親に問うわけにはいかない。

# 2002年春期生募集

## ゲシュタルト・セラピー専門家養成講座

ゲシュタルト・セラピーは言語だけに依存せず非言語的な手がかりを重視します。水泳を理論だけで教えるのは無理なように若干の基本的な原則について語った後エクササイズを体験したり、過去や幼児体験を分析せずに「今ここ」でエンプティ・チェアの方法を活用し再現して体験するというやり方をします。色々な実験を自発的に実行することで行動変化を体験することが出来ます。

当研究所の専門家養成コースは、ゲシュタルト理論と指導技術を拾得し、加えてセクシャリティーを学び、人間の深層に複雑に絡み合った問題解決に対するきめ細かい手助けが出来る高度なセラピストを目指します。

- ◆就学期間 基礎課程2年+専門課程2年
- ◆開講時期 4月15日(月)
- ◆資格 20歳以上
- ◆合宿 年2回 春・秋

◎アルカンシエル研修館(2001年9月開校)にて合宿養成講座

## ゲシュタルト・セラピー ベーシック講座

人は90%以上、無意識の中に生活しています。無意識の行動パターンがその人の性格なのです。私たちは自分自身を100%理解し見ることは出来ないために自分とはどんな性格かわからないでいます。「自分を知りたい。自由に表現したい。人間関係を豊かにしたい。愛されたい。尊敬されたい。」と秘かに願っているのならゲシュタルトセラピー「どのような自分なのかに気付く」初歩的なワークショップを体験して下さい。そこには数々の楽しいエクササイズが用意されていますので、自然に自分のありのままの感情や、反応、常にしている表現の仕方や癖に気付き、生活上でのコミュニケーションの取り方、話し方として自分自身に責任を持つ能力が高められるからです。

- ◆就学期間 3ヵ月・短期集中講座
- ◆開講時期 春期4月・秋期9月・冬期1月
- ◆1日ワークショップ 第3日曜日 AM10:30~PM5:00

◎アルカンシエル研修館(2001年9月開校)にて合宿養成講座

## アロマテラピスト養成講座 / トリートメント専門講座

解剖生理学、メディカルハーブ、フィットセラピー、コンサルテーション、心理療法、リンパドレナージュ、フェイシャルマッサージなど美容と心理、健康をトータル的に学ぶ講座です。

- ◆就学期間 6ヵ月
- ◆開講時期 春期5月・秋期11月
- ◆修了証書発行 / インターン・派遣制度有り。

## リフレクソロジスト養成講座

心と身体を癒すコミュニケーション型マッサージを提案。足・脚だけでなくトータルケアを目指し、心身のバランスや普段の食生活から個人にあったアドバイスのできる専門科を養成します。プロとして活躍できるよう心身のケアから接客マナーまで現場感覚で学びます。

- ◆就学期間 6ヵ月
- ◆開講時期 春期4月・秋期10月
- ◆修了証書発行 / インターン・派遣制度有り。

## 呼吸法講座

深い呼吸は、心理的攻撃を受けた後の体にブロックされている心理問題の解決を促し、体の代謝を高め、健康を取り戻します。

●毎月1回



**ゲシュタルト療法**  
**無料体験日**  
毎月第2水曜日 PM 7:00~9:00



**東京ヒューマニックス研究所**

J R大塚駅南口より徒歩2分

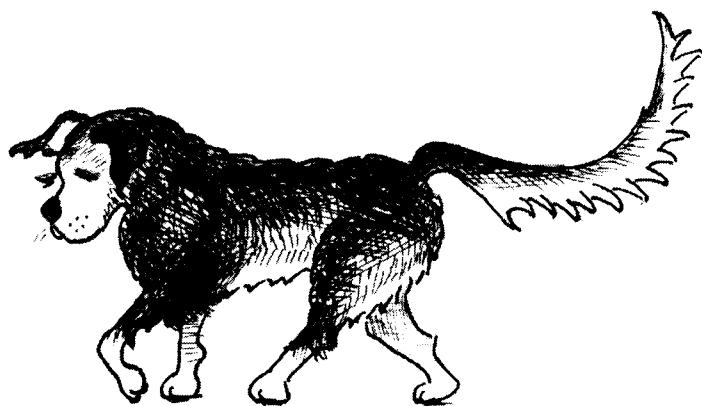
〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-34-6 MOAビル402

TEL 03-3986-2420 FAX 03-3986-2422

<http://www.thl.co.jp>

# 特集

## 夫婦げんか



# 夫婦ゲンカの効用

千葉県船橋市 祥 まゆ美

「ああ、分かった、もう何も手を出さないぞ!」

そう捨てゼリフを吐き、玄關を出ていった夫は数日帰らなかった。

その日初めて夫の怒鳴り声を聞いた。知り合つて五年あまり、温厚でもの静かな態度をくずさなかった彼の本性をかいま見た気がした。

ことの発端は三歳の娘と夫との攻防戦である。

「もっと遊びたい、ねたくないよ!」  
パジャマを脱ぎ捨てて泣き叫ばんばかりに反抗する娘を、なだめすかす夫。勝負ははなから見えている。夫は絶対に娘を叱れないのだ。

私だったら「ダメ」の一言でフトン

に引きずり込み、電気を消して強引に勝ちを取る。彼にはそんな手荒な真似はできない。溺愛する娘の言いなりになって、遊んでやることはどんなに辛くてもいとわないのだが……。

私はますますエスカレートする娘のワガママにヘキエキしている夫のようすを、襖一枚隔ててうかがっていた。内心、今、出ていかなくちやと思いがらも、夫の甘やかしぶりに苛立っていたのだ。もう時計は十時を過ぎていく。

いきなり襖が開いた。

「何であなたは出てこないんだ、何もかも、オレにやらせて、いつも逃げるのはなぜだ」

こうなったら売り言葉に買い言葉である。

「あなたが甘やかすから、つけ上がるのよ、私に責任はないわよ。もう、子どものことは放つといて、何もしないで!」

夫の怒鳴り声に応戦するような激しい物言いで言い返した。

こんなケンカは初めてである。夫は気に入らないことがあると、たいいてい押し黙ってしまうが、よほど頭に來たのだろう。私をいまいましげににらみつけた。

肝心の娘は私たちの剣幕にそれほど驚いたのだろう、さつさとフトンの中にもぐり込んでしまった。

その夜はなかなか寝つけなかった。飲みつけないウイスキーを少しなめながら、台所のテーブルについていると、同居している長女がのぞいて言った。

「えらく騒がしかったけど、出て行っちゃったんだ……どうせお店に行っただんでしょ。いつもそうだね」

「うん、こんなこと、でも初めてよ。」



あの人、怒鳴るなんて、信じらんないわ……」

朝方には少しウトウトしたが、頭が冴えていつもどおりに休めず、朝刊が投かんされる音を聞いていた。

彼と知り合ったところ、結婚した今と、どこが違うかと考えても、目立つて変化がない。あいかわらず「です、ます調」で話しかけてくる。あまり本音を言わない。自分の生活を保っている。戸籍上では夫なのだが、まるで他人行儀な面をくずさないのだ。私はといえば、全く、なれなれしく、あつかましい。夫は生活を共にしていても、ナマの自分を出さずこちらの態度に応じて受け身に徹している。

それは生まれてきた娘に対して、度が過ぎるほどで、召使のごとく、常にスタンバイしているのだ。

しかし、本音は彼なりにあるし、無理にも限度というものがある。ときどき彼は、仕事場へ逃げ込み、帰宅拒否する。本人に面と向かってノーを言えない性分なのだ。以前はそれを単純に

優しさでカン違いしていた。人に対して、あまりにも受け身でやってゆく、という生き方は、彼なりにやむにやまねず身につけた処世術だと思う。

夫は小学校入学前に父を病気で失った。残された母親と、四人の子どもたち、祖母の生活は極貧だったと言う。母親はある宗教に狂った。布教所へ日参し、日夜その宗教にすべてをたくし続け、子どもも、亡父の義母も、かえり見なかったと夫が言っていた。

夫たちきょうだいは小学校を出るとすぐに職人の修業に出された。口べらしである。

身軽になった母親は、布教所へ住み込みとなって、自宅も引き払ってしまった。

まだ十三歳で他家へ出された夫は、どんなに淋しくても帰る家がなかった。預けられた職場に順応して生きるしかすべがないのだ。

生来の優しい性分に加えて、生い立ちの過酷さが、極端に自我を抑える生き方を身につけさせたのだろうか。

自分の欲求、要求を言わない。でも分かって察してほしい。彼の心は自分の感情を出せぬゆえにいつも傷ついていたと思う。

知り合ったところ、あまりに感受性が似通っていると、彼に対して思っていた。そこに惹かれた。まるで自分自身を見ているように、彼をみつめていた。まったく口にしなくても彼は気がついて、私のために私がしてほしいことをしてくれた。今考えると、異常な世界である。

私は彼から、今までに経験しなかったほど、尽くされた。奉仕されたと言い替えてもいい。前夫との離婚によってボロボロに傷つき、くたびれ果てていた私にとって、泉のようにあふれる彼からの想いはありがたく、大切に思えた。しかし、今ふりかえると、あるがままの彼を知ることのなかった見た方だったと思う。

ケンカの後、夫が帰宅しなくなっただ目、さすがに心配で、ようすを見に仕事場へ向かった。駅前で彼の好物

を買い、二人分の弁当も忘れずに仕入れ、バスに乗った。ドキドキする。どんな顔をして会えばよいのだろうか。まだ怒っているだろうか。頭の中であれこれと思いめぐらした。今ならまだ引き返せる、少し腰が引けていた。

バスが着いたのは昼になるころだった。店の中をのぞくと、二階に居るらしく姿が見えない。裏へ回って、事務

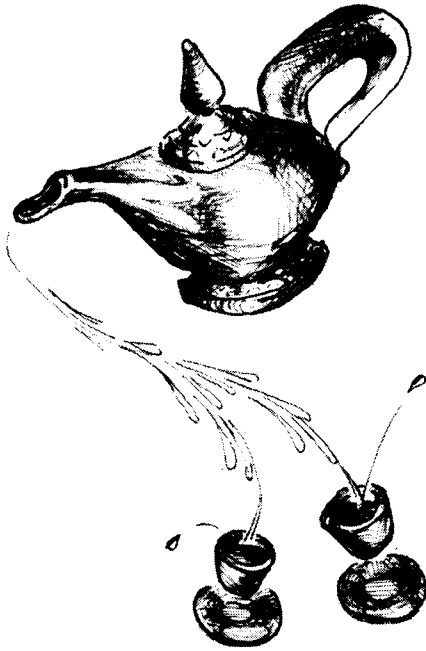
所に入ってみた。

二階には、ベッドと台所があつて、寝泊まりできる。昼食を作っているらしい。物音がするから居るのは確かだが、上に行くのがこわくて声をかけずにいた。

一時を過ぎて、夫が下りてきた。

「おや、めずらしいですね」

私はだまって、自分の持ってきた弁



当を食べ始めていた。夫は湯飲みに二人分のお茶をいれ、一つを私のいた机に置いた。

言わなくては、と思った。

「みんな……心配してるのよ。娘たちも、気にしてるわ」

「今日あたり帰ろうかと思つてた：

……」

お茶をひと口すすつて言う。

「このごろ、おふくろの入院や、兄きのことやいろいろ大変で、ついあなたに当たってしまったんだ」

夫はみるからに疲れた顔をしていた。

「私も意地悪だったわ。分かつて、助け舟も出さなくて。無理しないで自分の本音を言わないと、続かないよ、先は長いんだもの」

そう言いながら、彼にはできないのだらうと思つた。いつも他者優先で自分を後回しにして生きてきた彼。それが彼の生き方だ。

「しんどいときは、ここに泊まって休んでよ。家に帰ると娘の召使になっ

ちやうから、休めないもの、仕方ないよ」

私はそう言うしかなかった。

彼ほど徹底していないが、私もあまり本音を言えない。心の中で怒っている、イヤだと思っても、しばしばにつこり笑顔で応対してしまう。相手のきげんをそこねることが、怖い。拒否されるくらいなら、自分を殺して迎合する。ほとんど無意識でそうしてしまう。後で自己ケンオに陥るが、自分で自分を自由にできない。

そんな自分を変えたいと思っていた。

「アサーション、自己表現、主張の訓練」というものがあると知り、サークルに入会した。非主張的、自分の気持ちを表現しない、できないのは、自己の権利意識の希薄さ、自分を守る意識の弱さに起因すると知って、自分の成育歴をふり返った。母親に支配され、虐待された子ども時代をあらためて思い返した。

自分自身を尊重し大切に生きるなん

で、親からは教えられなかった。学校でもテストの点で分別され、低い者は見下された。

アサーションという、自己尊重の方法を学びはじめて、少しずつ、あるがままの自分を大切に生きる、ということを知り、体得しはじめたが、日々の生活の場面で、それを応用できるには、まだまだ時間が必要だ。

夫は、人に尽くしすぎるほど適応する生き方で身を守ってきたのだろう。しかし、ふりかかる火の粉は払えても、自分自身の心身を、消耗させてしまう。自分の思いを率直に言い、ケンカ（権力争い）にならない話し合いをできればいいのだが……。

夫との怒鳴り合いのケンカは、いろいろなことを考えさせた。夫と向かい合う、きつかけにもなった。自分自身の生き方を問い直すことをうながした。これからは上手なケンカというか、発展的自己主張をしたいと思う。そのためには、自分の気持ちを無視せずにつめること。自分にも他人にもいつ

わらないことが大切なのだ。ひとつひとつ、自分の心を確かめて、それを受け入れることが、自己尊重するという行為なのだろう。

「あなたが自分を大事にしないと、周りの私たちもこまるのよ……。無理だったら止めて休んでね、自分は自分で守らなくちゃ……」

私は勉強中のアサーションを語った。その言葉は自分自身にさえ、のめこめてはいないのだが、彼と共に理解できたらしい。

夫はその翌日、夜帰宅した。娘とべったりで遊んでいる。またフトンに入る前は大騒ぎかなあと、不安だった。さつさとベッドに逃げ込んでいいよと言っておいたが、おそらくできないだろうから、やはり私が娘を抱きかかえてひと勝負するしかないか……。

これからは、娘の成長を待ちつつ、夫も私も少しずつ努力できたらと思う。あの日、私を怒鳴った夫は小さなハードルをひとつ越えたのかも知れない……。

# 信頼があればこそ

埼玉県さいたま市

新井純子

## はじめに

アサーティブ・トレーニングという言葉を知っているだろうか？ 人とのコミュニケーションをとるうえで、感情的、過激にならず、だんまりでもなく、言いたいことを過不足なく相手に伝えること、爽やかに自己主張をする、ための練習方法だ。

結婚してからのはじめの八年はだんまりを、その後の八年は過激に、爽やかな自己主張とはほど遠い会話パターンを夫に仕掛けていた。ジェットコースターのように、感情の起伏の激しい私に夫はよくつき合ってきてくれたと思う。今となれば感謝している。

ここ二年ほどようやく自分のパターンを認識し、ずいぶんと落ち着いて言いたいことを言えるようになった。とはいってもものの相変わらず失敗は多いし、反省もすることもあるのだが。

夫婦喧嘩は信頼感がなければ、対等の関係でなければ、できないし成り立たない、と私は思う。

## 結婚前半期八年を振り返る

恋愛結婚だったけど、知り合ってわりとすぐに結婚をした。お互いに勢いで一緒になったので、価値観だとか、暮らしのスタイルだとかを知らずに暮らすことになった。

育った環境が違うのだから、小さな

「あれ」「ほう」「ふーん」は出てくるのが普通で、それを言葉に出してそのときどきに解決、解消、納得をしなから二人の新しい暮らしやスタイルを作っていたら、その結婚や共同生活はおおむね成功と言えるし、くつろぎのある空間や信頼関係が結べるはずだ。

しかし、そうでない場合、一方に不満が溜まってくる。本人は我慢を重ねているので急に爆発している意識はないが、相手にいっさい言葉で表現していないから、心の内がわかりようがない。相手はどうしてこんなに急に激怒するのか理解に苦しむことになる。女のコヒステリーと片づけられてしまう。「また、始まったか」と思われ、真剣に話を聞いてもらえない。

私は最初の八年間を彼にあわせて（と勝手に思っているが）、彼の氣に入る暮らし方をしていった。パートナーというよりは、まるで聞き分けのいい母のような存在として。

でも、母たちのように人生経験はなかったし、未熟者であるわけだし、何

よりも母親ではないのだから、自分が思っているほどうまくいくわけがない。転勤族で心を打ち明けられるほどの友人、知人もなく、今なら一笑するのだけれど変なプライドもあって、私は孤独に家事、育児をしていた。

夫は自分のことだけで精一杯だった。私のことなど思いやる気持ちがないかった。また、私も彼に気づかせようなそぶりなんてしなかった。だから一方的に彼が悪いわけではない。

基本的に優しいし、信頼できうる男ではある。

暴力を振るうだとか、他に女を作って帰ってこないだとか、酒飲みだとか（私のほうが酒飲み）、そういうことはいっさいなくて、いい人だ。

二人目の子どもができて、外に遊びに行けない私に、家族旅行と称して、自分の好きなゴルフ場に連れていってくれたことがある。そこはゴルフ場の他に宿泊施設としてのホテル、プールやお花畑があつてそれなりにゴルフをしなくても、子ども連れでも楽しめる

場所だった。

でも、乗用車の後部座席にまだ二歳半になる子どもと、生まれて四か月の赤ん坊をかかえて座る私は、その場所にたどり着くまでにくたくたにくたびれていた。また、幼い子ども二人の世話はホテルに着こうが、レストランに入ろうが私ひとりの肩に任せられるの

であれば、さらなる負担が加わるというものだ。私にとっては新鮮味には欠けるけど、何でも知り尽くしている家において、自分のペースで一日を過ごすほうがよほど気楽でくつろげる。

私がほしかったのは、「ひとり」になる時間。夫が子どもを一時間でも連れ出してくれること。「よくやってる



よね、ありがとう」という一言。そんな些細なことだったと思う。

家に戻り、車の窮屈さかげんを話したら、すぐ乗用車からワゴン車に買い換えた。

「ワゴン車なら子どもが眠ったら、腕から離し、ごろりと寝かせてあげられるでしょ。ひとりがワンシートで、くつろげるでしょ」

という彼の理論。優しさなんだけど……。

でも何かが違う。

病気をした妻に「ゆっくり休みなさい。僕は外で食べてくるから」という夫たちの優しさに似ている。「病気で寝ている私の食事はどうなるの？ ため込んでいる家事は誰がしてくれるの？」である。

でも、そんなことを考えたことなどないのだろう。父を早くに亡くし、母、姉、妹という女ばかりの中で育ってきたからなのだろう。私も、また、彼に上手に説明できなかったし、あきらめていたところがある。女はそういうも

の、妻はそうして当たり前、お母さんは……。

そうやって心の中に不満がどんどん溜まってきた。そうなるとうなるか、弱い子どもに出てしまうのだ。私の不満のはけ口はかわいらしい子どもたちに向けられた。今、幼児虐待が取りざたされ、大きな社会問題になっているが、私もその延長線上にいたことは確かだ。

小さいことにいちいち目くじらをたてて、子どもを叱ってしまう。あれこれ指示してしまう。子どものやることを余裕を持って見守ってられない。私は、子どもは大切に思っていたし、ちゃんと子育てしたいと思っていた。ところが私のやっていることは全くの正反対で、子どもの健やかな成長どころか、ダメな子どもを育てるために一生懸命やっているようなものだった。

そんな自分がつくづく情けなく、嫌だった。心が休まる日がなかった。

どうしてなのだろう？

私はあることに気がついていった。悪の根元は対等の大人である夫にちゃんと話していないということに。

でもどうやって彼と話せばいいのだろうか？

どうしていいかわからなかったけど、最初にやったことは自分自身を見つめ直すということをしてみた。

私が好きなことは何だろうか？ 楽しいと思うことは？ 子どもは好きかどうか？ 子どもの心穏やか？ 夫に何をしてもらいたいのか？ 夫の家族は好きか？ 自分の育った家の雰囲気はどうだったろうか？ 勉強は好きだったか？ 幸せと思うときはどんな瞬間？ 私に関するありとあらゆることを検証し始めた。

するとどうだろうか、私がいらいらしていたことの多くは子どもたちとは全く関係のないことだということがしかりとした形で見えてきた。そうすると、不思議なことに、子どもたちへの小言が減ってくる。子どもたちへの

過度な期待が薄れていく。ちゃんと夫に話せるようになっていく。話したいことが見えてくるわけだから当たり前だ。

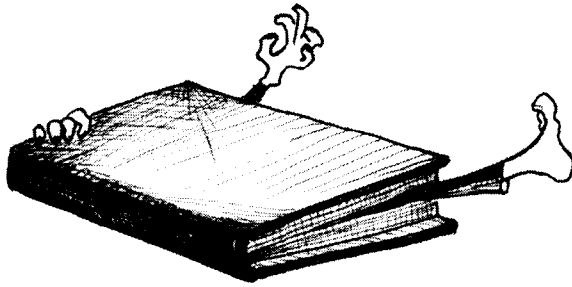
### 後半の八年は

#### 過激なもの言いになる

ところが夫に話し始めたらしまらな  
い。それも今までの恨みつらみがある  
ものだから、今問題にされている以外  
のことまで口から出てくる。感情が高  
ぶってついには泣き出してしまふ。

子どもたちが「お父さん、お母さん  
喧嘩しないで」と言うほどだ。私は  
「喧嘩じゃないの、お話し合い」と言  
うけれど、こんなお話し合いはない。  
まだまだ幼い子どもたちは不安になっ  
たことだろう。

偉い先生や、大人に「子どもの前で  
は夫婦仲よくしましょう」と言われた  
が、また、今ならそうだと思うけれど、  
そのころはエネルギーをため込んで  
は、彼の胸ぐらをつかむ勢いで喧嘩を  
ふっかけていた。



あるとき夫が、「なんだか本だとか、  
人に影響されているみたいだね」と言  
ったことがある。私はまたしてもカッ  
ときて「そうではないの、私が今まで  
思っていること、考えていることを、  
この人たちは上手に表現してくれてい  
るのよ、だから、私は夢中なの」と反  
論したことがある。

また、今まではほとんど彼に不平不  
満を表現していなかったわけだから、  
私の変容ぶりに彼も驚き、戸惑ったと  
思う。

だから人とのコミュニケーションに  
大切なことはそのときの気持ち、不平、  
不満はため込まずに、そのときどきに  
表現することだと思っている。それを  
すれば、ことは大きくなる前におおか  
た片づくし、心は安定する。上手にコ  
ミュニケーションできる。

よく、夫の定年を待つて離婚をする  
妻の話を聞くことがある。なんだかお  
互いの人生に不誠実だし、もったいな  
いように思う。もつと若いうちからち  
やんと夫に話しておけば、もう少し違

った関係になるようにも思う。以前は「それみたことか、男が悪い」だったが、今は「うーん、女も悪い、ちゃんと向き合ってないよな」と思う。

### 信頼があればこそ

先日、息子の中学校の親睦会に参加したときのこと。最後に挨拶をされた先生の言葉遣いがよくないと夫に話した。

ほとんど参加しているのがお母さんばかりなのに、私たちを目の前にして、その先生は「父兄の皆様」と挨拶をした。帰り際に、私はその先生に「お母さんばかりなのに、父兄はないでしよう。今なら保護者という的確でいい言葉があるではありませんか?！」と言ったことを夫に報告して、議論になった。「話してもわからない人にそんなにエネルギー使うなよ」

「その辺のおじさんが言ってるなら私、何も言わないけど、彼は学校の先生で、子どもたちが彼らの影響を凄く受けるんだよ。許せないよ。それにな

んて言ったと思う、『父兄という言葉ではなく、じゃあなんて言えばいいんですか』だって。勉強不足じゃない。私、苦情処理委員会に報告しようかしら。私より若い先生だよ」と言った。

「だって、『父兄』って言葉は市民権得てるんじゃない。別にその先生も男尊女卑なんて思っただけで使っていない。いつきに変えるんじゃないって、ほら、三十年かかってそうだったものは、元に戻るのにも三十年かかるんだから」と諭された。

そんなことを二十分ほどやり合っただろうか。

ふっと「あのさー私泣かなくなったよね。こうやって全然平気でしゃべれるようになったね」と夫に言った。

高校生と中学生に成長した子どもたちも、親二人のやりとりで動揺することなくテレビを見ていた。

私と夫の結婚生活は喧嘩の歴史ともいえる。

喧嘩にはエネルギーがものすごく必要だ。以前のような力強さはなくなっ

たし、頻度も少なくなったけど、相変わらずエネルギーを蓄えては胸ぐらをつかんで揺さぶっているような喧嘩をする。

でも、不思議なのだが人からは「仲よしだ」と言われることも多い。喧嘩するほど仲がよいということなのだろうか。

### 最後に

自己主張をするって悪くない。またそれは相手にも自己主張をする権利を認めることでもある。

「私はあなの。こうなの。ここは譲るわ。そうなの、そこんとこが困ってることなのね」。こういうことのやりとりをして、相手の言い分も知った上で、実行に移すことこそ、「自由」ということではないのだろうか。決してわがままなことではない。

「女だてらに自己主張するなんて奥ゆかしくもない」、などというようなジエンダーバイアスにとらわれていると、誰とも気持ちのよい会話はできな



いと思う。

自己主張をするということは、信頼しあっていればこそ、自分を信頼していればこそできることでもある。また、真に大人という人たちならば、言いたいことを言えずにもじもじして、その

はけ口に弱い者に当たっていないで、大人に、夫に、男に、権力に、もの申していきたい。

私は夫との喧嘩でそんなことを学んだ。

## 夫の小言

横浜市緑区

三田サキ（65歳）

昭和五十年八月二十五日に結婚した私たち夫婦（結婚生活二十六年）は決して円満ばかりとは言えないが、まああ仲のよいほうではないかと思える。それでもなぜか夫婦喧嘩はよくする。でもここ十年来は深刻な喧嘩はしていない。二人の子どもたちが巣立っていった夫婦二人だけの生活になって以来喧嘩をしなくなった。

家庭の中に二人だけしかない生活

はお互いに助け合わなければやっていけないということもあって、夫婦が自然に向き合うようになってきた。こんな中、喧嘩といえば夫が私の落ち度に対して、口うるさく、じぐじぐと小言を言うときである。私はあまり説教されるとかっとなる性格だから、これagerもそも喧嘩の種になるのである。

私は大ざっぱな性格、夫はきめ細かな神経の持ち主で、細かいところに気

がつく人である。このちがいが理由でいつも喧嘩になるのである。特に夫が定年退職（昭和六十三年）して暇になってからは、私のやることなすことが、いちいち気になり目につくことが多くなった。

例えば私が家事をやっている最中に台所に入ってきて、翌朝のご飯のお米を洗っているのを「明日の米を洗うのはまだ早いではないか」と言うし、ガスコンロでおかずを煮炊きしていると「ああガスが強い強い。もつたいないから火を細めなさい」なんて言うし、また洗濯機ですすぎ洗いをしていると「ああ水の出しすぎだよ。水がもったいない弱くしなさい」なんて言う。でも他のことに対しては絶対にけちではないのである。

また「冷蔵庫の中に物を入れるときはきれいに整理整頓しなさい」などと言って自分の手でちゃんと入れ直すのである。こんな生活の中、私は家事をやる度に何か言われるのではないかと、一時ノイローゼ気味になったこと

もあつた。だが今はもうこんな生活にも何とかなれてきた。

### 夫が家事をやる

そして夫は口でうるさく言うだけで



はなく、自分で率先して家事を手伝うようになった。朝早くから起きて朝食の仕度をしてくれるようになってしまった。そして部屋の掃除をするときは彼が掃除機をかける、私はどうきんが

けをするだけ、うっかりすると洗濯もやる。買い物も自転車に乗ってスーパーに通いつばなしである。

おかげで私はすごく楽になったが、これではあまりにもやり過ぎだと思いい、夫に抗議するが何の効果もない。これではいけない何とか手を打たなければならぬと考え、夫が手を出す前に、私のほうが先に仕事をとられないように気を配るが、なかなか思うようにはいかないで困ってしまう。

### 家事の取り合い

今ではお互いに仕事の取り合いで喧嘩になるのである。こうして毎日顔を突き合わせて暮らしているが、至って平和な日々が多い。でもでも軽い夫婦喧嘩は続く。ある日私が台所で仕事をしていると、夫が台所に入ってきて「ああだめだ、そんなやり方はだめだめ、それは俺がやらなければだめだ向こうに行ってる、お前にはまかせておけない」と言っている私の仕事をとりあげた。私はその言葉にかつときて、もう

たまらなくなって爆発寸前までなってしまうた。

## ざんげ

だがそのときちょっと待ってという気持ちになり、その場をのがれ、とんとんと二階にとびあがり、からかみをびたつとしめ完全に一人きりになった。そして修行中の座禅を始めた。でも始めたといっても、不満で頭の中がぐらぐら煮えたぎっているので座っても冷静に座れるわけがない。でもそれを何とか抑えながら無理やりに座り続けた。すると不思議なことに頭の中がだんだんと静まり、三、四十分座っていると頭の中のもやが薄らぎ、ちょうど空の雲が消えていくときのように、少しずつ頭の中のもやが去っていくのである。

すると私の心も楽になりすっきりした気分になる。そして一時間も座ったころには、今まで不満だった気持ちが消えて反対に感謝の心に変わっている。そうになると、「ああ悪いのはお父

さんではなく私のほうだった」と気づき、心の中で「お父さんごめんなさい」と言いながら両手を合わせてざんげするのである。

これまでは本気で喧嘩していたのだが、この方法を行うようになってからは大喧嘩がほなくなったように思える。私が座禅を始めてから四十二年の歳月が流れたが、今こうやって、その成果が表われてきたのかと、つくづく嬉しい気持ちになる。

ここ二年くらい前から座禅する時間を一日五時間に増やして座り続けるようになった。そしてその座禅が毎日の精神生活の心の糧であり、私の安らぎであり、また、夫婦喧嘩にならないようにする、平和に生きるための武器でもあると信じる。そしていつまでも座り続け、この平和な家庭生活が永く続くように祈るばかりである。

ね、お父さん。夫婦喧嘩はこれから軽く済ませましょうね。

(え・橋本美智子)

## 子どもたちはあなたとの出会いを待っています！

数学教育研究会は、1969年に設立された学習塾です。

私たちは、設立以来「水道方式」と「量」の系統に基づいた算数・数学教育、科学的・体系的な国語・英語教育の研究を重ねてきました。

私たちの教材で子どもたちを教えてください。

新しい先生の学習や教育の場を設けるとともに、相談の窓口も充実させ、安心して子どもたちを教えていただける体制を整えています。

数学教育研究会の教材で、ぜひ、子どもたちを教えてください。

子どもたちはあなたとの出会いを待っています。

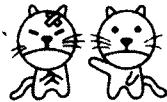
■ 0120-420-531

数学顧問：徳林浩（前数学教育協議会委員長・明治大学名誉教授）

国語顧問：鈴木康之（大東文化大学教授〔言語学〕）

本部：〒160-0022 東京都新宿区新宿4-1-23-7F

http://www.lektion.co.jp toiwase@lektion.co.jp



数学教育研究会



# エッセイスト・クラブ

## 京の節分

大阪市城東区 布施幸子

幼いころ、節分の日に母が赤い布切れで私の髪を結わえ、小さな髻を作ってくれるのが嬉しかった。が、「うまいこと、お化けになったがな」と言われ、あの恐ろしい化けものを連想し、「ちがう、わたしはお化けやない」やつきになって抗議したのを憶えている。

昔は未婚、既婚の女性のヘア・スタイルが決まっていたが、節分の日に限ってはミセスが桃割れに結ってミスをやそおったり、ミスが丸髻姿でミセスに扮したりが許された。そんな変装を「お化け」と言ったらいい。

京都で育った私は、お化けの由来についてこんな話を聞いたことがある。江戸時代の歌舞伎俳優、七代目片岡仁左衛門が、節分に鶴の吸物を食べたところ大当

たりをとったので、縁起がよいと毎年のしきたりにした。すると近所の娘さんらが鶴の羽をもらいに行って髪に挿すようになった。やがて鶴の羽のカンザシがはやりだして便乗商売が続出。片岡家では定紋入りのカンザシを出すことにした。定紋カンザシを手に入れようと、ミスもミセスも節分詣でを口実に片岡家へとまっしぐら。そのとき頭巾や面で顔をかくしたのが「お化け」の始まりだという。

今でも節分の京の町では、日本髪風に結って和服を着た娘さんの姿がよく見られる。子ども用の付け髻も売られていて、鹿の子の手絡や薄絹の花飾りがかわいらしい。底冷えの古都がはなやぐ日となっている。

節分行事はさまざまだが、吉田神社、平安神宮、鞍馬寺は古式にのっとった追儺式で名高い。

追儺は、紀元前三世紀ごろから古代中国に始まった厄よけ行事で、もともとは季節の分かれ目ということとで年四回行われていた。それが唐の時代には年越しの習俗となり、大みそかの宮中行事としてわが国へ伝わった。

平安時代には「鬼やらい」ともいい、宿直ガードマンたる大舎人八人が鬼征伐の主役である方相氏に扮した。八人の総司令官は「追人」とよばれ、金色四つ目が光る面をかぶり赤を配した黒衣をまとい武器を手に先頭に立つ。大勢の家来が童子として後に並び、陰陽

師と追人の指図で鬼を追っぱらう。

といっても、逃げまどう鬼はいないのが古式であった。元来が鬼とは「隠」であって姿が見えぬことを意味する。牛のツノをはやし、虎の皮のブリーフをはいた姿は「ウシトラの方角を鬼門にした」ことからの想像のようだ。だから鬼がいぬのが正しい行事で、それを忠実に伝えているのが鞍馬寺の節分会である。



ところが、平安神宮や吉田神社の鬼やらいにはカラフルな鬼どもが登場する。じつは鬼なし追難ではなんともたよりなく、こともあろうに鬼追討総司令官の追人が、「けつたいな姿やわ、あれが鬼え」と言われたりして困ったあげく、室町時代には鬼役登場のわかりやすい演出に変わったのだ。が、この風習もやがてすたれ宮中でも豆まき中心の節分に移っていった。「鬼は外、福は内」とどなって、鬼を追いつ出す豆打ちの風俗は、簡単で安上がりだから室町時代からこつち一般行事として定着したのだろう。ただし「九鬼さん」という苗字のお宅などでは「鬼は内」と叫ぶそうだがほんとうだろうか。

京都では、花街の芸妓さんたちが豆をまく八坂神社、大護摩がたかれる狸谷不動尊、懸想文を売る須賀神社、山伏が集まる聖護院、まだまだ多くの社寺で個性ある行事が行われるが、幕末の新選組で有名な壬生にある壬生寺では無言劇、「節分」という狂言が演じられる。

節分の日、後家は神棚に灯明をあげ、柊に鰯の頭をさして門口におく。ところが蓑笠をつけた鬼がやってきて、嫌いなはずの鰯を食べてしまい、後家をおびきだす。

後家は鬼と知って逃げこむが、鬼は打出の小槌を持つていて、着物やら頭巾を出して変装、つまり節分の「お化け」姿で家にながらこむ。そうして女性の好みそ

うな衣服やアクセサリーをどつきり贈って機嫌をとる。後家は鬼に酒を飲ませて泥酔したところを丸はだかにして追い出す。打出の小槌ももちろん取り上げ、豆をいやほどぶつけて追い払う。

この狂言の鬼は、鬼の名に傷がつきそうな弱虫である。それに対して人間、それも女は後家になっても強いを通りこしてえげつない。わが身に当てはめるに付けても嫌になつてしまうのである。

## 雪明かり

山内志保（73歳）

『雪明かり』という言葉、蛍雪という漢語を知つてはいたが、電灯が完備した時代、しかも都会に生まれた者にとつてはそれはほとんど経験するはずのないことであつた。雪の降つた夜外出から帰つたとしても電灯の光のほうに輝いていて、雪明かりなど感じたこともない。雪の降る夜、わざわざ外に出たりすることもなくすごしてしまつてきている。

そういう私が雪明かりということをしみじみ感じる所に行つた。

フィンランドの首都ヘルシンキに夜おそく着いて駅前のホテルに泊まつたわれわれは、翌朝暗いうちにヘルシンキを發つた。

ヘルシンキを六時五十五分發という時間は街はまだ夜と同じで、しつかりした扉で出入りする駅はこうこうと明かりがついて、売店ではおいしそうなハムや卵をはさんだパンが売られていた。

雪のちらつく雪国の駅を列車がすべり出すと、忘れていた雪明かりという言葉思い出した。朝のおそい国で太陽の出る前の列車の旅では、何も外の風景は見えず退屈するであろうと思つていたが、それがどうしてどうして雪明かりでしつかりと外の風景が眺められた。雪の降りつづく原に可愛らしい家々、それに林の木々、フィンランドの美しい風景がちゃんと眺められるのである。これは思つてもいなかったことであつた。

ホテルでくばられたお弁当を食べ終えたころ、右手の地平線のあたりがしらじらとしてきた。太陽がほつてきたのだ。それから真赤な太陽がぼつかりとあがつた。ああ大きな太陽だとびっくりして見ていると、ふしぎなことにそれはちつとも上にのぼらないでそのまま地平線をわずかに出たばかりなのだ。あら!! どうなっているの、太陽は上にのぼらないの、と私の頭は混乱した。そうか、ここは昼の短い所だった、だから太陽はのぼらないのだ、と納得した。

そのころ列車はフィンランドとロシアの国境を越えた。外は相変わらず雪が降り続けている。

国境とは鉄条網に囲まれた緩衝地帯と、両国それぞれの警備塔の立つところであった。

太陽は地平線から二十度くらいの所まであがったかなあと思うくらいで、そのままサンクトペテルブルグへ六時間の旅は終わった。

サンクトペテルブルグに二日間滞在して空路ヘルシンキにもどり、ここで半日観光をして、夜の飛行機でロバニエミへ。

ここはもう北極圏に位置していて、博物館には北極圏に生きる動物たちと、そこにくらす人々の生活文化、自然環境の資料が展示されていた。それからサンタクロースビレッジでサンタクロースとともに写真を取り握手をして、夢のあるたくさんのお土産品を楽しみ、サンタクロースからのクリスマスカードを孫たちに出したりした。

午後はいよいよユッラスへと三時間のバスの旅であったが、ここはどこまでも雪と林の世界で、道路ももちろん雪のままの道で、雪の性質のせいか結構スピードを出して車は走るが危険を感じることもなく、次第にうす暗くなり、ただただ雪明かりの林の中を車は走った。

ホテルはログコテージで暖炉やサウナがあり、翌日は犬橇、トナカイ橇と楽しんだ。この土地の人々が以前住んでいた小屋のような家が、観光用につくられていた。トナカイの毛皮を敷き、真中で薪を燃やして暖をとり料理する小屋に入ってみて、なるほど灯りがなくても雪明かりと薪のもえる明りで、この夜の長い土地で太古から人々が暮らすことができたのだと思った。ちなみにサンクトペテルブルグの人口は五〇〇万人、



フィンランドの人口は五〇〇万人、そのうち二〇〇万人がラップランドに住み、トナカイも二〇〇万頭いるということであつた。

## 私たち『仮面・嫁と姑』？

大阪府豊中市 中松ミナ子

十七年前、息子に、お嫁さんが決まつたとき、（あとは娘が嫁入りしたら、我々親の責任も終了近しつてこと。いよいよ、解放される）と楽天家の本領發揮で私は、有頂天になつていた。ところが、待つてましたとばかりに、お節介者が登場、「アంత、嫁さん来たら、今までと同じやり方してたらアカンよ」「他人（この表現はイヤ）が入ったら、何や、かんやと氣遣わんといかんし、シンドイよ」

「はじめが肝心やから、ビシツとしいや」等々、吹き込むのである。（へへ、そんなもんなんか……どうしよう）と、にわかに不安が募つてきた。ちょうどそんなころ、夫の実家で長兄に「嫁が来るつて大変なコトらしいですね、私、どうしたら、いい姑になれるんでしょうねエ」と、つい尋ねてしまった。長兄は「あん

たは変わらんでええ、そのまま、ずつと変わつたらアカンと思う。大体、嫁が来て、姑になつた途端に、こちらのオバハンどもは嫌らしく変わつていくんや」と、説教めくでもなく世間話のように近辺の農家の嫁、姑のようすを（近年、農村では、嫁姑の立場が入れ替わつた感がある）思い浮かべるように話した。

（なるほど、変わつたらダメなのか……私は、ワタシでいいんだ）。長兄の一言で余計な取り越し苦労に悩むコトが、馬鹿らしくなつた。

なにしろ、曲がりなりにもすし屋のカミさんとして、すし見習いの若者を何人も一人立ちさせて送り出すまでの代理母親役を果たしてきた自信もあり、心が落ち着いてきた。

やがて、嫁に対しては、二代目カミさん業を継いでもらうため、すべてを（それほど大層なモノではないが……）伝えなければならぬ。これこそ、先代カミさんの役目、嫁いびりどころではない。

嫁は、実家のお母さんによると『口達者で勝ち氣』らしいが、いいじゃない、いいじゃない、すし屋のカミさんにピツタリだ。

幸いというか、独身時代デパート勤務の経験があるだけに私よりバッチリの接客態度だ。

煩わしいが毎日欠かせない伝票、帳簿記帳も、利口な彼女は適確にマスターした。



そして、すし店の裏方は、見習い中の若者が手伝ってくれるが、責任重大な部署（？）でもある。すし飯を炊くときは、火力、お釜の中の米の吹き加減から目が離せない、緊張タイムである（シャリは命なのだ）。次は、干瓢、高野豆腐等々の味付け、煮き方がある。当然、洗い場は回収されたすし皿が山と積まれ、洗浄に追われる。合間に、家族やパートさんたちの賄いも段取りよく出さねばならない。

予約注文なら、おカミが応対しなければならぬ。ざっと、すし屋のカミさんは、こんな具合でケツコウ忙しいのだ。



現在嫁が、それらを『仕事キッチリ』に片付けているのを見ると、私としてはまさに同志として、ツーカーの仲、気も合い、助け合っていると確信している。先日、友人が「ここは、嫁、姑の仲がよいネ、でも、不思議だわ」としみじみ言った。

その評価に反論はないが、実際のところそのためお互いが耐えもしたり、内心葛藤もいっぱいあったのだ。夜、その話題で嫁とビールを飲みながら「私たち、仮面、嫁、姑かもネ」と言う、嫁は手を打って「そうそ、内にムラムラ憎しみの炎が燃えたぎってたりして、アハハ……」二人して内面暴露（？）で大口あけて笑い合った。

たまたま、永六輔著の『嫁と姑』を読み、いくつかの諺を知った。

「嫁と姑の仲のよいのは物怪の不思議」

「嫁と姑、犬と猿」

「姑の氣に入る嫁は世が早い」その他、いっぱいあったが……。

あるページに、一人の嫁のコトバ。

「私は、姑の墓に入りたいわ、死んだら、上に乗かってやるの」こわい！  
（どうかお願い！ 和ちゃんは重いから乗らんといてね）。

（え・カステラネンコ）

連載②

# ある英国女性の 回想記

バーバラ・フォスター  
早川裕子訳



mi.

## 修道院にいたころ

「家」という概念のもうひとつの見方は、中に見慣れた物や家具や装飾品や絵があつて、日々の暮らしを親しみあるものに形作っている、自分たちの領土だということだ。

「私の家」のそうしたものの一つは、どこに引越してもいつも食堂に置かれている、食事を知らせる鐘である。今、一九八九年のカナダのアパートでは、これはいかにも場違いな装飾品だ。一人で住んでいるので、夕食に招集する者は誰もいないし、いつだって私が食べるのは、ディナーなんかじゃなく、軽いサパーだからだ。

その鐘は長い間私といっしょに暮らして、一九六〇年にカナダに移住するときにもついて来た。それは私にとって、「上流階級の贅沢品」の象徴である。

そのもとになった物は、重厚なマホガニーのサイドボードの上に、荘厳な雰囲気をつたえて鎮座していた大きな鐘で、毎晩フランス人のメイドのマリーが厳粛に打ち鳴らしていた。その音色は、最初は軽やかだが、しだいに震えながら大きくなり、家中に響きわたった。鳴るのはいつも夕方の六時で、夕食があと三十分ほどでできあがるという合図であつた。私たちはそれによ

つて、ふだん着から夕食用の少し改まった服に着替えることになつていた。

おいしそうな匂いがすでにしばらく前から地下の台所から漂つて来ていた。私の自然な食欲はこの鐘の音と料理の香りによつて高まつたが、食事への期待は不安と混ざり合つていた……何を着ればいいのか、裕福で威厳のある大人たちに何と言えいいのか、そして何よりも、出て来た料理にどのナイフやスプーンを使つたらいいのか……。

なぜなら、私は大邸宅に滞在している、かわいいような少女だったからだ。ひどく貧しくはなかったが、下層の労働者階級の出身だった（訳者註・ベルギー人の父はコックで、ホテルでシェフをしているとき、そのメイドだったイギリス人の母に出会った）。そのような環境で、私はどうしたらよいかわからなかったのである。

戦前のイギリスでは、階級社会がまだ顕著で、国民全体の暮らしになんらかの影響を与えていた。単に収入の多寡や職業の種類だけでなく、それは礼儀作法や言葉遣い、アクセントや生活習慣などすべての面に反

映していた。

上流階級、中産階級、下層階級という三つの階級の人々の間には、微妙だが無視できない深層構造があった。たとえば常に紳士階級のために働いてきた私の両親は、自分たちを工場や商店の労働者よりも上の階級だと考えていた。収入はほとんど同じだったのだが。

政治に関しては、両親はいつも保守党に投票していた。なぜなら、紳士階級だったら物事をどう切り回していくべきかをちゃんとわかっているからだというのだ。一方、店員たちは自由党に入れる傾向があり、工場労働者たちは労働党か共産党支持だった。

中産階級も同様に商人と専門職のホワイトカラーとに分かれ、上流階級は、何代も続いた地方の大地主と、商業でひと財産を築いた実業家——いわゆる成り金族とに分かれるのである。

両親の別居で移り住んだ地域の学校で二、三か月過ごしただけで、私は奇跡的にも寄宿学校に入学できた。なぜ両親が私を遠くに手放す気になったのか、私にはわからない。

「労働者階級の親が、どうやって娘を皆のあこがれの寄宿学校になどやれたのか？」という当然の疑問にも私は答えられない。それはベルギー系の宗教系列の尼僧たちによって、厳しく運営されている修道院学校で

はあったが、中流階級にも上流階級にも人気があった。

せっかく慣れた環境とまた別れねばならないという気持ちにはあったものの、私は寄宿学校と聞いただけでワクワクした。私は子どものころから本の虫で、母は親戚へ連れていくたびに、私が頭を本から上げていとこたちと遊んでくるようにとうるさく言ったものだった。

私が本の中に逃げ込んで見ていた世界は、現実の世界よりずっと面白くて、その多くが寄宿学校を舞台とし、たいいていの十代のヒロインたちがそこで暮らしていたのだ。そうした学校は不思議な冒険が繰り広げられる魔法の場所だった。私は待ちきれなかった。

大きな青い金属製のトランクが私のために買い求められた。私はそれがうれしくてたまらなかった。修道院から送られて来た規定通りの数の衣服を、名前を縫い込み、きちんとたたんでその中へ入れた。さらに規定通りの品物を詰め込み、最後にはお菓子の缶も入れた。

母にロンドンのヴィクトリア駅まで送ってもらうと、二人のシスターが待っていてくれて、私たち学生をシーフォードまで連れて行ってくれた。シスターに接するのは初めてだったので、たちまち緊張した。彼女らは紺色の制服の少女たちに囲まれて、とてもまじめくさった顔つきで立っていた。シスター・テレーズとシ

スター・ブリジッドだと自己紹介した。尼僧たちはすべて、聖者たちの名前が与えられていて、自分の本名は使わないのだと後で分かった。実際、彼女たちは修道院という閉ざされた世界に入ったとき、「自分自身」のほとんどを置いて来てしまったのである。

二人は黒い長いドレスを着て、白くて糊のきいた頭飾りはダイヤモンドの形で顔を囲んでいた。それはコルネットと呼ばれている。そのコルネットには黒い四角い布が後ろでピンで止められて、花嫁のベールのように肩まで垂れ下がっていた。彼女たちは、自分たちはキリストの花嫁だと思っているのだ。髪の毛は完全に覆い隠されていて（頭髮を剃っている人もいる）、それが彼女たちの外観を一段と謹厳な感じにしていた。二人の化粧のない素顔は青白く（修道院で会ったどのスターもそうだったが）、あたかも、他の多くの楽しみと共に太陽も禁じられているように思われた。

この列車にはもう一人新人生が乗っていて紹介されたので、私たち二人はシーフォードまでしゃべりづめくらいに親しくなれた。

シーフォードはサセックス州の南岸にある小さな町で、町そのものは平凡だが、ゴツゴツした崖や小石の浜のある海岸の景色は美しく、気に入った。波が荒く、冬には大波が岸壁を越えて押し寄せた。

アネシー修道院は、学校というより地方の地主の大

邸宅のような素敵な外観だった。赤い煉瓦造りで、窓とドアの枠は白い木製だった。高い、きれいに刈り込まれた生け垣に囲まれていた。正面玄関までの道を走る車の窓から、胸を高鳴らせてその景色に見とれていた。到着すると、私たちの荷物がすべて集められて、広い玄関ホールに案内された。そこには二階に続く広い階段があった。

入り口には修道院長が、私たちを迎えるために立っていた。背筋をピンと伸ばし、腕を組んで、右手にはロザリオが掛かっていた。これがこの人独特のいつものポーズなのだと、後で知ったのだった。彼女だけは、他のスターたちと違って顔が赤かった。黒いモジャモジャの眉毛の下の目は黒みがかっていた。一目見たときから恐くて、それは最後まで変わらなかった。

寄宿学校とは、本で読んだようなワクワクする楽しい所ではないことがわかった。それは秩序と規律の場所であった。建物中での唯一の装飾品は、宗教に関する彫刻と宗教画だったのである。

寮に案内されると、そこには広い部屋の両側にせまいベッドが並び、それぞれのベッドの間に小さなサイドテーブルがあつて、パイプにつけられた白いカーテンが各スペースを囲っていた。そのカーテンは日中は開けてあるが、夜には閉めてプライバシーが守られるのだと、スター・ブリジッドは説明した。そのとき

はまだ私は知らなかったが、それはまるで病室のようだった。

それを見ると早くもホームシックにかかつて、私は泣きそうになるのを唇をかねでこらえた。そこへ荷物が運ばれて来て、持ち物を出すので気がまぎれた。下着、スリッパ、ガウン、ナイティなど細かい物はすべてベッドのそばの棚に入れた。上着やドレスは寮に隣接した大きな倉庫に入れたが、ハンガーにはすべて自分の名前をつけた。

部屋の片隅にはシスター・ブリジッドのベッドがあったが、私たちとまったく同じにしつらえてあった。白い無地のカバーとシーツと枕カバーに毛布——多分

純潔の象徴なのだろう。

遠くでベルが鳴ると、シスター・ブリジッドが夕食だと階下へかりたてた。長い廊下はコーヒードと香煙の混じった匂いがした。食堂とチャペルが向き合っていたのだ。

広い食堂にはいくつかの長テーブルが並び、各テーブルの前端にはシスターたちが立っていた。一番前にそれらとは直角に置かれたテーブルには、両側をシスターたちに囲まれて、修道院長が真ん中にいた。

私は示されたテーブルに行って座ったが、すぐにそのテーブルを率いるシスター・ブリジッドから注意された。「シーツ、お祈りですよ」



食前の祈りは長かった。私はおながすいていて、言葉の意味はまるでわからず、居心地悪く苦痛だった。母は私に、「あなたはカトリックの学校に入るのよ。カトリックの洗礼を受けているのだから、ちゃんとカトリック教徒になれるように学ぶんですよ」と言ったが、私はそのお祈りが好きになれなかった。私は以前エガムでいろんな友達にくっついてあちこちの日曜学校に行ってみたが、それぞれ一度きりでやめてしまっていた。これも大きな日曜学校に思えた。しかも今まででいちばんいやな……。

夕食の量は適当で、スープとビーフシチューとカスタードプリンだった。スープには半透明のサゴが浮いており、ビーフシチューにはだんごや人参が入っていた。肉を呑み込むのに苦労したが、シスターが「肉を食べない人はプリンはなしですよ」と言ったので、無理に呑みくだった。

翌朝、私はカトリック教徒とは何かが少しわかりかけた。六時にシスター・ブリジッドに「急いで、あと三十分でミサですよ」と揺り起こされたが、起こされたのは半数ほどの生徒だけ。まだ眠りを貪っていられた者はプロテスタント（新教徒）だったのだ。

私たちは寝室に隣接した共用の洗面所（そこにはトイレはついているがお風呂はなく、浴室は一階にあった）で顔を洗った。そのとき「耳のうしろもちゃんと

洗いなさい」と言われた。

チャペルに入るときは、小人の帽子のような紺色の頭巾をつけねばならなかった。私は他の子たちを真似て、聖水に指を浸し、額、胸、両肩を手で触れて十字を切り、祭壇上聖体の前を通るときはひざまずいてから、信者席についた。とても眠かったし、呼びかけ以外はすべてラテン語だったので、何も理解できなかったが、なんとか説教や賛美歌や祈りや詠唱や呼びかけに従った。

チャペル内は狭いけれども美しく、印象的だった。祭壇には金がはめ込まれ、祭壇の布は精巧な刺繍がちりばめてあり、壁は聖者たちとその生涯の豪華な絵で埋められていた。ステンドグラスの窓には新訳聖書の場面が描かれていたが、早朝の日光がその鮮やかな色を際立たせていた。

私は眠い上におなかもすいていた。食堂からはコーヒーやトーストの匂いがただよってくる。やっと礼拝が終わって他の生徒たちの朝食の列に加わったが、彼らは四十五分も余計に眠れたのだった！

授業は九時に始まり、科目ごとに違う先生（二人以外は尼僧）が教室に来て授業をしたが、私は英語の先生がきらいだった。彼女は背の高い、グレイの髪的女性だったが、自分はここで私たちに教えるよりも、どこか他の学校で教えたいと言わぬばかりの言い方をよ

くしたからだ。

二・三週間後に英語のショートテストがあった。私は途中で間違いに気づき、急いで消した。初めてのテストだったので緊張のあまり強くこすり過ぎて、紙に穴を開けてしまった。このままでは提出できないと思った。もう一度やり直しをさせられるだろう。おずおずと先生のところへそれを持って行って見せると、恐ろしいことに、彼女は大声で笑ってその穴に指を突っ込み、頭上高く上げて私のテストを振り回したのだ。クラス中がそれを見て笑い、私は屈辱で打ちひしがれた。

ランチタイムに教室を出たとき、オリーブが私の体に腕をまわして言った。「元氣だしなよ。誰もあなたの穴のことなんか覚えてないよ」。私はすぐに気持ちが晴れた。オリーブはその後四年間、修道院時代を通して、私の親友になったのだった。同じクラスではあったが、彼女は私より十八か月年上で、落ち着いた大人に見えた。

彼女のショートヘアはいつも完璧なスタイルだったし、制服は私とちがっていつも清潔だった。彼女は財産家の娘で、両親はアフリカのブルームフォンテインに住んでいた。彼女は両親とは年に一度夏に会うだけで、クリスマスとイースターの休暇は、ホーヴにある伯母さんの家で過ごした。そこで私も一度イースター

休暇を過ごしたことがあって、冒頭の「鐘」の体験をしたのだった。この家が、召し使いのマリーがいて、夕食の鐘のあった家庭なのである。

私たちはおたがいの家族とは会わないでいられたので、学校での友情が強まったのだと思われる。何でも貸し借りし、どこへ行くにもいっしょだった。ただし、オリーブはプロテストラントという羨ましい生徒の一人だったので、ミサには行かなかったけれど……。

毎日のランチタイムと土曜日の午後には、私たち寄宿生は二人のシスターに連れられて散歩に行くのが常だった。二人ずつ手をつなぎ、先頭と背後にシスターがついて歩いた。同じような「ワニ歩き」をしている他校の生徒に会ったら、丁寧に会釈をしてすれちがわねばならなかった。

オリーブと私が秘密の話に興じたのは、主にこの散歩のときだった。特に休暇の帰省からもどったときは話が山と積もっていた。これもそんな九月の散歩のときだった。オリーブが両親のいるアフリカでの冒険談をたっぷり聞かせたあとで（彼女のほうが年上で賢くてリーダーだったから、いつも先だったのだ）、私は興奮気味に口走った。

「わたしね、男の子にキスされたの!」

一瞬の沈黙はあったが、彼女はみじんも非難のそぶりはなく、びつくりしたようすで、



「えっ、誰に？」と聞いた。

「いとこのエリスよ」

「ああ、いとこか……」と、今度は少しガツカリしたような感じだった。

「どんな子？」と、彼女は再び興味を示す。

「私より年上の十四歳よ。背が高くてけっこうハンサムだけど……小児マヒの後遺症でちよっとビッコなの」

「どうやってしに來たの？　どんなふう感じた？」

「そうね……ちよっとベタベタした感じであまり好きじゃなかったわ。でも彼が話したようすは素敵だったの。お母さんたちがあまり行き来してなかったから、私たち初めて会ったのよ。母たちが彼の家で話している間、私たち森へ散歩に行ったの。彼は始めは恥ずかしそうだったけど、私が好きだから学校に戻ったら手紙をくれないかと言ったの。私はシスターが許してくれるかわからないけど、書いてみると答えたの。そしてたら彼は私が木の株につまずいて転ぶといけないからと言って、私の手を取って握ったの。森の中ほどまで來たとき、彼はすみれを摘んでその花束をくれるときにキスしたのよ」

その日から私たちの友情の力関係が少し変わって、バランスが取れてきた。私はどちらかといえばアカデミックなほうで、オリープは成績は中位だったが、社会性にたけて自信を持っていた。

私たちはときにはすごいケンカをして、何日も口をきかないこともあった。そんなあるとき、シスター・ブリジッドが私たちのみじめな疎遠さに気づいて、間に入ってくれた。夕食後彼女は私たちを食堂に残していつしよに座った。

「どうしたんですか、お嬢さんたち？　最近いつしよにいるのを見かけないけど」

私はオリープをにらみ、彼女はにらみ返した。

「私の宿題、手伝ってくれないんです」彼女はツンツンして言った。

「なぜ、手伝ってくれるべきだと思うの？」

「だって、私よりよくわかるから」

「なぜ先生にたずねないの？」

「だってアダムズ先生は、夜はいらっしゃらないから」

「ああ、数学なのね。バーバラ、あなたはなぜ手伝ってあげないの？」

「あげようとしたけど……すごく簡単で、こんなのできないのはバカだと思う」

「オリープはあなたのこと、手伝ってくれたことはないの？」

「あるけど……」私はしぶしぶ答える。

「何を？」

「裁縫。私よりずっと上手だから」

「多分オリープはあなたのこと、裁縫ではバカだと思



うでしようね。彼女はそう言いますか？」

「いいえ」

「じゃあ、あなたのほうがあやまらなきゃならないわね」

こうして私はあやまつて二人は抱き合い、次のケンカまでは幸せなのだった。

寄宿生としてイヤだったことはたくさんあるが、その一つが入浴だった。教室から数人ずつ呼び出されて行く昼間の部がとくにイヤだった。

「シスターに裸を見せちゃいけないのよ」と誰かが囁いた。尼僧は、自分のも他人の裸体を見るのは罪だと考えており、私たちは木綿のシュミーズをつけて、その下で洗わなければならなかった。浴槽にはすでにお湯が入れてあったが、それはいつも半分ほどで、たいていぬるかった。しかも入ってからまた服を着て教室に戻るまで十五分しか与えられなかったのである。

カトリック教徒のつとめは、毎日のミサの他にもいろいろあった。その一つは教理問答で、まる暗記させられた。「あなたを創りたもうたのは？」「神が創りたもうたのです」「なぜ神はあなたを創りたもうたのですか？」などなど。

いちばんイヤだったのは懺悔だった。神父の時間を無駄にさせないために、懺悔室へ入る前に自分の罪を思い出しておかなければならなかった。たいてい私は

何も告白することがなかった。——こんな環境でどうして悪事などはたらけようか？ でも毎週しなければならなかったので、私は作り事を言った。

「神父さん、私は罪を犯しました」狭く仕切られた暗い場所の中で、私は言う。神父の顔は見られなかった。彼は隣の小さな空間の中にいて、この二つの小部屋の境に開けられた小さな隙間を通して、私たちは話をした。そこから彼の息の音まで聞こえたし、その息に混じったペーパーミントの匂いまで嗅げた。

「言ってごらん」

「ケシゴムを盗みました。シスターに嘘をつきました。ミサのとき笑いました」

「懺悔をしないさい」

「私は罪深いです。心底悔いています」

言われるように三回胸を叩き、三回「ミア カルパ」と唱えた。息詰まるようなこの小部屋から出てチャペルにもどれるとほんとにうれしかったので、ひざまずいて自分の悪事を告白することはいとわなかった。

休暇で家へ帰ると、私は決して教会に行かなかったもので、戻って来ると、長い懺悔をしなければならなかった。家の近くにカトリック教会はなかったし、いっしょに行く人もいなかった。ミサをさばることは、煉獄か地獄に落ちるような大罪だったのだ。その懺悔をするときには、いくつもの長い口ザリオを持たなければ

ばならなかった。一つの祈りにつき一つのビーズが必要だったのだ。

あるとき、どういうわけかそのことを修道院長までが知るところとなり、院長室に呼ばれた。神父たちはけっして懺悔の内容をもらしてはならないことになっているのに。私は修道院長がとても恐ろしかったから、徹底的に絞り上げられてから、以後決してミサをさばりませんと約束した。

「よろしい。あなたは優秀な生徒だけど、ここでは勉強のことだけではなく、不滅の魂のことを考えなければいけないのですよ」

「はい、院長先生」と私は答えたが、自信がなかった。私は儀式は真面目に従ったが、真のカトリック教徒には決してなれなかった。この修道院を出たときが、私の信仰の終わりであった。

私はもう一度修道院長の訓戒を受けたことがある。それはこれよりはるかに理不尽なものだった。

食事のときシスター・ブリジッドにもつとパンをもらって来るように言われて、キッチンへ行ったときのことである。食堂から数段降りた所にあるその広い台所に足を踏み入れたのは初めてだった。そこでは若い二人のメイドがテーブルの前に座って、お茶を飲みながらおしゃべりしていた。その一人がパンを取りに行っている間、私はなんとなく間がもてなくて、「ゆっくり

り休息しているんですか？」とたずねた。

私がパンを持ってもどり、食事を終えて立ち上がるうとしたとき、シスター・アースラが来てシスター・ブリジッドに何事か耳打ちすると、彼女は驚いた表情で私を見た。

「バーバラ、院長先生が呼びですよ——さあ、今すぐ！」

いったい私は何をしたというのか？ ホールを通じて院長室へと歩きながら、私の心はあらゆる可能性を求めて駆けめぐっていた。

ドアは開いていて、仕事をしていた院長は、前に立った私を見上げた。

「あなたのことで、重大な苦情が来ています」彼女は厳かな口調で言った。

私にはまだ何のことかわからなかった。

「あなたは夕食のとき、キッチンで何をしていたのですか？」

「シスター・ブリジッドにもう少しパンをもらって来るように言われたので、行っただけです」

「あなたはメイドたちに何と言ったのですか？」

「パンをくださいと言いました」

「他には？」

「別に何も言いません」

「彼女たちは、あなたが彼女たちのことを何もしてい

ないと非難したと言っています。あの人たちは私たちの食事の世話をした後は、休む権利があるのですよ」

私は呆然となって絶句した。私の無邪気な一言が、どうしてこんなに誤解されてしまったのか？ それは、私がこの種のトラブルに巻き込まれた最初のできごとだった。確かにそれは最後ではなかったのだ。私は無意識にへまなことを言う性癖があるようだ。

大いに当惑して、私はそんな意味で言ったのではないと説明してあやまった。私の罰は、夜のレクリエーションタイムを失うことだった。その時間に二人のキッチンメイドにお詫びの手紙を書かなければならなかったのである。

修道院でいちばん楽しかったのは、土曜の午後だった。私たちはよく海岸線の白い崖の上に広がった、緑の草の生い茂った丘を横切って歩いた。しばしば谷をつたって海辺に降りた。そこでタマキビ貝を採ったのだが、それらは岩に張り付いていたので、私たちは力を入れてひきはがしては海水を入れたバケツに入れた。それを修道院に持ち帰り、ゆでてお茶のときに出した。柔らかい、かたつむりのような身を、針で取り出さねばならなかった。他の少女たちはそれが好きで、なかなかいける味だと言っていたが、私はどうしても食べ

る気になれなかった。「オエーッ、針に刺さった虫みたい」と思った。

土曜日のお茶にはまた、厚切りの外皮のパリパリしたパンや焼き豚やゼリーも出て、こちらはパクパク、モリモリと食べた。長い散歩や海風に当たった後で、それらは心地よくおなかに入っていた。

もっとうれしかったのは、誰かのお母さんがいつもケーキを送ってくれて、みんなで分けて食べたことだ。オリーブの伯母さんは、近くのホーヴから毎週近所の



ケーキ屋に美味しいお菓子を注文して届けてくれた。これがまた、えもいわれぬおいしさだったのだ。今でも覚えているのは、アーモンドとクリームのついた軽いタルトで、まるで「神々の食物」のような至福の味を残して、口の中に溶けていった。私はオリーブのベストフレンドだったから、いつも大きな一切れがもらえた。

私は修道院を去って以来、オリーブには会っていない。家庭環境があまりにちがうので、修道院という地平を離れたら、友情を保ち続けられなかったのであろいか。私はホーヴに招かれたお返しに、彼女を自宅に誘うことは決してしなかったのだ。彼女はいまだに私の記憶の中に生き続ける、過去のなつかしい亡霊である。

「キスしたいところ」のエリスとは、二十代後半になって二人とも結婚してから再会した。彼は少年時代のカッコイイ面影はなく、運動不足で太ってしまった。会計士になっていたが、退屈な男で、さえない妻と結婚していた。私の夫は、彼らを二度と訪ねようとはせず、私たちの関係は「それでおしまい」になったのである。

(つづく)

(え・佐藤瑞江子)

# 子育てフォーラム

NMSのページ



## 母親一年生

東京都立川市 畑中珠美（30歳）

今思うに、二十代の間で一番心が落ち着いていたのが妊娠中だった。お腹の子にその日の出来事や思いを話し、栄養バランスを考えた食事を摂り、安産を願ってせつせと歩く日々。「元氣な赤ちゃんを産むこと」だけを目指し、どっかりと大地に根っこがはってしまつたように気持ちちが安定していた。

今まで、大学に行けば楽しいだろう、彼氏ができたら毎日がウキウキだろう、

う、仕事が始まれば充実した生活になるだろう、結婚すれば優しい気持ちでいられるだろう……と人生の各段階を期待に鼻息を荒くして迎えてきた。

実際は、少しずつ「あれっ？」と思う機会が増え、「大したことではなかったな」と結論づけていたのだが。産む、育てることを、今回もとても楽しみにしていた。

妊娠中に、買い物で会計のときにお金足りなくてドキドキしたり、変な勧誘を受けてイヤな気持ちになったりすると、お腹の子は警報器のようにドタバタと動いた。ふだん胎動があまり激しくなかったので、「お母さん思いだネ」「親子つて通じてるのネ」と

いとおしく思えた。

出産はやはり痛かったが、それよりも赤ん坊の姿に驚いた。皮膚が赤紫色でヌルヌルプリツとしていて、いかにもついさっきまで内臓だったような感じなのに、目も口も手も足もちゃんと人間なのだ。完璧だ。へそがつながったまま、息子のまるくて小さな背中をしばらくさすった。

と、ここまではよかったのに。小さかったので一週間保育器に入り、退院した後から「こんなはずじゃなかった」日々が始まる。

先に産んだ姉が「トイレに行けないのがつらい」と言うのを「行きたいときに行けばいいじゃん」と妹と笑って

いたのが現実となった。

赤ちゃんのリズムをつかめず、おっぱい・おむつ交換・泣くのを抱っこしていると、トイレに行きそびれる。生まれて初めて便秘を経験した。きたない話だが、力んでも出ないので、指で肛門をさぐると粘土のような便がびっちり詰まっていたので、一時間くらいかけて指でかき出すということを何度かやった。

「寝ないっていつてもいつかは寝るんだから」と思っていたが、なかなか寝つかないわりにちよこちよこ起きるので、慢性睡眠不足になった。夜中の授乳は身体に力が入らず、全身がくすぐったい。胃腸も弱り、以前は病気で悲しいときでもバクバク食べていたのに、食後何時間もムカムカが続くので、ビクビクしながら物を口に入れていた。

いちばんこたえたのは、泣いている理由がわからず、なかなか泣き止まないときだ。妊娠中はあんなにわかりあえていたのにという幻想もむなしく、

抱っこ？ おむつ？ おっぱい？とさぐつていつても「どうしてわかってくれないんだ！」と顔を真っ赤にして泣きわめく。大ざっぱで鈍感な自分をうらんだ。「手足が温かくなってきたら眠い」「口がチュツチュいつてるからおっぱい」は自分では気づかずに、里帰り先で母や姉に教わったものだ。

あやすのもヘタだった。赤ちゃんはどう遊んだらいいのかわからず、本で調べたり、うまい人のまねをしたり。でも「遊ばなければ」「笑わせなければ」と気ばかりあせり、楽しめず、キヤハハと盛り上がっている親子を見るとうらやましくてしょうがなかった。

こんな赤ちゃんとの生活が大変だとは。

ある日、おんぶでも泣き止まず、今まで口にしたこともなかった言葉がポロツと出た。

「……ちくしょう……」するとピタツと泣き止みこちらがドキツとした。気持ちちは伝わる、自分の心の状態が子どもに与える影響は大きい。

そういえば「子から離れたい、育児以外のことをしたい」とあれこれ迷っていた時期は、泣いたりまとわりついたりするのが増えた。

逆に子どもの機嫌がいいのは、夫婦で何かを楽しんでいてそれに子どもも参加しているときや、ママ友たちと子どもたちがそれぞれ好きなように楽しんでるときや、家の中でも外でも人・生き物・自然・物から刺激を受けているとき。

自分のやりたいことをやり、子どもも夫も笑顔でいられる方向とは!?

夫に話すと欲ばりだと笑われるが、私は本気だ。もう誰のせいにも何のせいにもしない。やったもん勝ち、楽しんだもん勝ちだから。

## 息子はいD児

千葉県船橋市 由美あき子(43歳)

息子が「LDではないか?」と心配

して検査していただいてから一年半になる。息子に聞して「なぜ? なぜ?」と私の頭の中が?マークでいっぱいになって、それを解明するために必死になった日々をふり返ると、わが子のためにがむしやらになれたことに改めて母は強しと思う。

「LD」を知らない当時の私は、息子が小一の一学期のおわりに文字の読み書きの遅れを担当に指摘され、息子本人は同級生からは「バカなんじゃないの」とささやかれていた。担任も心配して下さってはいたけれど、家庭での特に母親の私が息子をほおりっぱなしにしているかのように思っていたふしがある。

家庭訪問の折の第一声が「ちゃんとあいうえお表が貼ってありますね」だった。私は「先生この表なら三歳のときから貼ってあります」と即答していた。担任は継続は力なりをくり返し頑張れとエールを送ってくれるだけだった。

LDの存在すら臭わせてくれず私

の?が頭だけじゃなく身体全体に広がり、我慢できなくなったりとき、出逢ったLD(学習障害)と書かれていたある本の帯が目止まり、必死で読み日本全国にあるLD児者親の会の存在や検査していただける病院などを知り、私の身体中の?を解明するのは自分でないりやダメなんだと実感したのだった。

そしてやはり息子はLD児だった。息子の文字の読み書きの遅れを指摘した担任が、他校へ転任となり改めてあいさつもしていなかったもので、後日、おたよりした折に息子がLD児だったと報告した。

すると先生からしばらくして電話をいただいた。先生曰く「LDという存在は知っていたが〇〇君がLDだったなんて結び付かなかった……」と何度も話された。私は先生のその言葉に「なぜあのときに少しでもLDという存在を知らせてくれなかったのですか?」と正直涙がでるほどくやしかった。誰だってわが子を障害児あつかい

されたくないだろう……。

でも発見は早いほうがいいのだ。教師というプロでありながら親にアドバイスできないのはおかしいと強く思うのは私だけでしょうか?

その上信じていた教育関係者からは信じられないくらい馬鹿にされたような言い方もされてア然としてしまった。ますますわが子を守るのは親しかないと感じた。

小三小四は、明るく元気で息子のためにともにときとして涙して下さる、優しい先生が担任となり救われた。

そして今春からの小五では初めての男の先生が担任となり不安でいっぱいだったけれど、息子を先生なりに理解して受け止めて下さり、幸い息子とも相性のよい先生で、やはり明るく楽しい人柄に親としても好感がもてた。小三からは担任に恵まれて(こんな言い方をしてはいけないことは分かっています)が本音です)、息子ともども親も救われたのだ。

LD児者親の会のメンバーも特に先



輩方からのアドバイスや体験談は、ものすごく私を元気に前向きにしてくれて心から感謝している。

障害があるなしに関係なく、親ならばわが子の将来を案じ自活してゆける道が見えるまで見守りたいと思うだろう。それが障害者の親はより強く思うのだ。

皆、口をそろえて言う「親は先に他界する、残されたわが子が自活してゆける確たる道が見えるまで見届けたい」と。私も同じだ。息子が成人して社会人となって自活してやってゆけるのか？ 生きる道が見届けられるまでもに頑張れるだろうか。その上、もうひとつ気がかりなことがある。それは夫の親族には息子がLDであることを話していないのだ。私はずっと黙っているつもりなのだ。

息子が生まれて五年後に妹が生まれたが、息子のときも娘のときも姑は私に、

「本当によく産んでくれたね。本当にかたわで産まれてこなくてよかった

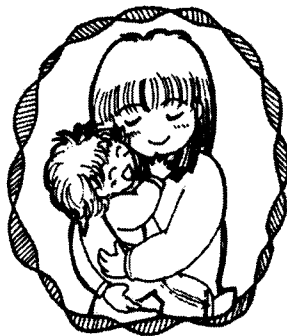
……」と言ったのだ。息子を出産したときにそう言われたとき、私はしばらく返事の言葉が出ぬほどア然とした。悪気で言っていないことは分かったが、姑の人間性を疑ってしまった。

そして五年後の娘の出産のときにも再び同じことを言った姑。私は辛かった。その時点で息子のLDのことに気づかずにいたので「五体満足で本当によかった」と喜べるはずが、私は姑の言葉になぜか怒りと悲しさを強く感じてしまった。そして大きく成長した子どもたちを前にして、数年ぶりに今年の夏休みのお盆帰省のときに「子どもたちがカタワでなくてよかったね……」とまた言った。私はその言葉を聞いたときに決心した。姑には絶対に息子がLDであることを話さない。

夫は次男であるが長男夫婦に子どもがいらないため、うちの息子がわが家の跡取りである。姑のうちの息子に対する期待は半端じゃない。

息子を出産したばかりのころ、姑が古い師からうちの息子が伊藤博文の生

まれ変わりだと言われたと自慢気に話し、私は思わず「それじゃ女好きになるかもね」と言った覚えがある。びっくりするほどの親馬鹿ならぬば馬鹿でア然とした。



将来への不安も確かにあるが、息子を通して学んだことがたくさんある。仲間もできた。世界が広がった。出産直後に「生まれてきてくれてありがとう」と言った感情は今も変わらない。

(元・海砂)

# 魔女たちとの時代

千葉県柏市

アカイ  
赤井

ネコ  
猫  
(40歳)



## ストリップ劇場で 育った私

である。

私は、昭和三十六年、神奈川県横浜  
市で生まれた。

父の職業はストリップ劇場経営。ヌ  
ード劇場、とも言いが……。

「でしたー!!」  
と、かん高い声とともにガツンガツン  
とハイヒールの音が響く。ジャラジャ  
ラと、重そうな衣装を抱え、ドカドカ  
と踊り子さんが部屋に入ってくる。  
そう、ここはストリップ劇場の楽屋

母は、毎日毎日、踊り子さんの食事  
をつくっていた。とてつもなく大きい  
釜で、ご飯をかきまぜる後姿を毎日見  
ていた私は、その当時、子供心に大変  
だなあとは思いつながら、尊敬の念は

もつていなかった。

なぜなら私はこの職業にとっても否定  
的だったからだ。そのくせ毎日父の目  
をぬすんで、踊り子さんのいる楽屋に  
行くのがとても楽しみだった。幼いな  
がらに、同じ女だからなのか、あこが  
れているからなのか、とにかく私にと  
って、そこはかつこうの遊び場だった。  
そこにいると楽しいのだ。

「でしたー」(おつかれでした)

と、元氣よく楽屋に帰ってくる踊り子さんたちを見るのが、とても楽しかった。劇場は、かなり大きく、十畳以上の部屋がいくつかあり、ひと部屋に七、八人の踊り子さんがはいっている。二階にもいくつかの楽屋がある。

そのうち従業員の部屋もいくつかあり、従業員は皆、住み込み。犬をつれて来ている踊り子さん、子どもをつれて来ている踊り子さん、そのまま旦那さんがマネージャーとなり、二人一緒に来ている踊り子さん……。楽屋は

いつもにぎやかで、当時五、六歳だった私にとって、天国と言ってもいいほどであった。長いつけまつ毛、濃いブルーのアイシャドウ、金色の髪。子どものころから妖艶なものが好きだった私は、それこそみんな、魔女に見えた。

「何やってるんや!」

父に見つかり、つれもどされるときは、一気に天国気分から、ひきずりおろされてしまう。

父は、何で、こんな職業やっているのだらうと思うくらいに厳しい。たぶ

ん、生まじめなのだ。

このころまでは、母よりも父のほうが好きだった私は、けっこう感情的になる母に怒られては、父のところへいつけにいっていた。大学まで、エスカレーター式の幼稚園に通わされていた私は、毎日従業員の送り迎えが本当にイヤでイヤで、よくその車に見つからないように、一人でブラブラと遠回りをして家に帰り、父と母をオロオロさせた記憶がある。

ブライドの高い父は、私に何らかの期待をしていたつもりらしいが、実はとんでもない娘なのである。考えてみたら、その徴候が、このときからでていたのかもしれない。小学校に入学してから、だんだん父が嫌いになっていった……。『ああ、私のいちばん幸せだった時代は、終わってしまった』

イヤでもそう思わざるをえなかった……。

クラスでいちばん仲のよかった子のが、「もう一緒に遊んじやだめだって、お母さんが言ってたから……」

ある日小さな声でそうつぶやいた。私はその理由がどうしてなのか、とつさに判断がついた。気の強い私は、

「ふうん」

そう言つて、クルツとその子に背を向けた。いくら気が強いといつても、やっぱり小学生……。『泣くな!』

「泣くな!」

心の中で叫んでる自分がいた。

ストリップパーが

私のともだち

そう……。あの何も知らない花の時代は終わったのだ。それから、親の職業を、イヤというほど軽蔑しなければならなくなったのである。それでも気の合う友だちも何人かでき、あいかわらずノーテンキな私は、『楽屋通い』(う)は、やめていかなかった。

「花札おしえてあげようか」

ローズという名の踊り子さんが、片膝を立てたくみな手さばきで花札を切る。その花札の絵に私はみとれている。

……。今思えば、とんでもない光景だ……。

私は、なぜかこのローズさんが好きだった。すらりとのびた足、細い腕、ハーフ系の顔立ちの彼女は、かなり人気があるんだと子どもながらにわかっていたような気がする。

「みんなお化粧がうまいなあ、きれいなドレスだなあ」「本当に魔女だ……」

と、まあ、子供心に思うのは、こんな程度なのだけれど……。

踊り子さんたちは、十日ごとに、次々と劇場をまわって行く。

らく日（最後の日）には、ローズさんや他の踊り子さんたちが読んだ、りぼん、なかよし、少女フレンド、マーガレット、少女コミック etc……などをもらうのが私の楽しみのひとつでもあった。その中でも『りぼん』は、大の愛読書（？）……。

もちろん父には秘密中の秘密だ。

こんなことがあった。劇場には、夜、寝ないで番をする従業員のおじさんが

いた。みんな、夜警さん、とよんでいが、なぜかその夜警さんは自分の部屋で、鳩を飼っていたり、いっぽう謎めいたおじさんである。

ある夜、いつものごとく劇場の中をウロウロ歩いていた私は、二階の夜警さんの部屋に遊びに行き、何をしゃべったかはおぼえていないが、その部屋から出てきたところを父に見つかり、私はいいいわけを考える間もなく、「おまえはこんな時間に何をやってるんや！ ええかげんにセーヨー」と、どなりまくられ木刀を持って追いかけてくる父の顔をいまだに忘れない。私は青くなって、涙も出なかった。

「なんでこんなヤツが私の親なんだろう……」

## 大きらいな父

父は酔っぱらって、帰ってくると、必ず大きな声を出す。きまって母と、大ゲンカになる。

母は、火鉢を投げられたり階段から

蹴落とされたりされていた。私はおぼえてないのだが、弟の夢の中に父が出てきて、怖くて怖くてひきつけをおこしたことを、一緒に飲みに行ったりすると、いまだに赤裸々に語る。

子どもにばかり、うるさいくらい厳しく、自分は何なのだ、と、ずっと思っていた。

このころから父が本当にイヤだった。今の若者が言う、お父さんがきたない、お父さんのあとにお風呂に入るのはイヤ、とか言う、そういうものではなく、本当にイヤだったのだ。

だが、生まじめで、几帳面などところのある父の血を唯一ひいているのは、この私だ。この年になって気づいたような気がする。母はというとこれまで気が強く、父と対等に酒を飲む。

私はいつも、『サザエさん』のような家庭にあがれていた。自分の母が、サザエさんのお母さんみたいだったらいつも思っていた。ちなみに私の母のタイプは、サザエさんそのものだ……。

小学校の三、四年くらいのころ母が、「今日、うちで撮影があるから」と言った。

「なに？ 撮影って」

よくよく聞いてみれば、『Oh、モーレッツ』（古い）の、コマーシャルでよく見た顔の女優の撮影らしい。

「でも、夜遅くやるんだから、あなたはちゃんとねてなきや、またパパに怒られるわよ」

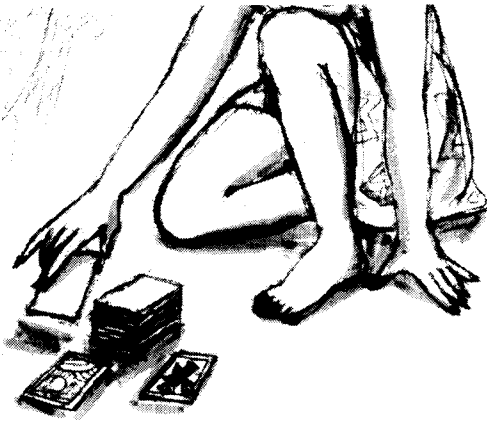
「うん」

言葉ではそう言ったものの、好奇心旺盛な私、そうかんたんにひきさがるはずがない。

その日、ラストのステージが終わり、お客さんが全部帰ったあと、撮影が始まった。

シーンと静まりかえったステージが、またたく間にまぶしいライトに包まれて、木材の音と、人の声がやけに響く。

私は胸をワクワクさせて、パジャマのままでそのようすを見ていた。そのときは父はめずらしく、のぞき見てい



る私に対して何も言わなかった、というよりは、たぶん、こんな場面であんなうちは、みつともないと思ったのだから。

それをいいことに私は、最後までその光景を見ながら胸を躍らせていた。それをきっかけに、歌をうたうのが好きだった私は、歌手になりたいとひそかに思ったのだ……。

いなくなつた

ローズさん

何か月かして、ローズさんが、また、うちの劇場にまわってきた。ちよつと見ないあいだに、少しやせた感じがした。

いつものように楽屋で、楽しいひとときをすごしていると、インターホンが鳴った……。ローズさんに電話らしい。しばらくして、もどってきたローズさんは鏡の前にすわると、化粧をおしはじめた。

（もしかして、泣いてるのかな……）

私はふと思ったが、鏡の中でローズさんと目が合ってしまった、とっさに見てはいけないと思い、目をそらした。

何かしゃべらなきゃ、と思いつながら

「花札やつて」と言っていた。

ローズさんは、「そうだね」一言そう言うのと、また、たくみな手さばきで花札を切る。私はなぜか、数いる踊り子さんの中でローズさんのそばにいると落ちつくような感じがするのだった。

それから二日ぐらいたったある日、いつものごとく劇場の中をウロウロしていた私は、母と仲のよい、親分格の年輩の踊り子さんの声に耳をすませた。

「ローズが穴をあけたんだよ……」

なにやら意味はわからないが、ローズさんにとってよいことを言っているのではないということは、理解できた。(もしかしてこのまえ、電話のあとで元気がなかったのと同様あるのかな……)

気になった私は母にそのことを聞いて

てみると母は何も言わずさつさと、食堂に消えていった。まさか父にこんなこと聞けるはずもない……。

夜おそく母と銭湯から帰ってくるのと、劇場の中に、チラッと、ローズさんが見えた。化粧も何もしていなかったが、まちがいにいくローズさんだった。それっきり、ローズさんは、うちに来ることはなかった。

「客とできちゃったんだよ」数日後いつものように楽屋であそんでいる私の耳に入ってきたのは、そういう言葉だった。踊り子さん同士でローズさんの話をしている……。そのときは、意味などわからなかったが、今となっては「なんで……」という気持ちが出てこない。私は、この年になっても、今でもローズさんには逢いたいと思っている。きつともう、おばあちゃんかなア、元氣かなアなんてよく思う……。中学のころ、母が、いつまでたっても帰ってこず、十二時過ぎの夜中になって帰ってきたことがある。

次の日、私たちが学校に行くときも

起きてこない。そして学校から帰ってくるとまたいない。踊り子さんのご飯たきは他の人がやっている。父にそれとなく聞くと「ママは仕事から」

私はピンときた。それが何の仕事か……。母も魔女だったのだ……！ 私ははじめてそのことを知り、本当にショックだった。今でもそのころのことはハッキリおぼえている。

そのころから、いや、大分前からかもしれない、父と母はうまくいっておらず、母は仕事をやめなかった。

## グレてしまった私

私は家出を繰り返し、一年以上も、家には帰らなかった。

その間、小学生の弟は仕事でおい母、毎日飲みに行く父との間で、淋しい思いをしたにちがいない。

だが、その当時の私は、自分のことしか考えていない不良だったのだ。歌手になるユメはこっぱみじんに消え、ただただむだなあそびに夢中にな

っていた。

家出中つきあっていた彼と、朝早く上野駅を歩いていたら、前から来た見知らぬオバさんが、「オハヨウ」と、言うなり、警察手帳を見せた。

（ヤバイ！）とつさに思ったが、おそかった。

警察だけではない、テレビ局の人間たちに一齐にとり囲まれいきなりマイクを向けられて、いろいろな質問攻めにあい、それが、テレビで流れてしまったのだ。その場で電話で、父と話をさせられ、私はなぜか涙がとまらなかつた。

父は、「いいから帰ってこい」おだやかに言った。父の声まで出たそのワイドショーを見た父の知り合いたちが、ジャンジャン父を気づかって電話をかけてきて、けっこう家の中は、パニックになってしまった。

あらためて、テレビの力はおそろしいと思ってしまった。あとで見たのだが、その番組のテレビ欄の題名が、「転落した少女、十五歳の恐怖！」な

んで、まったくばかげてる、とそのときは思った。

ブライドの高い父は私には何も言わなかったが、そうとうショックだったにちがいない。

家に帰ると父だけがいた。テーブルには食事の用意がしてある。気まずい顔をしている私に父は「また出て行きたいなら、そのまゑに味噌汁ぐらい飲んで行け」と、背を向けた。すべての言葉は、父の計算である。

私がボソボソと食事をとっているとき、玄関のチャイムが鳴った。学年主任の先生と、同級生たちが花束を持ってやってきた。もう逃げられない。なんで花束なんか持ってきたのか意味不明だ。

鬼と呼ばれている学年主任の先生はいきなり涙を流しながら「おまえ、オヤジさんがこの一年、どんなに心配していたかわかっているのか!!」そう言っていて、ワンワン泣きはじめた。私は言葉も出なかった。そのときだけは父が小さく見えた。

この光景は今でもたまに思い出す。

出席日数が足りず卒業証書ももらえなかった。こんなバカ娘に育てた覚えはない、と父は思っていたにちがいない。しばらくして父と母は離婚、母は『自分のファン』いわゆるお客と再婚した。

その相手は父とはまったく正反対のまじめでおとなしいサラリーマンだ。時はもどつてはくれない……。

時はうつり、

人々は老いた

こわかった父も今は七十過ぎ、昔の強さはないけれど、とてもいいおじいちゃんをしている。私も九歳の息子の親になった。やはり、自分が親になれば私みたいな娘は親の気持ちになってわからなかったと思う。

母もまあ、なんとなく幸せにやっているようだ。あの思い出深い劇場も今は、あとかたもなく、ビルが立っている。

昔のやり方は消えさり、今は若い人  
たちによって、劇場経営も変わってき  
ているだろう。

だけでも私はあの昭和四十年代の時  
代が好きだ……。

もの心ついてからの家出、そして十  
五歳でおきまりの水商売、そんな中で  
も出逢った人たちは、本当にみんな  
いい人たちばかりだった。母親が踊り子  
さんで、その娘さんが自分も母親と同  
じ道を歩んでいる話を聞いたりするこ  
ともある。私は本当に感動した。

自分などはただ、親の仕事に反発す  
るしもなく、親に守られていたことな  
ど気づきもせず、それに気づくの何  
十年もかかるとは……。

親の仕事によって、離れていった友  
だち……。子どもの口というものは残  
酷である。

私は身をもつて分かっているだけに  
九歳になる息子には、納得いかないこ  
とはとことん戦え、だけどわけのわか  
らないイジメだけは絶対にするな、と、  
ことあるごとに言っている。

でも、よくよく考えてみると、何と  
いってもそのころの時代が私にとつて  
は一番幸せな時代だったんだと今さら  
ながら思っている。

最近、その当時の夢をよく見るのは  
どうしてだろう。今の踊り子さんたち  
のメイクはナチュラルだが、夢には魔  
女風メイクの踊り子さんたちがぞくぞ  
く出てくるのだ。不思議な気持ちだ。

自分が親になった目から見ると、私  
の育った環境は決してまじめなよい環  
境ではない。だが、家族、まわりの人  
たちから、とてもあたたかいものをも  
らって育ったからこそ、今の私が存在  
しているのだと思う。

先日、久しぶりに息子をつれて父の  
家に行った。

父は今一人暮らし。年金暮らしをし  
ている。「昔、使いたい放題金を使っ  
た成れのはてだよ」と弟は言う。訪れ  
た私と息子を父は満面の笑みで迎えて  
くれた。「よう来たな、まあ、テレビ  
でも見てなさいよ、今お菓子でも買っ  
て来るで」

ゴロゴロ寝ところがりながら父の帰  
りを待っていると、「ママお菓子あっ  
たよ」と息子が隣の部屋からクッキ  
ーのカンカンを持ってきた。

息子がかかえてきたのは、まわりが  
ポコポコにへこんで、ところどころさ  
びついているイズミヤのクッキーの缶  
だ。すぐさま開けてみた。「やっぱり」  
劇場時代の写真や手紙がギューギュー  
ウに入っていた。一瞬、大好きだった  
魔女たちの笑い声が聞こえたような気  
がした。

一枚一枚見ていると、セピア色に変  
色した一枚の小さな紙きれがおちてき  
た……。

「S. 36. 7. 11. 長女誕生。今ま  
で生きてきた中で一番の感動だ。君は、  
これから成長して、どんな道を歩んで  
行くのだろう。どんな人たちとめぐり  
逢うのだろう、幸せになりなさいよ。  
君がいつかわたしの手をはらいのける  
時が来ても、ずっと見守っているから  
ね。7. 11. 父」

(え・栗田笑)



## カブール・ノート 戦争しか知らない子どもたち

山本芳幸 著

幻冬舎

定価 二〇〇円＋税  
二〇一一年十二月二十日第一版発行

東京都三鷹市 林 夏子（47歳）

カブール・ノートというタイトルのメールを友人から受け取った。彼女はインターネットでアフガン系のものを読んでいて山本さんのカブール・ノートに感動していたら、本になっているのを見つけたのだそうだ。「この本を読むとなんとも言えない気分になるのですが、とにかく誰かに読んでみてほしいとなります……」とあり、早速入手した。

村上龍、坂本龍一、両氏が巻頭に文を寄せているこの本は、国連難民高等弁務官カブール事務所所属する山本芳幸氏の単なる現地リポートではない。

アフガニスタンが、部外者の政治に翻弄されてきた歴史や、毎日寒さと飢えで死んでいく子どもたちの現実、また難民高等弁務官としての仕事をする上で感じる矛盾などを、ありのままに描いている。「平和」という言葉は知っていても、一度も実感したことのない子どもたちがいる現実と、平和ボケしている日本との深い深い溝。また、今世界中の敵になった「タリバン」の人々も彼の真実を見据える筆にかかる。と親しみすら感じる。彼は、今まで会った若者の中で、もっともすがすがしく好ましかったのは、アメリカ人の青年と、タリバンの兵士だったと書いている。両社の共通点として、突き抜けるようなすがすがしさを挙げている。つまり徹底した『不寛容』『原理主義』である。

また、現金収入を得させるために、あるNPOが女性が結婚のために準備する刺繍を商品として扱ったことが、現地の人の本当の援助になったのかなど、西側先進国の価値基準で計れない援助の意味などを根底から問うている。

この本を読むと「なんともいえない気分」になり、その「なんともいえない気分」を誰かと共有したくなる。あの九月十一日以来、このテロはなぜ起きたのだろう、南北の不公平、グローバリズム等等この世界が抱える難題はいつたいどこに行くのだろうという思いでなんだか心穏やかでない日々である。

白でも黒でもなく、われわれが今考えなければならぬことのヒントをこの本から得られるような気がする。

# 家族の スケッチ

## ファルコンの一大事

京都府宇治市 匿名(40歳)

十一月十六日、急に冷え込んだ金曜日の朝だった。いつものようにプレリードッグのファルコンに餌のパンの耳をやった。

ファルコンは台所に置いた、ダンボールにケージを入れて、子どもが大きくなって着れなくなったボロ服の中で寝ている。いつも私と旦那のパンを焼く音で起き、服から出てきて「餌をくれー」とばかりに、ガリガリとケージをひっかくはずだった。それがオーブントースターの「チーン」という音にも全く反応しないので「おや?」と思った。餌入れにパンを入れても小刻みに震えながら出てきて、食いつこうにも食いつけないようだ。動きがおかしい。よく見ると目も開いていない。

「おかしい!!」すぐにケージを開けて抱き上げた。びっくり!! いつもフ

ワワワ暖かいのに氷のように冷たいのだ。

「さんちゃん。ファルコンやばいわ」思わず旦那に叫んだ。旦那もすぐにファルに触るなり「おそらくこれはもうあかんわ。俺は仕事に行く準備をするから、あんたはファルを抱いててやり」と言った。

前にハムスターが死んだときがそうだった。急に冷え込んだ朝、冷たくたって二度と息をふき返さなかった。

ファルを胸に抱いて一生懸命こすっている、いろいろな思い出が胸に甦った。

ファルを買ったのは六年生の息子が一年生のゴールデンウィークだった。ちよつと前にベットショップで見つけて目があってしまった。欲しくてたまらなかったのだが二万一千八百円もするので迷いに迷っていた。旦那はもともと小動物が大好きな人なので「買ったらええやん」と言っていたがハムスターに比べると格段に高いし、動物を飼うにはそれなりの責任もある。

その日、旦那が会社でもらってきたラーメンの無料券で家族で外食してニンニクをいっぱい入れたラーメンを食べた。「めっちゃ臭いんちゃう」変なことが気になって買いに行くのがとても恥ずかしかったが、旦那の「ゴールデンウィークでもどこにも遊びに行かへんかったやん。ええやん。あんたが欲しいプレーリードッグを買いおう」という声でついに買った（私は本当はお気に入りのプレーリーが他人に買われることをとても恐れていたのだ）。

その日からファルは我が家の家族になった。

名前を決めるのにもめた。私は「ラブ」にしようと言ったのだが子どもも旦那も大反対で、旦那は「そんな場末のバーのホステスみたいな名前は絶対嫌だ」と言う。あんたは場末のラブちゃんと呼き合ったことがあるのか！とつっこみなかったが、当時専業主婦だった私が買ってもらった宝物のプレーリーだ。ぐっと耐えみんなに気に入った名前のファルコンにした（ネバーエ

ンディングストーリーで、主人公の少年を乗せた犬だかカバだか龍だかわからない生物がいたでしょう。その名前です）。

娘が幼稚園のときに描いた絵に、怪しい生物と人間を描いたものがあり、その横に先生の字で「さっちゃんと呼ぶ」とあった。きつと娘が「私とファルコンの絵」と言ったのだろう。ファルコンはいつの間にか春子になっていた。

飼ってからいろいろなことがあった。どんなときも毛の生えたフワフワしたファルコンを抱くと心が落ち着いていた。子どももとても可愛がっていた。十二歳になった息子もいまだに「ファルちゃん」と呼ぶ。外出先から帰ると「キューーーン、キューーーン」と鳴いて歓迎してくれた。夏の暑い日は仰向けになって親父みたいな寝姿で私たちを楽しませてくれた。猫のように喉をくすぐると、恍惚の表情で「クックルル」ともだえた。大阪ガスの点検の人が来たときは大興奮して誰が誰やら

わからなくなったように（大体プレーリーはアホだ。猫や犬のほうがよっぽど賢いと私は思う）、私の指にかぶりついた。血がでるほどかぶりつかなかったのは途中で私と気付いたからだろうか。



ファルコン、生き返って！ 立ち直って！と思いがらこすっていると思いが暖かくなって目を開け出した。旦那が「ファンヒーターで温めてやったほうがえんちゃう」と言うので送風口の前で火焙りにした。すると迷惑そうに「ギャン」と鳴いた。もしかしたら助かるかも……七時前だ。旦那が「悪いけどもう時間がない。俺は行くけど、もしファルが死んでも絶対泣くな。そういう約束だったやろ」と言いながら会社に行った。ハムスターが死んだとき大泣きしたのが、よっぽど困ったのだらう。そういえばファルを買ったときそんな約束をしたようなせえへんかったような……と思っていたとき、娘が起きてきた。

「紗知、ファルがやばいんや、ぬくめてやって。私は洗濯物を干してくるから」娘と交替して温め続けた。

息子も加わって温めるうちに餌まで食べ出した。しかし子どもも学校があるし私も仕事がある。ずっと面倒みてもやれない。

後ろ髪を引かれる思いで仕事に行った。本当に優しい人なら、動物好きな人なら仕事を休むんだろうなと思ったが、私が休んだらみんなに迷惑がかかるやん。私はファルより仕事をとった。

仕事が終わると一目散に帰った。玄関を開けると「キューーーン、キューーーン」というかわいい声！ 完璧に立ち直っていた。冷えからくる多臓器不全を心配したが一週間たつても大丈夫だった。あれからさらに保温に気を配るようにしている。なにかの縁で私たち家族の一員になったのだ。寿命を全うさせて天国に送ってやりたい。

(写真提供・筆者)

## 父の死に顔

東京都北区 安村豊子 (37歳)

誰かが息を呑んだ。「ゲッ！」という声も聞こえた(ような気がする)。

父の告別式。葬儀業者に促され、最

後の挨拶をするべく、皆が棺のまわりに集まり、蓋が開けられた瞬間だ。

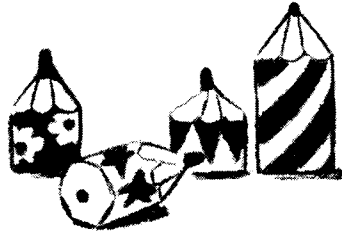
無理もない。それは「安らかな死に顔」という形容詞からはほど遠いもの。

闘病一年の末、顔はやせ細り、死後四日が経過した目は落ちくぼみ、唇には死斑が浮かび、早くもミイラ化している。健康だったころの遺影とはギャップがありすぎた。死んだ日からその経過を見続けている私ですら「怖い顔だあ」と絶句したほどのだから。

死に顔はどんどん替わる。死んだ当日はずっとはざされていた入れ歯が入り、半開きの口は今にも何か語りそう、目も完全には閉じていなかった。「死にたてはやはや」って感じ。それが次の日には閉じた目が一段と落ちくぼみ「おじいちゃんの顔、ガイコツみたい」という息子の感想は頷けるものがあった。

さらに二日が経過し、対面した顔は冒頭の通り世にも恐ろしい(ごめんね、お父さん)ものだった。顔って死んでるけど生きてるんだなあと思った。

それでもみなさん大人なので声には出さず、「瘦せちゃったねえ」と言うにとどめ、死に顔のまわりを花で飾ってくださいました。



ああ、ありがたや。式の間中、号泣していた八歳の息子に、後日「おじいちゃんの顔、怖くなかった?」と聞く

と「おじいちゃんだってわかってるから怖くないよ」とけなげにも答えてくれたっけ。

あれやこれやのうちに、ひとり娘である私は涙を流す間もなくコトを終えた。

死に顔を見ながら考えていたこと? 「どうしよう、お弁当が一個足りない!」で頭の中はいっぱいだったわよん。

## 失語症と出合って

埼玉県 彩木ゆかり

それは夜中の電話で始まった。受話器を握った夫が眉をひそめて振り返り、「〇〇警察署からだ」と言う。

「親父が警察に保護されてるって……何か変なんだよ。俺が出たら『どなたさんですか?』って……」

「えーっ! 酔っぱらってるのかしら?」

「いや、酔ってる感じではなかった。とにかく迎えに行こう!」

私たちは慌ててタクシーを呼び、警察に向かった。

その日、私たちと同居している七八歳の義父は、年に一度、都内で開かれる元同僚たちとの飲み会に出かけたのだった。高齢とはいえ、日常生活も何不自由なく、日ごろは酒も飲まない。飲んでもあまり酔った姿も見なかったが、なかつた元氣な義父なので、私には警察からの呼び出しがどうにも納得できなかった。

警察についてみると、控え室のような部屋の椅子に義父はニコニコして座っていた。警察官の話では、電車に乗ったが帰る所が判らなくなつて、ホームに座っているところを保護されたらしい。運よく会合の案内状を持っていたので、自宅に連絡をもらえたのだった。

「おとうさん、大丈夫ですか?」と声をかけると、何となくあいまいな笑顔のまま「大丈夫」と頷く義父はいつ

もの義父のように見えた。それにしても大丈夫そうでよかった。顔色もあまり悪くなく外傷もない。とりあえず、明日病院へ行こうとそのまま家に帰ったのだが、そのとき義父は軽い脑梗塞を起こして数時間が経過していたのだった。

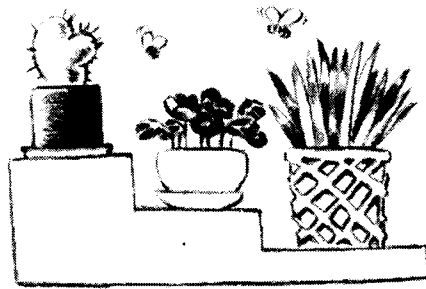
車の中では何を聞いても、「会合が終わって店を出てからどこを歩いているのか分からなくなった」と繰り返すばかり。しゃべり方が流暢なので分からなかったのだが、このときすでに失語症の後遺症がでていたのだった。

それは翌朝になって分かった。右手で箸が使いにくいと同時に、右足の軽い痺れ。自分の子どもや妻の名前が分からない。新聞が読めない、曜日や貨幣単位などが分からない、名称を取り違えて言うなどだった。

病院に着くと簡単な問診の後、精密検査のため、ただちに入院となった。その時点では何を聞いても同じ話の繰り返しで、会話はほとんど成り立っておらず、素人でもおかしいと思える状

態だった。

失語症には、話すことや書くことが難しい「運動性失語」、言葉は流暢に



話せるが理解力に障害があり分かりづらい話になってしまふ「感覚性失語」、これらが混ざった「混合性失語」、発声や、書くことが全て困難な「全失語」、

などに大きく分けられる。もちろん、発症した部位や程度、その他の要因も含まれるので、失語症とひとくちに言ってもさまざまなのだ。

失語症と同時に痴呆症を合併していない限り、名前も言えなくなっていたとしても子どもに戻ってしまうわけではないので、ブライドはそのまま残っている。そのためか義父は退院してから怒りっぽくなった。退院の二か月後、今度は義母が精神的にダウン。十二指腸潰瘍で同じ病院に入院することになってしまった。そこで義母が退院後、義父は週三回リハビリのできる病院のデイサービスに通っている。一年半経った今では簡単な会話もできるまでになり、住所と名前も書けるようになった。失われたものは戻らないので、他の部分がカバーしていることになる。

今まで培ってきたものが一瞬のうちに崩れ、再生するのを目の当たりにして、私にはいろいろなことを考えさせられた一年半だった。

(え・西宮さき)

# ズバリ一言

へんだと思うのは  
私だけ？

長野県小県郡 花岡京子（52歳）

私の家から車で五十分ほどの所にあるA総合病院へ行ったときのことである。

この病院、増築、改装を繰り返し少しずつ規模も大きくなっている。数年前は、内装を大きく変え、受付やカウ

ンターなど人工大理石になりグレードアップしたと思ったら、患者への呼び方が〇〇様となった。

患者への扱いもグレードアップしたのかどうかは不明だが、〇〇様と呼ばれる、何か（ん？）と思ってしまふ。

病院も経営だから、お客様である患者に対しては、様になるのかもしれないが、会社経営とは意味あいがちがうと思う。しかし、患者への対応は気持ちの上で、様であつてほしいとは思ふ。

病気のときは、体が悪いのだが、なぜか気持ちまでもが、減入ったり、落ち込んだりして、先生や看護婦さんの何げないやさしい一言に、励まされたり、勇気づけられることもある。だから、やさしく接してほしいとは願っている。

様づけで呼ぶのは、この病院だけかと思っていたら、子どもの付き人やら、夫の付き人で、B国立病院や、C町立病院へ行く機会があった。どちらも、A総合病院と同様に、〇〇様と呼んでいた。以前のように、〇〇さん、でい

いのではないかと、思うのは私だけだろうか。



町内にある開業医へ風邪のために受診したとき、〇〇さん、と呼んでいるのを聞き、妙に親近感を覚えたのは、どういうわけなのだろうか。

（え・佐伯和美）

# 老いのかたち

東京都練馬区

井上暁子（42歳）

ホームヘルパー二級取得の講習が三分の二ほど終わったところ、施設実習の予定が発表になった。自分が行くのはどんな所なのか、いつごろなのか、クラスメイットの誰と一緒になのか、掲示板に群がって、みんなわいわい大騒ぎだ。四十、五十のおばさんたちなのに（もっと若い人もいるけどね）、そんなところは高校生のころと変わらない。おかしくなる。

私の行先のA苑のパンフレットを見ると、アニマルセラピーを行っているとのことで、お年寄りがにこにこしながら犬の頭をなでている写真が載っている。犬の大好きな私は、それだけでもう楽しみになってきた。

さて、オリエンテーションの日がやってきた。A苑は、特養（特別養護老人ホーム）、ショートステイ（高齢者短期入所）、デイサービス（高齢者在宅サービスセ

ンター）が併設された、たいへん大きな建物だ。中に入ると明るく開放的でとても清潔。壁には、「今月の映画会」のお知らせや、旅行のときの写真が貼ってあって楽しそうである。そして、いましたよ、しつぽを振ってフロアーを歩きまわっては、皆に「マル！」と声をかけてもらっている可愛い奴。そう、マルっていうんだ、来週三日間来るからよろしくね。私もそのレトリバーの頭をなでてから会場へ向かった。

オリエンテーション担当の職員の方は、たいへんお話が上手で、楽しく、それでいて、実習に向かって気持ちが高まっていくような内容だった。

A苑では開所する前に、自分の親をここに入居させるとしたらどんな施設にしたいか、スタッフで意見を出し合ったそうだ。



一、生活習慣を変えなくてよい。

入居する前のままの生活習慣でよい。従って飲酒・喫煙は自由である（自販機がある）。

二、出前がとれる。

その日の献立が気に入らなければ外から出前をとって食べてよい。

三、お尻はいつもきれいだである。

トイレ誘導やおムツ交換を時間で行うのではなく、したいとき、してしまったとき、すぐに対応する。

四、お風呂は二十四時間好きなときに入れる。

五、友人、家族の面会は自由。

面会時間を定めない、会いたいときに会える。その際の『おみやげ』も持ち込みOKだし一緒に食べてよい。

六、お遊戯はしない。

アクティビティと称して、子どもじみた活動を無理強いしない。

このうち実現できていないのは、お風呂のことだけです、と彼女はおっしゃった。そして続けた。

「みなさん、お気づきですか、この中に、『縛る介護はしない』という項目はありません。話し合いを重ねる中で、『縛る介護なんてしたくないよね』という意見は一度も出ませんでした。つまり、望ましい介護を考えると、『縛る』という発想はハナっからないんです。

痴呆のお年寄りの問題行動の多くは、介護のほうに問題があるんです」

そして問題行動といわれるものを一つ一つあげ、どういう対応で解決していったかを話してくれた、一例は『弄便』である。

「簡単なことよ。お尻が気持ち悪いから、オムツの中身を出しちゃうの、出したものをどうしていいかわからないから、こねちゃうの。ね、お尻がきれいならしないわよ」

また、痴呆の方で、トイレに排便したものを拾ってポケットに入れてしまう人がいるそうだ。痴呆の方は、過去のことは覚えていても、現在や新しい過去のことかわからないことが多い。昔のトイレは『ぼっとん』で薄暗かった。だから、自分がトイレ（というより便所ね）に排便したのではなく、何だか、とんでもなく清潔で明るい所ですってしまった、とうろたえ、拾ってしまうのだ、という。だから施設では、トイレを薄暗くし、便器の中も真っ黒に塗ってある所もあるそうだ。そうすると、この行為はぴたりとなくなるのだそうである。

一つ一つうなずきながら、お話を聞いていて、私は、ここはきつとよい施設に違いはない、と感じていた。

二年前、私は祖母を亡くした。八十九歳だった。八

十五歳ごろまでは、年相応の衰えはあるものの元気で、一人で暮らしていた。二階に別世帯ながら叔母が住み、母と叔父ともう一人の叔母も近くに住んでいて、しょっちゅう訪れることができたので可能だったのだろう。私も娘たちを連れてよく顔を出した。

死ぬ日なんか来るんだろうかと思えるくらい元氣だった叔母も、少しずつ弱っていった。呆けも始まってきた。そして、亡くなる二年ほど前から表情がほとんどなくなり、眠ってばかりいるようになった。

私は、そんな叔母に手をのばして触れることができなかった。いつも、叔母を真ん中にした母たちきょうだいの『介護チーム』の輪の外から、こわごわ叔母を見ていた。気丈で、ときには意地悪かと思うほど人に厳しく、美しかった叔母が、よばよばのお婆さんになってしまった……。

今回の実習で、きつとお年寄りに触れる。手をのばして触れることができたとき、私も、あの輪の中に入るのだ、そう思っていた。

初めて触れたのは、祖母と同じくらいの年の女の方だった。お風呂上がり濡れた髪を、ドライヤーで乾かしてさしあげたのだ。

ふわふわの、たよりなく細い銀色の髪に触れ、暖かい風にあてながら指でとかしていると、この小さなおばあちゃんが生きてきた、長い長い時間の重みが、私

に伝わってきた。それは、ものすごい量の時間だ。自然に、その時間を、その時間を背負っている小さなおばあちゃんを、敬う気持ちになった。

おばあちゃんが死ぬ前に、もつと触っておくんだっただ。触ってみれば、きつとおばあちゃんのことをもつとよくわかっただろうに、そう思いながら私は、その方の髪を梳いていた。

三日間の実習を、一日目はデイサービスで、二、三日目はショートステイで行なった。

デイサービスに来るのは、まだまだ元氣な方が多い。痴呆の方もほとんどいない（でも中には、全介護に近い状態の方もいる。特養には入れないのか、入れたくないのか、いずれにしても介護者の方の苦勞が思われる）。

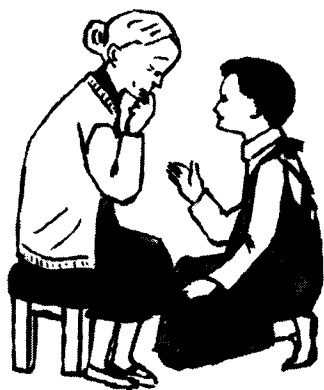
だが、ショートステイは違った。ここにはいろいろな人がいた。

まったくの子どもに還ってしまっている人がいた。彼女は七十代半ばか。とても洗練された『イケテル』ファッションで、他のおばあちゃんたちと全然違う。いつも素足で、跳ねるように歩き、私の娘たちの幼いころのように、見えないものがあると想像して並べて遊んでいる。備品や、他の方の杖などにも手をのばしていたずらをする。

背筋のびんとびた初老の紳士は、はじめ付き添いの人かと思つた。ボキヤブラリーも豊富で発音も明瞭。でも内容はさっぱりわけがわからない。

中でも私が心をとらえられたのは、七十六歳だという女性。三十歳まで小学校の先生をしていらしたとのことで、達筆で絵も上手。でも、彼女は、つよい不安と自己嫌悪に苛まれているのだ。

「私は大馬鹿者です」「皆さまの中で恥をかいてはいけないと」「どうしたらいいんでしょう」「心配で心配で」「眠ってもいいんですか？ 笑われませんか？」始終訴えている。一体、この知性的であつたらう彼女を、



● 老いのかたち

何がこんなに不安にさせているのだろう。どうすれば不安から解放してあげられるのだろう。哀れでならない。お話相手が仕事の実習生の私は、手を重ね、背をさすり、大丈夫ですよ、何にも心配はありませんよ、と繰り返すことしかできなかった。

それにしても、老いには何とさまざまなかたちがあることか。月並みな言い方だが、百人のお年寄りがいれば、百通りの老いのかたちがあるのだ。

そして、三日間の実習の間、一つの言葉が私の心から離れなかった。

『姥捨て』

オリエンテーションで感じたように、ここはとてつよい施設だった。

清潔で明るく、食事もおいしい。職員の方たちも誠実で、元氣よく、理想の施設にすべく努力を重ねていることが感じられる（それにマルもいる）。

それでも、その言葉を打ち消すことができなかった。

そして、利用者のお年寄りも、その言葉を抱えているように思えた。ある人は怒りながら、ある人は困惑しながら、ある人は静かに受け入れ、ある人はひたすら打ち消して明るく過ごしながら、どこかでその言葉を意識しているように思えてならなかった。

初日のデイサービスの、帰りの車の中で、ご自分の人生を静かに語り続けたＴさん。二十五歳で、息子が

二歳だったとき、夫が三十歳で戦死してしまった。姉夫婦に息子を預けて、必死で働いた。数年たつてやっと息子を引き取ることができた。さらに数年たつて、夫の骨箱が帰ってきた。あけてみると、中には木の葉が一枚入っていた。悔しいから軍人恩給ももらわなかった。再婚の話もあったが、再婚して幸せになった人なんかいない。断つて、ずっと一人で息子を育てた。今は息子一家と暮らしている。孫もいる。

すでに傾きかけた初冬の金色の光の中で、淡々と語ってくれたTさんの人生。

「私、今日ここに実習に来て、Tさんにお会いできてよかったです。どうぞお元気で」

「私もあなたに会えてよかった。お勉強しつかりね」

そう言葉をかわして車から降りていったTさんは、今日も静かにデイサービスにやって来るのだろうか。

ショートステイでは、ほとんどの方が、日中ぐるりとテレビを囲んで過ごす。が、中に一人、皆の輪から



離れて、一日中窓の外を眺めている男性がいた。七十半ばだろうか。お話すると、痴呆があるとも思えないし、一人で歩くこともできた。どういう事情でショートステイを利用されているのか、実習生の私にはわからなかった。

「テレビはお嫌いですが」と声をかけると、

「いや、そういうわけじゃないけど、外を見ていたほうが楽しいんでね」とおっしゃった。そして、外の高架を示し、こっちから来るのが上り、こっちから来るのが下り、下り電車は自分の故郷へつながっているのだ、と話してくれた。あの方はもう自宅へ帰られたらうか。故郷には、今でも時折帰ることがあるのだろうか。

さまざまなお年寄りの、さまざまな老いは、あまりにも重たく、受け止めきれずに私はよろよと、介護職への道を一步踏み出した。

(え・箕輪絵衣子)

## 私の意見

## あなたの意見

### 電話に子どもを 出すことについて

### かわいくないぞ！ 他人の子

川崎市多摩区 鈴木貴子（34歳）

自分の子どもがかわいいあまりに、  
赤の他人も自分の子をかわいいと思っ

ているだろうと、勘違いしている人はいる。仲間うちで一番早く子どもを生んだ友人がその一人で、彼女のうちに電話をかけると、当時三歳くらいだった娘との会話を強要されるのだった。

友人いわく、「電話はすべておじいちゃんからだと思ひ込んでいるのよ。私が電話していると代わってつてうるさいの。だから少し話してくれない？」

なぜ彼女の子を納得させるために、忙しい私が無駄な時間を割き、無駄な電話料金を払わなくてはならないのだろうかと思った。しかも「なんでおじいちゃんじゃないのっ」とわめかれてあやまらなくてはならないのだろう。

当時独身だった私も、現在子どもを持つ身なので、子どもに電話をじゃまされることはある。しかし、三歳ともなれば親が真剣に怒れば善悪の区別はつくものだ。彼女は、それが他人の迷惑になることがあるとは気づいていないらしい。

義妹はひとり娘を溺愛し、「ピアノが上手」「リズム感がいい」「ダントツ

にかわいい」とわが子を手放しでほめまくる親ばかりである。

その姪がやはり二、三歳だったころ、わが家の留守電にずつーと彼女の意味不明メッセージが入っていることがよくあった。一時期、電話に凝っていてかけまくっていたらしい。「お話上手でしょう」と悪びれもせず義妹は言っていたが、本物の電話をおもちゃにするのはいかがなものか。姪のおかげでメッセージがいっぱいになっていたこともよくあったので、緊急連絡が入らないこともあったかもしれない。当時携帯は普及していなかった。

うちの子はこーんなにかわいいんだからみんなもかわいいと思ってくれて当然。そんな思いが人に迷惑をかけることになる。ろくにしゃべれない子が電話してよいのは、じじばばだけ。勝手にとってしまう子には断固怒る。現代人はみな忙しい。子どもの遊びにつきあっている暇はないのだ。電話は子どものおもちゃじゃないぞ。

# ゲシュタルトセラピーを 仕事として

インタビュー・柳沢順子

日本テレフォンサービス会社設立

荒川

（ユーカリのアロマを焚きながら）ユーカリの香りはラベンダーと違って眠くならないし、風邪にもとてもいいんですよ。どうですか？

柳沢 樹木のいい香りがしてきました。確かにスッキリした気分になります。

さて心理学博士であり、ここヒューマニクス研究所の代表セラピストとして活躍なさっている荒川さんは、もともと専業主婦をしてらしたわけですが、まずこの世界に入られたきっかけをお話してください。

荒川 はい。長年主婦をやってきた人が社会に出ようとするととても大変ですね。能力はあっても精神的に抵抗があるから。それを克服して一歩踏み出すための勇気が欠けているとなかなか出てゆけないものです。私の場合は「自分自身の問題をどうするか」が最初のきっかけでした。二十五年前三十代だったころ、子どもを二人産みあげたので自分も社会人として自立したいと思っていたのね。

当時ちょうど日本で電話が一家に一台普及し始めたころでした。夫の提案で、電話を使って悩み相談を受けるサービスの会社を興そう、ということになって。夫が仕事でアメリカによく行く人で、向こうではすでに大人気の商売だったのね。

柳沢 七四年にお二人で日本テレフォンサ

ービス株式会社を興したのですね。当時の電話の普及の様子は、今でいうパソコンのような感ぜだったのですか？

荒川 まさにそうです。直接会わなくていいプライバシーも守られるので相談者は安心する。最初は一本の電話から始めたのでサービスを受け始めたら、相談の内容の

ほとんどが女性からの性に関することだったんですね。身体の構造や避妊、性病や夫との関係に悩む声が多かった。実はこれは私自身の問題でもあったので、本をたくさん買って勉強しました。

柳沢 荒川さんも夫婦間のことで悩まれていた。

### 杉山医師との出会い

荒川 仕事をしたのでこれ以上子どもは産みたくない。でも避妊の知識がない。そんなとき、産婦人科医の杉山四郎さんの「新しい避妊」という本に出会ったんです。これがとても分かりやすくてね。で、この先生にいろいろ相談にのってもらいたいと思ひ、会いに行きました。テレフォンサービスで性の相談を受けています、と言うと先生は、「それは世の女性たちにとって必要なことだし、とてもいいことだ」と。で、私は思い切って言ってみました。

「でも知識が追いつかないので、先生の本の内容を原稿に起こしてテープに吹き込んだものを電話サービスで流したいんです



けど」と。

先生は二つ返事でOKしてくださった。自分の本はなかなか読まれないけれど、電話サービスタから流れてきた内容なら皆聞くかも知れないと。それからが大変な人生の始まりでした。

女が表立って性だの避妊だのの活動を始めたものだから、世間やマスコミからもみくちやにされてね。私は毎日家の中で地道に電話相談の仕事をしているだけなのに、自分の知らないところで勝手に私の虚像が造られて非常にいやな思いもしました。一方、電話サービスタのほうは口コミで評判が広がって、電話会社の回線がパンクしかかってこちらも対応が大変でした。

## 会社の発展

柳沢 それだけ多くの女性が性の知識から隔絶されていたんですね。

荒川 ええ。そのうちだんだんに、テープを聞いたけど質問にも答えてほしいという相談者が増えてきた。一人ではどうていこなせないの、新宿の保健所へ行って助産

婦さんの協力を頼みました。そしたら最年長のリーダー格で八十歳の現役助産婦さんが、すぐに二十人ほどの助産婦さんを私の電話サービスタに派遣してくださった。さらに杉山先生からも女医さんを何人かご紹介いただいた。これで助産婦さん五人と女医さん一人のチームを組み、毎日交代で一定時間、電話相談を受けることができるようになりました。電話も自回線引いてね。

柳沢 素晴らしいですね。スポンサーはいのですか。

荒川 私も一生懸命、営業活動しました。いろいろな回つた中で一軒だけ、オカモト理研というコンドームの会社がスポンサーについてくれたんです。「スポンサーとして名前を出すけれど電話相談の中でコンドームの宣伝は一切しない」というこちらの条件ものんでくれました。これで電話相談を三年間続けました。この間の相談者の数は二万六千人ほどでした。

柳沢 三年で終えたのはなぜですか。

荒川 やっているうちに、「とりあえず電話で聞けばいいや」といった安易な人たちが気になりましたのです。相談すればその

ときは答えをもらえる。でもそこまでなんです。これでは女性がなかなか自立しない。柳沢 せっかく避妊の知識が得られても、多くの女性が子育てだけの人生からあいかわらず自立しない。

荒川 ええ。夫や家からもね。で、これこそがまさに私自身の問題でもあったのです。夫は明治時代的な男尊女卑思想の強い人で、私はかなり押さえつけられた生活を送っていました。その上夫と一緒に始めた商売で妻ばかり脚光を浴びるのが気に入らなかった。夫からの嫉妬は、それはそれは苦しかったです。私はそれまで築いた人脈や実績ごと会社をすべて夫に残して、子ども二人と家を出ました。

## カウンセラーの道に

柳沢 生活費はどうされたんですか。

荒川 保険会社に勤めました。そのかわりいろいろな心理療法の学校へ通い、勉強をしてカウンセラーを始めました。でもやっているうちに、「どうすればいいのでしょう」「私はどうすべきか教えてください」



という指示を求める相談者が多いことに気づくんです。私だって悩めるただの人間ですから、そんなたいそうなことは言えませんが、まして他人の人生を左右するようなことに安易に答えなど出せない。

**柳沢** 相談者が依存相手を夫や家からカウンセラーやカウンセリングに変えただけで結局何も変わらないとお感じだったのですね。

**荒川** ええ。それまでやってきたカウンセラーの勉強では、自立を促すことの限界を感じたのです。で、カウンセリングも辞めました。そのとき仕事先でリッキー・ウルフとの出会いがあったんです。

リッキーはゲシュタルト療法のセラピストであり、東京ゲシュタルト研究所の創立者です。彼女に「カウンセリングで答えをほしがる相談者をどうすればいいのか」と聞きました。するとゲシュタルト療法の勉強を強く勧められました。当時ゲシュタルトを熱心に勉強していたのは東大や聖心の大学教授たちでした。その中に交じったの勉強です。リッキーの授業は英語だったので通訳が付きましたが、リッキーと通訳と

の感性やマインドが違う。特にゲシュタルト心理学は言葉と一緒に感情や表情、態度、雰囲気など、相手から発するいろいろなものを感知取る作業です。通訳なしにリッキーの発するものをすべて判るようになりた」と切望し、英語を含めて必死にやりました。

**柳沢** すごくですね。

**荒川** 三年間で全過程を終了したのですが、それは本当の自分自身を発見する過程でもありました。私の心の底に自分でも想像を超えるほどの怒り、悲しみが沈澱していてどろどろと渦をまいていたのです。勉強はそれらのおどましい感情を直視して受け入れてゆく作業でもあったのです。他のカウンセリングの勉強では気づけなかった。

## ゲシュタルト療法

**荒川** ゲシュタルトをやってゆくうちに、自分だけじゃなく一緒に勉強していたグループ全員がどんどん成熟していくのが手に取るようにわかった。電話相談をしていた

ころから感じていた疑問、つまり自分を含めて、日本人というのはどうも成熟しない民族のようである。身体のことであれ身におこったことであれ、自分で考えてどう対処するか、ということをお教えられずに大人になる人が多い。じゃどうすればいいのかといった答えも初めてはつきりわかりました。

**柳沢** 未熟な精神のままだから生きにくいと。

**荒川** そうです。例えば他人の幸せな話を聞いたときに「ああ、あの人は幸せなんだなあ」と素直に思えるとしたら、それは他人の幸福を受け入れているわけです。ところが「フン！ そんなことくだらない」と感じる人がいたとする。それは他人の幸福を受け入れられないんですね。嫉妬を感じ、自分に直面したくない。他人の幸福によって、いやな感情に支配されて苦しむ自分が辛い。だから他人の幸福の話をそのまま受け取りたくないんです。で、「どうせ裏でロクでもないことをしているはずだ」などというふうに、「他人の幸福」を自分のなかで勝手に歪めてしまつて、嫉妬との直

面を避ける。これを私たちは「感情の合理化」と呼びます。

**柳沢** これは皆げつこうよくやりがちですね。感情を合理化しているんですね。

**荒川** 未熟な人ほど日常的にこれをやっています。ありのままの現実を受け入れられないから、あらゆるものを歪めて受け取っているし歪めかたも大きい。自分なりの勝手な解釈でできているから世間と折り合わないのです。

**柳沢** 自己中心ということですね。

**荒川** そうです。精神が未熟な人は感情の強い動き、感情情動に耐えようとしません。怒ったり、悲しんだり、悔しがったりしないように自分の感情にフタをして何もなかったことにする。こうして感情や感覚がガチガチに固まってゆく。

フタをするというのは自分の意志でやっている。つまり自然な現象ではない。なかったことにしているだけで、感じていないわけではありませんから、怒りや恨みは実は心の底に沈殿しているんですね。

**柳沢** 恐ろしいことです。

**荒川** 情動を受け入れないということは当

然、嬉しい、楽しい、大好きといった明るい感情にもフタをしてゆくことになる。こうして素直な感情や感覚が抹殺されて石のように固まってゆく。そしてさまざまな病が引き起こされます。精神と身体は切り離せませんから両方ともに病むのです。

**柳沢** 病気は自分の意志が引き起こしているということですね。

**荒川** そうですね。病気といっても遺伝性やウィルス性のものではなく、たとえば、摂食障害、薬物、アルコールなどへの依存症。引きこもりによって自律神経がおかしくなる。ストレスによって耳が聞こえなくなったり目が見えなくなったりするのは、まさに感情を遮断して生きているからです。現実と直面したくないから、問題解決に対して臆病だから、身体の具合を悪くして入院したり、家に引きこもったりするのです。

「うのみ」という言葉がありますね。食物をよく噛まずに飲み込んで消化不良を起こすように、ものごとをうのみにすると心理的消化不良を起こし、分裂的になります。

**柳沢** なるほど。

**荒川** ゲシュタルト療法のセラピーでは、この長年かけて固めてしまったものを解いてゆき、ありのままの自分を取り戻すべく「気づきのトレーニング」を重ねてゆきます。本人に変化を求めないで「こうしなさい、あしなさい」といった指示は一切しません。また原因を追求したり、状態を分析したりもしません。それらは意味がないからです。最終的に「人間の成熟」をとげることが目標で、それがかなうと「心身の健康」も回復しますよ。感覚遮断によってブロックされていた感情が流れ出すと、滞っていた気も流れて身体全体がよくなりま

す。

**柳沢** 精神の成熟がすべての問題解決のカギということですね。

## 本当の自分を取り戻して

**荒川** リッキーとの出会いは天啓でした。私自身ゲシュタルトを学び始めたころはひどい状態だったんです。保険の収入だけでは親子三人の生活とセラピーの学費をまかなえないので夜は水商売しました。過労



で身体中ボロボロだったし、精神的にも長年の恨みと怒りに押しつぶされそう。ワークの最中何度も太泣きしました。バケツ何杯分の涙を流しましたね。

でも自分の中で気づきが深まるにつれて体調もどんどん回復してゆく。ゲシュタルトセラピーで、人間の潜在能力や自然治癒力のものすごさにも驚かされました。

私はこれをぜひとも日本に広めたかった。私がやれば日本人のためのゲシュタルトセラピーが実現する。日本の風土、習慣、感覚をふまえたセラピーです。

**柳沢** アメリカ人のリッキーはアメリカ人に合ったゲシュタルト、そして日本には日本人のための。ところで、ゲシュタルトはセラピーですね。セラピーとカウンセリングの違いをどうとらえればいいのでしょうか。

**荒川** セラピーは心理、身体、性格すべてにわたって効果を及ぼします。だからセラピーを受けている最中は非常に辛く、きびしいと感じることもあるでしょうが、逃げなければ劇的な効果が期待できます。カウンスリングは主に心理に働きかける。もち



ろんそれだけでも人は気づきを得られるし、それだけで十分なケースもあります。

**柳沢** 先ほどからユーカリのいい香りに包まれてこの取材をしています。この専門講座にはアロマテラピーやタッチングといった授業がありますね。

**荒** そうです。植物のエッセンシャルオイルは怪我や火傷、病気の薬として古代から治療に使われてきましたが、それ以外にも身体や精神の不調を改善し恒常性を図ったり、リラクセスさせるのにも効果的なのです。やさしいタッチングも自然治癒力を高めストレスを癒す。身体からも心地よさのアプローチをしていき、全体を治すことが目的なのです。

**柳沢** 身体が喜ぶと心理にもいい影響がある、と。では、「いい香り……」、「これ美味い!」「あそこは居心地がいい、悪い」といった感情を大切にするのはいいことなんです。

**荒** そうですよ。わがままでも何でもありません。その感情に自分で責任を持つ限りにおいてね。ここでのワークも絨毯の上で座っていますが、座布団を何枚使おうが、

正座しようが足を伸ばそうが自由です。寝転がってしたいならそれもいい。正座はそれが楽な人はすれはいい。でもきちんと見られたくて、足が痺れるのに正座を続けるのはばかげています。足の痺れや不快感にとらわれてワークどころじゃないでしょう。

**柳沢** たしかに。つまりワークに対する反応においても、あくまで素直な感情を出せばいいのです。ワーク中のエピソードを何か聞かせてください。

**荒** ゲシュタルトのセラピーを学んでいるところのことです。二人で組んで向き合い、お互いアイコンタクトをして、相手に対する感じを述べるワークをやっているときでした。その日、私が組んだ女性がとてもイヤな人だったんです。優しい言葉をしゃべりながら笑顔を作るんですが、その自分では笑顔と思っている表情が実に恐ろしい。ぐにやーっとゆがんだ顔になる。私はそれに耐えられないので、「あなたと組みたくない。そのゆがんだ表情は見るに耐えない」と正直に言っただけです。そしたらその人はゆがんだ表情を張り付かせたまま、突然私

に飛びかかってきたんです。もうびっくり。すぐに周りにいた男性たちが止めてくれたんですが、それは怖かった。その人はワーワー泣き、私はしばらく震えていました。

そして一週間ほどして報告がきました。

その人が「旬美さんに感謝する。あのときはショックだったけれど、自分がそんなゆがんだ顔を笑顔だと思って他人に見せてきたことに気づかなかった。ようやく自分の問題がわかった」と言ってきた、と。私はその人に意地悪をする気などなく、ただ感じたことを素直に口にしました。

**柳沢** 荒川さんの心から出た言葉がその人に気づきをもたらした。

**荒川** いろいろ考えて準備した言葉ではなく、今ここで、自然にすうっと出た言葉には真実がこもっているんです。真実から目を背けてきた人にはそれはショックですよね。私はありのままを口にするので、セラピーグループの中でも、怖い、大嫌いだ、デリカシーがない、などと言われましたが、その一方で「あそこまで言ってくれる人はいない。旬美さんのおかげで気づいた」という人も多くて。おかげで私も、「他人の

ゲシュタルトとはドイツ語で「かたち、全体のかたち、全体性」を意味します。ゲシュタルトセラピーは1950年代に精神分析家フリッツ・パールズとゲシュタルト心理学者、ダンスセラピストたちによって、ニューヨーク、カリフォルニアで研究がはじめられ、後にマズロー、ロジャースなどが中心となり研究の輪が広がりました。この療法は、創始者パールズの「感情は人生のガイドである」という言葉が示すように、「ありのままの自分」「自然な気づき」を大切にし、自分自身を統合した全体として実感することを最終目的とします。パールズはユダヤ系のドイツ人で、始めはフロイトの精神分析を学びました。その後、身体的要素を重視するライヒの分析の影響を受け、さらに日本では禅を学び、東洋思想の影響も受けています。

ためになる、ということとは自分に正直でいることなんだ」ということをつかんだんですよ。心から出た言葉は人を治しますね。

### 自分が試されるとき

**柳沢** セラピストとしてむずかしさを感じるのとはどういふときですか。

**荒川** たまに私の能力を超えた問題を抱えている人が来ることはありません。自分の持てるものを駆使して全力であたつても跳ね返されるような場合です。そういうときは試されているなあ、と感じましたね。

**柳沢** それは今は克服された問題なのですね。具体的にお聞きしてもいいですか。

**荒川** 何かにとり憑かれたようになってしまっている人。昔から「キツネ憑き」という言葉がありますが、私と向き合ったときに、本当に動物じみた行動やうめき声をあげる人、本人の意志と関係なく手や足が動いてしまう人。これは演技などではありません。自分の素直な感情を封じ込めすぎた結果、身体と心がバラバラになってしまっているんです。本来の自分自身がどこか

へ押しやられて代わりに奇妙なものがとり憑いたようになっていく。本人の苦しさも大変なものです。

**柳沢** 今、宮崎駿監督の映画「もののけ姫」が頭に浮かびましたが。

**荒川** ええ。まさにああいった世界です。

中国の医学の思想に、人間の手、足、首、胴体はそれぞれ独自の意志を持っているという考え方があります。健全な心がそれと統合している。ところが心が病んでいると身体がバラバラに動いてしまう。その状態で死ぬと勝手な意志をもった手や足がお化けになるといふのですが、これはおとぎ話ではなく真実であると私は思います。そういう人がいるということを経験で知っていますから。

**柳沢** ああ、そういう人たちは恐ろしくはないのですか。

**荒川** それはもう。かつてそういう人たちに会ったときに怖くて怖くてね。セラピーといったってコミュニケーションを取るところではないのですから。そんなときに、山伏のように山にこもって修行をする修験者に出会いまして、その人と一緒に毎週末

真冬の高尾山に入っていつて冷たい川を泳ぎ滝に打たれる、ということをやりました。凍るような水に打たれていると、ああ、もう死ぬかもなあ、と思うくらい辛いんです。でも滝から出て衣服を替えたりしているうちに、火にあたつてもいいのに、身体がぽかぽか温まってくる。そしてお腹の底のほうからなんともいえない力が湧いてくるんです。自然の厳しさに身をゆだねているうちに、「自然が厳しいのではない、自然はただありのままである。それをこちらが勝手に厳しいとか冷たいとか感じるんだ」ということがわかってきた。

滝の冷たさにしり込みしていると、自分と滝とはなんのかかわりもないままですが、思い切つて飛びこんでみると、滝から実にすごいパワーをもらえる。その修行のおかげで、自然体でいるということが理解できた。どんな人が来ようと自分は滝のようにあるのままであればいい、と。その後、以前なら怖いと思うような人が来て荒ぶった様子を見せても、こちらがそれに振り回されずに全くの平常心でいると向こうも静まってゆくんです。

## 自己責任

柳沢 ゲシタルトセラピーというのは自己責任を自覚させて自立させる、という印象がありますね。

荒川 そうです。何でも自分に起きたことは他人のせいではなく自分の受け止め方の結果である、と自覚させます。私はクライアントに「私があなたの病気を治すのではないよ、あなたが自分で治すんだよ、もしまだ病気でいたいと感じるなら病気でいてもいいんだよ」と言います。すると「むりに治そうとしなくていいんだ、じゃ、やっぱりもう少し入院しておく」なんて言う人もいます(笑)。

またこんな人もいますね。エリートといわれる人で子どものころからずっと優秀だった。ところが社会に出てみたら理不尽なことが多くて、エリートとしてのプライドがペしゃんこになってしまつてここに来た人でした。その人は、セラピストはてっきり自分を甘やかしてくれるものと思つていたみたい。でもぜんぜん期待はずれだった

もんだから怒り出してね。で、私も「気にいらないうちへは来なくていいですよ。お金もお返しますから」と。その人は「セラピストがクライアントをこんな邪険にしているのか」と怒鳴るので、

「すみません。私は人格者ではありません。未熟者なので限界があります。あなたのよい人とは関わりたくない。どうぞお帰りください」と追いつ返ししました。そうしたら、それからしばらくして、またその人が来た



んです。「やっぱりここじゃなければ自分は治りそうもない」と。でも以前のことがあるからこちらもそうやすやすとは受け入れられない。

「あなたが本気で治りたいかどうか信用できない」と言いました。以前はすごく居丈高だった人が「本気だからどうかもう一度、受け入れてほしい」と必死で頼みんですよ。本人がその気になって健康を切望したときにはみるみる治ります。

かつて、そういう重症の摂食障害だった少女がいてね。うちに通いながらも、何度も挫折して元にもどるということを繰り返していた子ですが、その子が先日、赤ちゃんを連れて訪ねてくれてね。とても健康ないいお母さんになっていました。昔はいつ死んでもおかしくないくらい重症だったから、もう本当に嬉しくてね。健康も病気も本人の意志次第なんですよ。

## ヒューマニックス研究所

**柳沢** リッキー・ウルフに三年間師事して、全過程終了後の八七年、「東京ヒュー

マニックス研究所」を設立したのですね。

**荒川** そうです。そのとき私はお金なんかなかったのだけれどね。さる会社のトップの方と話をするきっかけがあつて、ゲシユタルトセラピーや身の上のことを交えたいろいろなことを話していたら、突然その人が、自分が出資者になるから、セラピーのオフィスを構えなさい、と言ってくれたんです。

**柳沢** またまた重要な出会いがあつたんですね。

**荒川** ええ本当に。私には人生の節目ごとに、あたかも救世主のような重要な人物があらわれるんです。でもそのときは、オフィスを構えても成功する確信がなかったし、お金を借りても返せる自信もない、と言いました。するとその人はスポンサーと思ってくればいいから、とにかくやれるだけやってごらんなさい、と。

**柳沢** 荒川さんの真摯な生き方のファンになつてしまったのでしょうか。

**荒川** その方は名前を言えばだれでも知っているような有名な会社のトップで、怪しい人ではありませんでした。しかもお金を

出しつつ私にはオフィスの所長としてしっかり仕事をすること以外、個人的に何の要求もしてこなかったのですよ。私はさんざん助けてもらったその方にろくに恩返しもできないまま、その方はすでに他界されてしまつて。

**柳沢** まさに救世主だったのですね。

## ゲシユタルトセラピストの展望

**柳沢** ゲシユタルトのセラピストになる方法、向き不向き、そしてセラピストの就職状況などお話しくださいますか。

**荒川** 当研究所では二年の基礎過程プラス二年の専門課程、あわせて四年の専門家養成講座を用意しています。一時間を一位とした年間九十六単位と、年二回の合同合宿による六〇〇単位で全過程終了となり、ディプロマ（修了書）発行となります。すでに十三期生（二〇〇一年現在）を迎えています。

**柳沢** 全過程修了した人はゲシユタルトセラピストとしてどういう活動をされていますか。



**荒** 修了者でできびしいテストに合格した人にはインターン、派遣、スーパードヴァイジングといった制度があります。

河口湖のそばに「アルカンシエール」という心理療法の研修館がありまして、そこは何日か泊まり込みで行うワークを実施しているのですが、ここの講師として派遣したり、また企業や学校、病院からの要請に對する派遣もあります。

ヒューマニックス研究所の中に「フェスティナ・レンテ」というアロマトリフレクソロジーのスタジオがあるので、そのスタッフとなることも可能です。もちろん個人で開業もできます。また当研究所は二〇〇二年春に向けてNPO法人をめざしています。

**柳沢** セラピストに向かない人ってあります。

**荒** ゲシユタルトのセラピストに向かない人というのは性に対する偏見がある人でしょいかね。人間を理解するとき、性は避けられません。問題の根底には性の問題が潜んでいることが多いですし、そこをきちんと認識しないと解決は無理なのです。

性に偏見をもつカウンセラーではクライアントは心を開くことはできないでしょう。授業でも「産まれる性」「コミュニケーションの性」「解剖生理学での性」などあらゆる角度からの性を勉強しますよ。

向いている人は、熱意や志があれば誰でも大丈夫です。学歴や職歴は問いません。四年間のきびしい過程を修了できた人は優秀なセラピストになります。

このセラピストのいいところは、世間的なマイナスイメージをプラスにもってゆけるということ。理不尽で辛い体験をした人ほどそれを生かしますし、また年をとって経験が増すほどにいいセラピーができる可能性が大きいことです。年齢制限なし、です。セラピスト同士や各協会とのネットワークもありますので、セラピストが孤独に陥ることもないんです。

**柳沢** 人間の普遍的な部分に関する療法なので、世相や流行に左右されにくいというところもいいですね。

## 専門の生命保険コンサルタントを派遣いたします。

(東京都内・近郊のみ)

お一人ではチョット心細い、  
でも何人かいれば心強いあなた…  
お友達・職場の仲間などなたでも結構です。  
3、4人でも何人でも  
あなたのお宅に、あなたの職場に、お集まりください。  
生命保険の専門家が皆さんの疑問にお応えいたします。

くわしくは「わいふ」あて 電話で資料請求してください  
わいふ指定代理店 東京海上火災保険株式会社 東京海上あんしん生命保険㈱

杉本保険事務所 杉本侑子 ☎03-3260-4771



## 役者に惚れた

横浜市都筑区 ゴル(37歳)

この年でまさか、映画にはまるとは思わなかった。それも、映画というよりも一人の役者さんにぞっこん惚れ込んでしまうとは。

きっかけは、九月の末にテレビでは

1つと見ていたアクション映画。彼は悪役で死闘を繰り広げたあげく二人のロサンゼルス警官に殺される。そのあまりのむごい殺され方に、いつの間にか、彼を応援している自分がいた。ラストは、「チャイニーズマフィア」だからってこんな殺され方、理不尽よ!と、テレビに向かって涙した。その時は彼の名前すら知らず、無名ながらよく頑張った、などと思っていたのだ(注1)。それが数日後、これもまたま衛星放送を見ていたら、彼(リー・リンチェイ)が映画に出ている。しかも主役で、三夜連続、彼の特集が組まれているではないか。自分が見ていた偶然に感謝した(注2)。

チャイナ服を大陸の風にはためかせ、徳高く、高名な医者で、武術の達人という役柄。呼吸一つ乱さず、無駄のない動きで、悪者を懲らしめるアクションは、見ていて胸がすく思いだ。

人間の心のダークな面にばかり関心がいつてしまう昨今の私が、ロスの警官に見向きもせず、チャイニーズマフ

ィアに心引かれるのはわかる。が、今度は真つ向から「正義は勝つ」と信じて戦う男に鼻白むどころか熱くなるなんて、自分でも信じられない。アタシをこんなふうにとりこにした彼って何者? がぜん興味がわいた。

インターネットで検索してみると、その筋では有名人。日本では二十年も前に一世を風靡したこともある(注3)。

三十年前、彼は八歳にしてすでに中国で武術の頂点を極め、その後五年間そのタイトルを保持。映画界から声がかかり香港・中国映画に出演、ほどなくハリウッド映画に進出し、私がああ作品と出会ったというわけだ。

彼は文革後の中国が、中国文化を世界へ紹介しようとやっきになっていたころ、自分の意志とは関係なく、国の政策によって選抜かれ、中国武術を教え込まれたいわば、『純正中国製品』だ。特撮に頼らない、引いたアングルの武術シーンからは、鍛えぬかれた肉体のみが持つ、本物の力強さが迫って

くる。エステとかプロテインとかで手軽にまとう見せかけの美しさではなく、時間と労力をかけて磨き上げたその体を持つ者こそ、役者と呼ぶにふさわしい。国を挙げて投資をした技と肉体をこんなに惜しげもなく披露してしまっているのか。

でも私がこれほど彼に入れ込むのは、彼の精神の高潔さとも言えないのか、心・技・体の三位一体を具現した努力の人に巡り会ったからとも言えいいのか。哲学に裏打ちされた生き様のかっこよさが、ホームページからひしひしと伝わってくるのだ。

彼は自分のオフィシャルページを持っていて、フィルム・プレス・写真・生い立ち（これがめちゃくちゃおもしろい）のほか、宗教・哲学などについても熱く語る。ファンとの一問一答（三年分）は誠実であろうとするゆえに膨大な量だし、宗教や哲学については、くそまじめな彼の考え方が直球の英語でんこもり（ただしこれらは彼の口述を別の人が英文で打ち込んだも

の）。サイトはきちんと管理されているので鮮度もよく、毎日遊びに行っても飽きない。今撮影中の映画のこぼれ話が、写真と共にアップされていくのをリアルタイムで追っていると、自分も制作に関わっているような気分になれる。

とにかく彼の作品を見なくっちゃ、と私はビデオショップに通い始めた。店まで自転車で往復するだけなのに、どきどきしてしまう。まるで恋人にでも会いに行くような心持ち。これってもしかして、ときめいているってやつ？ それとも単に、息切れしているだけ？ でも、人生、心ときめかすのに、何がきっかけになるのかわからないものね。ここにきて初めて、いい年してジャーニーズの追っかけをしたり、宝塚にはまっていく人たちの気持ちがちよっとだけ分かるような気がしてきた。他人にとってはどうでもいいことでも、ひとたびその人のツボにはまってしまうたら最後、それさえあればしあわせなのだ。新しいビデオを借りた

日は、夜が来るのが待ち遠しく、食事の用意も片づけも苦にならない。

彼の出ている映画は片っ端から借りた。ついで、スケールの大きさに引かれ、他の中国映画やアジアの映画も見た。さらに、ビデオの巻頭に入る新情報を見るとそれも見たくなり、借りたい物が店に見あたらないときはNHKビデオまで借り、映画館へも行き、数えてみたら、一か月で二十本以上見ていた。

そういえば十代のころは私も映画が好きだった。でも、だんだんその世界に入り込めなくなっていくって、映画から離れていった。宣伝が派手で扇動的であればあるほど、膨らんだ期待は無残にも映画館でぶち壊されてしまう。虚構の世界の嘘くささが鼻につく。映画の出身より宣伝にお金をかけた映画ほど興行成績がよく、それで映画のよしあしを語られたのではたまらない。「金さえかけりゃいいと思って」などと批判的な見方をするようになって。子育てが始まり、映画館から遠ざ

かる。

さらに、このところ、民族だとか、宗教、資本主義などという言葉そのものにナーバスな反応をするようになってくると、資本主義の象徴のようなハリウッド映画など興味の対象外。とてもその世界にはいりこむという心境にはなれない。

そんなとき、中国の役者さんがハリウッド映画の中でなぶり殺しにされるシーンは、かなりショックだった。その彼が、別の映画の中では、美しい中国語で「漢民族のことは漢民族が決める」とか「人を愛するのには、人権なんて関係ない」、「中国人だって、同じ人間じゃないか」と言っている。その台詞のひとつひとつが、今までとは全然違うトーンで私の心に重く静かにしみていくのだ。これは彼だからか、それとも、今だからか。

中国語は美しい。音の響きではタイ語が最も美しいと今まで思っていたが、彼が話す言葉なら何だって美しい。「いつか彼とお話できたなら」の一心



で、中国語講座を聴き始めた。歴史の本も何冊か買った。映画の時代背景が頭に入っていないので、そのシーンでそうまでしてむきになる彼の心理がわからないのだ。こちらは年表と首っ引

きで読んでいる。

彼に関することなら何でも知りたい。熱しやすくさめやすい私のこと。いつ「飽きた」と言い出すかわからない。この機に乗じて、あれもこれも興味を広げている。ただでは惚れないところにいささか後ろめたいものも感じている。

注1「リーサル・ウェポン4」

注2「ワンス・アポン・ア・タイム・

イン・チャイナ」

「ファイナルファイター鉄拳英雄」

「ワンス・アポン・ア・タイム・

イン・チャイナ／アメリカ」

注3「少林寺」

## ピアノを弾く

大阪市淀川区 サン太

「小原孝」のピアノコンサートへ行った翌日ポータブル用のキーボードを買った。

小学生時代ピアノを習っていたのだが練習がきらいでよくさぼり、だんだん先生の所へ行かなくなり、自然消滅してしまった。でもピアノの音は好きで聞く機会も多く、友だちのかつこよくピアノを弾く姿を見ながらあこがれ、また弾こうかなあと思ったりした。

社会人になって、エレクトーンならリズムとかけ、へたでもかつこよく弾けるのではと始めた。先生にもついて発表会にも出たりして結構練習も自分ではやったつもりだ。でも先生はまだまだ練習が足りないと言った。エレクトーンも購入し、百四十万のローンを組み毎月の支払いも大変だった。それとやはり長い目でみて練習をやっているかないと、短期間でいくら猛烈に練習してもそうそうすぐには上達しないし、かつこよくはならない。エネルギーがだんだん他へ移っていった。

それからコンサートへ行っただけで、またやろうかなと思ひ、CDを聞いてはまた弾きたいと思ひ、結婚して仕事を辞め時間もできたのでまた先生につ

いてエレクトーンを習い始めた。でも続かなかった。その時、もう二度とピアノやエレクトーンを弾こうなどとは思われないようにしようと思ひに決めた。聞くことに専念しよう。音楽といつても聞いたことのない音楽はいっぱいあるはずだから、少しでも多くの音楽を聞こうと決めた。私はピアノには向かないのだ。

三か月くらい前からNHKFMの「弾き語りフォーユー」という番組を偶然聞くようになり「小原孝」というピアニストを知った。彼は二十分という枠の中でいろんなジャンルの曲をアレンジして弾いた。演歌、童謡、民謡、ポップス、ロック、クラシック、バイエルなど時代も今の曲から昔のものまで、ピアノレッスンのコーナーもある。選曲、演奏、彼の優しい人柄、彼の弾くピアノの音によって自分が癒される感じがした。

彼自身の推薦曲も演奏されるし、はがきによるリクエスト曲からも新しい曲を聞くことができ、聞く音楽の幅が

広がった。年配の方で病気をされて仕事を辞め、ピアノを始めた方とか小学生でピアノを習っている子どもなどいろんな人が聞いているみたいだ。だからこそジャンルが偏らないのかもしれない。

彼は言っていた。以前ピアノは、バイエルやってブルクミュラーやってソナチネ、ソナタ全部こなしの人が初めて他の曲を弾けるといふ感じだったけれども、今は違う、そういう時代は終わった、好きな曲を最初から弾きましよう。最近ではピアノの先生にピアノを教えることが多いそうだけれど、好きな曲を弾いたほうが、手が届かなければ届かない音は弾かないで、音の数を少なくしてもそのほうが綺麗な音が出るということがわかったと話していた。それがなぜかはまだ説明されていないそう。そうは言っても基本は大事だし、練習は大事だと思ひてまた弾きたいなあとは思ひていたが、聞くことに専念していた。

十二月九日「小原孝」のコンサート



に行き、ますますファンになった。イメージどおりだった。会場には区民センターということもあり、子どもからおばあさんおじいさんまで幅広い年齢の人が来ていた。途中ピアノの伴奏に合わせて合唱になったり、やっぱり生はいいなあと感じた。

翌日一万六千円ということもあり、弾かなくなってもいいやとキーボードを買った。すぐ弾いてみた。あいかわ

らずへただし、自分のイメージする姿よりかっこよくないけれど時間はあつという間に過ぎた。翌日と翌々日とわざと弾かず、四日後また弾いてみた。また二、三日あいだを空け弾いてみた。楽しかった。しばらくはこんな感じで行こうかなと思う。先生にもつかないでやっていこうと思う。今は昔練習したスマップの「夜空のむこうに」を弾いている。

## 折り込みチラシを 楽しむ

東京都台東区 高梨陽子（59歳）

平成十三年度の公正取引委員会消費者モニター募集を、新聞の「ミニ情報」という小さなコラムで目にして応募したところ、モニターを務めることになった。

モニターマニア?としては、まだ経験していない公正取引委員会（公取）

のモニターも興味があったが、法律についての不安が多少あったので電話で内容の確認をした。

すると、公正取引についての法律を理解するために研修会が開催されることであり、年数回のアンケート調査とモニター通信の提出が務めということであった。

モニター数は全国で千名、東京地区は百名とのこと。公取の担当職員の数に限られているので、千名のモニターからの情報提供が大きな助っ人となっているようである。

第一回の研修会が五月初めに開催されて、独占禁止法と景品表示法の概要や、モニター通信の書き方などについての説明があり、十時半から十五時半までの、およそ一日がかりの研修会であった。

この研修会后、モニター通信にどんなことを書いて報告していいのやらと、戸惑っているうちに日々が過ぎていた。

そのうちに、第二回研修会の開催案

内が届き、十月中旬に行なわれた。このときは、各自が持参した新聞折り込みのダイエットとメガネのチラシを見ながら、グループ討議を行なった。

ダイエット茶のチラシを見ているうちに、おもしろいことに気づいた。千葉と都内に折り込まれたチラシが、同じ会社のもので減肥茶とイギリスロイヤルティーという製品があった。ロイヤルティーは商品名がグレードアップのためか、販売価格が減肥茶よりも千円アップとなっていた。でも、原材料の天然植物十種類が全く同じものであり、写真もほとんど同じようであった。だが、減肥茶に書かれている一か月、四キログラム減量に成功しないとき、代金は全額返金するというフレーズが、イギリスロイヤルティーには記載がなかった。

この全額返金も本当に返金されるか疑わしいという話になった。電話に出る担当者は百戦錬磨のつわもので、どうにか返金しない方向にもっていくだろうと、グループ内で笑いながら話し

合った。

一か月四キロぐらいの減量は可能性があるが、十キロとか二十キロ減量成功などというキャッチフレーズは、誇大広告のようである。

チラシに社屋の写真が掲載されているものがあるが、これもあまり信用できないらしい。写真のメインの建物だろうと思いがちだが、端のほうに写っているほうが該当の建物ということもあるそうだった。

メガネのチラシについて、フレームの代金のみでレンズはサービスとうたっているのは、景品法に触れるのではないかという意見が出た。公取の担当者の答えは、メガネはレンズとフレームがセットと理解しているので、問題はないとのことであった。

この研修会時に、チラシを見て少しでも変だと思ったら、モニター通信で報告してほしいというので、その後は折り込みチラシを見るのが楽しみとなり、せっせと報告書を提出している。

時間をかけてよく見ると、表示に問

題がありそうなものに気づく。たとえば、健康食品の使用体験して回復した例として、小さな文字で九十近い病名が列記している。これは誇大広告になるのではないかしら?とか。

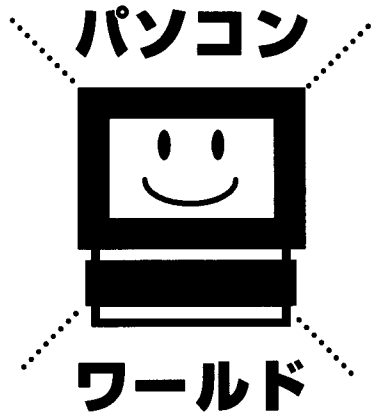
また、新築マンションのチラシで、ローンの月々の返済額だけが記載されているものがあり、販売価格やローンの返済期間も明記されていないのは、表示に不備があるのではないか?と想ったりして通信を書いた。

このように気に留めてチラシを見ると、いろいろと問題がありそうなものが多いことが分かった。

これまでは、スーパーのチラシを見るだけであり、他のものは必要ないと思ひ、ほとんど目を通さなかったが、いまでは一枚ずつしっかりと時間をかけて見て楽しんでいる。

最近、夫もチラシを真剣に見ているらしく、「このチラシ、問題ありではないか」などと言い、楽しんでいるようである。

(え・弘法堂建二)



## ウイルスは ある朝突然に

東京都三鷹市 柏木亜衣 (28歳)

それはほんとうに、いきなりやってきた。あやしい添付ファイルは開けないほうがいいとか、英語のタイトルには気をつけろとか、いろいろ聞いて

はいたのだが、どこか自分とは関係ないもののような気がしていた。ところが、私のところにもついに来たのである。あのコンピュータウイルスというやつが。

海外に住んでいる幼なじみから久しぶりのメールを受けとったのがすべての始まりだった。送信者欄にはたしかに彼の名があり、メールのタイトルは意味不明ではあったが、ちゃんとカナで表示されていた。「外国からだし、文字化けてやつかな」私はメールを開いたが、文面は白紙だった。しかし、そのメールには添付ファイルがついていた。「ああ、こっちに何か入ってるのね」

私はそのとき、もう何も、これっぽっちも疑っていなかった。何だろ、早く見たい。私はそのファイルを開けた。その瞬間、目に見えない悪魔が私のパソコンのなかに飛び出してきたのだが、愚かな私は、その恐るべき事態にまーだ気づいていなかったのだった。

次の日の朝、再びメールを受信した

私は息が止まりそうになった。無数の知らない送信者からのメール。

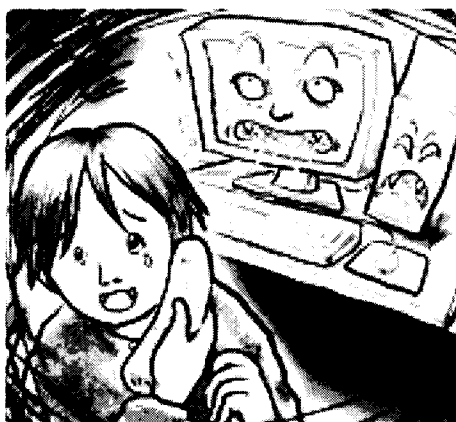
それらはすべて、私が今までにインターネットで見たホームページの管理者から送られたもので、私からウィルスつきのメールを受けとったことを警告するものだった。それらの中に、以前ホームページを見たことがあった宮内庁からのメールを発見したときには目の前が真っ暗になった。「国家の敵」なんて言葉も脳裏に浮かぶ。ああ、私何て恐ろしいことをしちゃったんだろう？

電話で友人に泣きついて、メールやインターネットソフトの履歴にあるアドレスに、勝手にウィルスメールを送るというヤツが流行っていることを知った。たいへんだ、みんなに私からのメールを開けないようお願いしなければ。私は一日中電話をかけ続けた。電話線を引っこ抜かれた無残な姿で目の前にあるパソコンが、自分の手に負えない怪物に思えた。これからまたインターネットを楽しむことができるだろ



うか。もう自信がなかった。

しかし電話を受けた友人らは意外にみな優しくった。それでわかったことだが、メール用ソフトを常に新しいものに更新しておけば、こうしたウイルスの感染やばらまきは防げたらしいのである。「あやしいからすぐ消したよ」という友人もいた。ウイルス感染にも



っと注意をはらっていたら、多くの知らない人にまで迷惑をかけることなどなかったのだ。

インターネットという世界にひろがる輪のなかでそれを利用する以上、私たちにもその環境を守る責任があるだろう。ウイルスは私たちのすぐそばに潜んでいるが、ヤツだつて万能なわけではない。スキのないところには入れないのだ。ウイルス感染には気をつけてつけすぎることではない。さあ、予防を万全にして、心おきなくインターネットを楽しもうではありませんか。

## インターネット社会の歩き方

東京都練馬区 石田ちえ（38歳）

わが家にパソコンがやってきてもうじき五年になる。単身赴任中の夫と、Eメールのやりとりができればと思い購入したのだ。

パソコンは他の家電と違って、買ってきて電源を入れればすぐに使えると

いうものではない。ここが第一の関門である。私の場合、コンピューターに詳しい弟が近くにいたのでとても助かっているのだが、ここらへんのサポートや個人に合わせたアドバイスを定期的にしてくれるシステムがないものかというも思う。

はじめのうちは「そのボタンを押して（クリックして）」と言われ、液晶画面を指でプニッと押してみたり、テレビ画面と同じ感覚で電源を切って終了したつもりになっていたり、とパソコンにはずいぶん負担をかけてきた。

これではいかんと専門用語の並ぶ解説書を読もうと意気込んでいた時期もあるが、これは「辞書を読むようなもので意味がない」と言われてやめてしまった。たしかに「ならうより慣れろ」とはよくいったもので、今では何とか使いこなせるようになっていく。

海外に赴任していた夫と交わしたメールは千通を超えた。電話では言いにくいことや日々の出来事も、文章にす

ることで気持ちの整理ができるのか、私のストレス解消になっていた。

Eメールよりも私が関心をもったのは、さまざまなホームページである。私にとってパソコンの楽しみ方といえは「ネットサーフィン」で、これはその名のとおりネット上のホームページをあちこちのぞくことをいう。本屋で立ち読みをする感覚と非常に似ている。難点は、あつという間に時間が過ぎてしまうこと。先日もPTA広報紙作成のために資料を集めようと、昭和四十年代の流行について調べていたら、次から次に懐かしいモノが出てきて、気がつけば明け方近くになっていた。

知りたい情報が一瞬で自分のところに行ってくるのはいいのだけれど、膨大な情報のなから本当に必要な情報を見分けるのは、至難の業である。ましてやその情報が正しいかどうか判断するのは自分自身である。

中には怪しげなホームページも存在する。いつだったか、新聞社のホーム

ページにアクセスするつもりが、アドレスの一字を間違つて入力したように、裸の外国人男性の画像が現れてあせったことがある。こういうのは、確信犯だという。

BBSとよばれる掲示板も訪れてみると楽しい。テーマは政治・経済から日常生活の些細な出来事にまで及ぶ。匿名で書き込めることもあつて、いろいろな考えがあるものだなあ、と感心させられる。

先日思い切つて私も書き込みをしてみた。日ごろ不満に思っている夫の実家とのつき合いについて書き込んだところ、すぐに返信がきた。

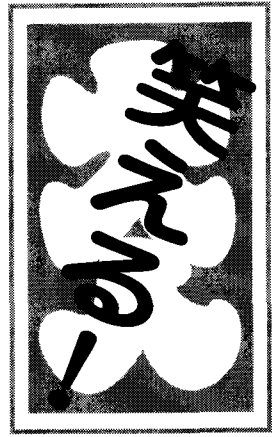
「うちもそう!」といった共感のメッセージが来るかと思いきや、「いい子ぶっている」だの「まわりからみると嫌な嫁」といった厳しい反応がかえってきた。

「なるほどなあ……」と目からウロコが落ちた。じつくりと私の書き込みを読み返してみると、そう解釈されても仕方のない部分がたしかにある。

普通の文章や手紙であれば、「一晩ねかせる」といったこともできるし、電話なら声の調子である程度理解できる。ところが思い立ってすぐに書いた文章はスキだらけで、気づかないうちに書き手の内面をあらわしている。「自分を正当化して、いい子ちゃんになりたい」というのは、まぎれもなく私の本望である。それがわかっただけでも悩みの糸口が見いだせたよう、それはそれでよかったと思う。

掲示板に限らず、メールのやりとりなど「書いたときが送るとき」でその気軽さゆえに支持されているが、ときには、言葉が足りないためにケンカを売っているのかと思わせる文章に出くわす。

誤解を招かないためにも、インターネット社会では「人にやさしく、自分に厳しく」を心がけることが不可欠である。もちろんこれは日常生活を円滑におくるうえでの常識でもあるのだけ



## 集金人が来たとき あなたは どのタイプ？

埼玉県富士見市 神定黎子（60歳）

定年退職後、新聞の集金を始めた。歩けば運動になるし、おつりの計算は頭の体操、おしゃべりをして世間ともつながっていくし、時間の都合はつくし、私にぴったりのよい仕事だと思っただけである。

さてさて、訪ねてみると、いろんな家があった。

### A、一番感激するタイプ

ぴったり三千五百六十五円を小袋からジャラジャラと出して「ハイ、ご苦労様」と渡してくれる家。

「オー、ありがとうございます。こんなふうにご利用して下さる家なんて、私、三百軒くらい回っているけど、ほとんどありません。ありがとうございます、お幸せになりますように」

思わず「神のお恵みあれ」なんて思ってしまう。計画性のあるキッチンとしている家。

### B、長く長く待たすタイプ

ピンポーン、ピンポーン。

「新聞の集金に伺いました」

「ハイ、ちよっとお待ち下さい」といったつきり、音沙汰なし。ドアをあけてみるが鍵がかかっている。何やってんだ？

お財布探してんのか？ トイレに入ってるのか？ お風呂かな？ 電話してるのかな？ 足が悪いのかな？ 誰かといチャイチャしている最中だったのか？……等々あらぬ想像をしながら、

ら、ちぎった領収書で顔をピラピラあおぎつつ待つ。

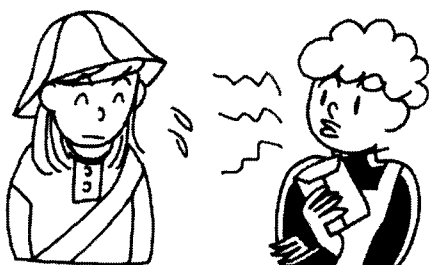
出てきた奥さんからふくやかな香が立ち、しっとり温かい湯気の出るような手のひらからお金をさし出されたりすると、しわくちなオババでもなにやらうれしくなってしまう（しかし、トイレの臭いときは興ざめ！ おつと失礼）。

### C、終始黙っていて、 すぐに鍵をかける人

「はい、308の鈴木さんですよ、朝夕刊だから三千九百二十五円でございます。……一万円だから六千七十五円のおつりですね、……お確かめ下さい。……大丈夫ですね、……ハイ、これパンフレットと袋です。よろしくどうぞ」。ガチャリ！

まだ私の話が終わらないくらいなのに戸をすぐしめて、鍵をかける音が大きく鳴る。集金人には金を出すのはおろか、声までも出したいくないのであろうか。しめ出されたあと、フーッとた

め息をつきながら、私は額のあぶら汗をぬぐう。



## D、ひざまづいて応対して下さる方

特にお年寄りに多い。四、五十代でもこんな人はいない。これはその実、上品というよりひざが痛くて立ってられないのかもしれないが、しかし私はいたく感激する。新聞集金人のようなあんまり身分が高くない人に対して

も、自分の身を低くして丁寧に應對してくれるのである。お人柄がしのばれる。顔つきもよい。きれいに整頓された家。

## E、気に入らないとすぐ怒り、社長にTELするタイプ

「ナニ？ 集金人変わったの？ 前の兄ちゃんのほうがよかったな。変わったんなら変わったって言わなくちゃダメじゃないの。あんたがって言ってんじゃないの、社長だよ、社長」  
「でも三百軒全部に電話入れるんですか？ それはちょっと難しいですね……」

「あ、そんなこと言うなら、もう取ってあげない！」六十代くらいのおばちゃんである。

そのほか、夜八時前に伺った家で「こんな時間に来るとはなにごとだ！失礼とは思わんのかね」と怒鳴られた。私も黙っていいばいものを「ハ、失礼とは思いませんが」とやり返してしまった。あとは「声が大きい！ 赤ん

坊が起きてしまう」とか「家の中をのぞきこんだ」とか、「指定の期日前に来た」とか、その場で私に文句を言うだけでは腹が収まらなかったのだから、こんなことで!?!と思われることも、すぐ社に怒りの電話を入れる。

## F、いつもいつもいない家

午前中行っても、昼ごろや夕方、夜十時すぎに行っても、いつも留守という家がある。七、八回行ってもいない。それでも配達される新聞はなくなっているのだから、いることはいるのだろう。こういうのがモーレッツ社員というのかな。身体をこわさないでね。

朝の六、七時ごろに行けば会えるかもしれないが、寝かしておいてあげた気もする。集金人泣かせの家。学生にも多いし、男女を問わない。こういう家は自動振込をお勧めする。

## G、花々が心をなごませてくれる家

アパートのうす暗い砂ぼこりの階段を上り、探しあてた家の門扉に、一鉢

花がかけてあつたりすると、ホウと身が軽くなる。どんな人が出てくるのかな。「私の家も花を飾ろう」と思つたりする。サギ草を子どものように育てている長屋のおじいさん、自分にはなく、通行人によく見えるように鉢を置き、花代に月一万円以上かけているというおばちゃん。

日本人は本来自然が好きなのだ。ちよつとの隅にでも花を並べる。貧富に変わりはない。愛すべき心豊かな人々よ。ささやかであつても、これが本当の幸せかもしれない。

そのほか、この際持つている小銭をあるだけ出してしまおうとする人、「暑いでしょ」とジューズを恵んでくれる人、話し相手が欲しかったのか、私をつかまえて長々と話をする人、ひたすら居留守をつかう人。いろいろな人たちに接することができて、新聞集金の仕事はとても面白い。

さてさて、皆さんは、どのタイプ？  
願わくは、いつも家にいて、お金をさ

つさと出してくれるAタイプであつてくれとは思ふものの、そうはいきませんよね。かく言う私も実はほとんど家にいないFタイプなんです。エヘヘ。こういうお宅は、販売店に自分で持っていくという手もありますよ。

ちなみに集金の四パーセントが自分の収入になる。要領がつかめると、四、五日で四万円くらい稼げる。しかしFタイプが多いと全然割りが合わない。

## 低アルコール飲料

山形県山形市 加藤智恵子

低アルコール飲料を子どもや高齢者が飲み点滴を受けたなど苦情があると新聞で知った。

わが家の事件もそうだった。四歳の孫が泊まりにきた夜、缶を与えた。「味が変だけど冷たくておいしい」と

いう。残りは私も飲んだ。「変だ！」表示を見たらアルコール入りだ。人の子を預かり心配が猛烈に襲い、とうとう消防署へ連絡した。「どうしたらいいでしょう」大人げない質問をする。ゆつくり話を聞いてくれて夜間診療の電話を教えてくれた。

過ぎてしまえば大した事件ではない。だが孫はふざけ気分かデタラメ踊りをしはじめたから、頭にきたかと仰天してしまったのだった。

缶の表示が悪い……と一人息巻いた長い夜だった。



(え・イシノフミ)

# FREE TALK

## フリートーク

### 計報

東京都武蔵村山市 大沢陽子（62歳）

十二月八日、夫は垣根の剪定を始めた。うちの生け垣は前面にどうだんつとじとつげが交互に植えてあって、側面とうしろはひいらぎ南天が植えてある。夫は高さをそろえて上手に刈っていく。私も庭に出て、枯れ葉や夫が切った枝を掃き集めたりしていた。

郵便屋さんがきた。郵便受けにK先生の奥さんからの年賀欠札のハガキが入っていた。先生は三月に亡くなったそう。たしか六十六歳。

早すぎる。これから奥さんと旅行を楽しむと言っていたのに。今年の年賀状にはチチカカ湖のスケッチがあった。昨年の中にはモンゴルの草原にパオのある風景が描いてあった。先生は幸せなのだ。奥さまの絵がお好きなのだ、と思った。昨年のには「樹木医の資格

などを貰いました」とも書いてあった。かっぱくがよくて声も力強い先生は「豪放磊落に見えるけど、繊細で純粹で誠実」と、いつだったか夫が言っていた。それに、努力する人だったと思う。六十を過ぎて樹木医の資格を取るなんて、素敵なことだ。

三十八歳からの七年間、夫は瑞穂の小学校に勤めていた。そのときよくマージャンをした。K先生はその仲間だった。場所はいつもわが家の四帖半。

先生はマージャンも、碁も上手だった。東北大で囲碁クラブのキャプテンだったそうで、学生のときから鍛えている人は違うのだ。そのころ夫はまだ碁をあまり打っていなかった。

立川の大山小に移ってから夫は碁に打ち込むようになった。テレビの日曜の囲碁の時間はかならず見て、日本棋院の通信教育も受けて、大山小の仲間とそれはよく碁を打った。夏休みなど碁に没頭して朝から晩まで四帖半にこもっていたときもあった。

退職した今も、ウィークデ이의午後

は福祉会館で暮を打っている。暮は随分上達した。今なら先生と十分に闘える。それでときどき先生を思い出していた。でも暮を打ちましようとは言わないうちに今日になってしまった。

瑞穂の小学校にいたとき、先生の家の近くを通ったことがあって、先生は夫たち二、三の人を連れて家に寄り、奥にむかつて声をかけた。奥さんは出てこなかった。どういいうわけで先生のお宅に立ち寄ったのか、そのあとどこへ行ったのかは忘れてしまった。ただ、声をかけても出てきてもらえない先生をひどく気の毒に思ったことだけ、今も鮮明に覚えているようだ。「バツが悪かったと思う。かわいそうだ」と夫は言っていた。その方とはずつと後になつて離婚が成立し、数年前に今の奥さまと結婚できて、あちこち旅するようになった。これから、いい旅、いい人生が続くはずだった。突然亡くなつてしまつてほんとうに残念だ。

先生は糖尿病で、急に血糖値がさがつて亡くなつてしまつたそうだ。すぐ

にアメでも食べればよかったらしいけど、それが間に合わなかった。ほんの



二、三十分前に電話で話したときは元気だったのにと奥さまは言っていた。それまで元気で突然亡くなる人もい

る。

「脳が萎縮して物を食べるのどの機能が壊れたから、食べられるようになることはない。目醒めることもない」と医師に言われながら、眠り続けている人もいる。経管栄養とおむつの世話はもちろん、一時間おき（夜は三時間おき）にたんをとらなくてはならないそうだ。そういう世話が続けていたら介護する人の体が壊れる。本人としてもこういう状態で生き続けるのは不本意だと思う。こうなつてしまつてからは自分ではなんにもできない。元気なうちに情報を集めて、体験入居も経験して、行く施設を決めておこう。こうなつたらここへ入れてと家族に言っておこう。家族に苦労はかけたくない。突然死なれると、残つた者は心残りでもう少し、せめて二、三か月は看病させてもらいたかつたと思う。でも本人は誰にも迷惑かけないで死ぬことができて、本望かもしれない。私もこんなふうにはポツクリ死にたい。ただしあと二十年以上たつてから。

# 主婦の習い事

埼玉県新座市 田口香織（36歳）

半年前から習い事をしているが、私はずっとお教室をやめようかどうしようかと悩んでいる。先生は快活な方で、とてもお上手だ。

でも、話しだすと止まらないのだ。私は早く続きを教えてもらいたいのだが、どうにも口をはさめない。ボーッとする時間が多くなる。私は月謝を払っているのに、何だか変だ。

私は、習い始めてすぐのとき、友だちに、「主婦のお教室ってこういうものなの？」と聞いてみた。

どうやら、そういうものらしい。おしゃべりしないなんて考えられない、と言う。

しゃべってもいいのだ。次々と教え

てくれれば。

先生は、優しく言って下さる。

「家では、やらなくていいのよ」

自分が習っていたとき、宿題が多くて大変だったという経験からのようだ。でも、家で練習したほうが上達するのではないだろうか。早く作りたくて、家でやりたいときもある。

以前、道具を忘れてしまったとき、

「いいわよ、どうせ家ではやらないでしょ」

と言われ、「はあ」なんて、間の抜けた返事をしてしまったが、内心カチンときた。

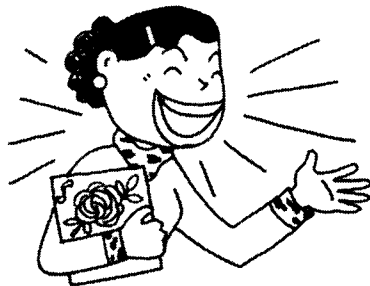
やる、やらないは、こちらの勝手ではないか。意地悪い見方をすれば、生徒を上達させたくないのかしら、ということになる。

母に、このことを話したら、今すぐやめるように言われた。

それでも習い事を続けているのは、先生に技術があるからだ。

私は、ツールペインティングというものを習っている。白木やブリキなど

の日用品に、アクリル絵の具で絵を描いていくのだが、これがなかなか面倒くさい作業だ。まず、素材にやすりがけをして、下地を塗り、またやすりかける。図案をトレーシングペーパー



に写してから、素材に転写する。色も一度ではきれいに塗れない。乾かしから、また塗る。

三度塗り、四度塗りしていくのだ。図案のベースの色の上に、シェードとハイライトの色をのせ、立体感を出す。



やっと仕上げに入るが、こども、丁寧  
にやる。

先生は美大を出ている。アメリカ滞  
在中に「主婦に教えようと思って」習  
ったそうだ。

ツールペイントの作品が素敵だなと  
思い習ったのではないのか、と思い、  
そのことを聞いたときもガクツとき  
た。でも、このように面倒くさいこと  
やはり、好きでなければ続けることは  
難しいはずだ。先生の作品は美しい。

よく、習い事をしていけると、それだ  
けで、すごいねと言われる。習ってい  
るだけで、何がすごいのだろう。たい  
して上手でもないのに、上手と誉めら  
れる。私も、知り合いの家で手作りの  
作品が飾ってあったら、そこそこであ  
っても、上手ねと言ってしまうけれど。  
私は、そういう「主婦のお上手」で  
は終わりがたくない。材料代だって高い。  
本物の上手になりたい。

お教室で、たくさん作業が進んだと  
きには、すごく嬉しい。でも、心のど  
こかで、次はお話ばっかりの日かなと

心配し、ストレスになる。こうして文  
章にして、自分の気持ちを整理しよう  
と思ったが、スパッとやめることを決  
められないでいる。それというの、  
このところ、まじめに教えてくれる  
からだ。今作っているものが仕上がっ  
たらやめようと思っていたら、すっか  
りなじんで居心地がよくなってきてし  
まった。

人生とは、そんなものか。  
でも、心のどこかにある不信任はぬ  
ぐいきれない。簡単には割りきれない  
ものだ。

結局のところ、上達するかどうかは、  
本人の努力とセンスであって、先生が  
上手だからではないはずだ。一つ一つ  
を丁寧に描いていくこと、自分の理想  
に近づけるように仕上げていく、とい  
うことを教えていただいた。上手な作  
品に触れて、少しは目も肥えた。感謝  
しなくてはいいけない。

それにしても私は、何と理由をつけ  
てやめたらいいかと、また悩んでしま  
っている。

世の中には、もつと大変なことで悩  
んでいる人が大勢いるというのに。な  
さけない。こんなことでいいのだろう  
か。

## 記帳時の出来事

東京都新宿区 林 直美

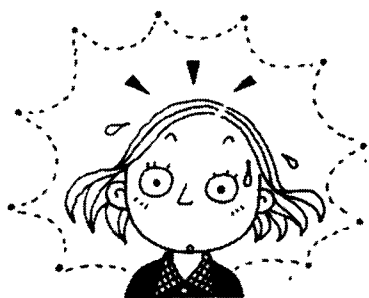
新宮さまの御誕生の記帳に、上京し  
ていた母と小学三年の息子と、三人で  
皇居へ出かけました。予想通り、大勢  
の人で長蛇の列ができ、長い時間待っ  
ことになりました。警備の人の誘導で、  
止められていた列の先頭から、一斉に  
進み出したときのことです。息子が前  
にいた母の横へ並ぼうと、すっと一歩  
前へ出ました。そのとき、息子の隣の  
人の、さらに向こうにいた七十歳前後  
の小柄な男性が、持っていたカメラの  
角で、いきなり息子の頭を叩いたのだ  
です。とても大きな音がして、息子は声  
も出せず、両手で頭を抱えこんでしま

いました。私が振り返ると、その男性が「走るな」と怒鳴りました。

息子は決して走ってはいません（走っていたら叩かれはしない）。周囲の人もびっくりして、息子を心配してくれました。私は「カメラで叩くなんてどういうことですか」と怒鳴り返ししましたが、声がうわずっていて、それ以上言葉が出ませんでした。その男性も周囲の視線を感じてか「ちゃんとしろよ」と言っただけ、何も言わずそくさと前へ進み、人の列の中へ消えていきました。まるで、待たされるイライラを、たまたま近くに来た子ども（弱者）である息子に、暴力で八つ当たりしたような態度でした。いい年をした大人が、言葉もなく突然に、しかもカメラの角で子どもの頭を叩くなど、信じられない行為です。

幸い大事には至りませんでした。もしあのカメラが目当たっていたらと思うと、ぞっとします。それこそ息子に何かあれば、私も追いかけて捕まえて、それなりに行動したと思います

が、その瞬間の私は、軽いパニック状態だったと思います。息子の無事を確認するとすぐに、後悔でいっぱいになりました。もっと大きな声で叫んで非難してやればよかったとか、警備の警



察官に突き出してやればよかったとか、列に並びながらそんなことばかり考えて、記帳どころではなくなっていました。

たとえば、その場では何もなくても、帰宅後、頭に異変が起きればはつきり言って泣き寝入りの状態です。名刺でももらうべきだったとか、瞬時の判断ができなかったことが悔やまれてなりません。あの男性には息子が走ったように見えたのかもしれませんが。ならば先に怒鳴ってくればよいのです。それをいきなりカメラの角で頭を叩くなどという行為を、簡単に許してしまった、その場でどうすることもできなかった自分が、腹立たしいやら、情けなくたまらなくなりました。

こういった突然の出来事は、一瞬の判断が大きく影響するのではないかと感じます。すぐに感情的になる自分では、いざというときに何も言えず何もできず、子どもを守れないのではないかと不安でなりません。後からいくら考えても無意味で、その場で冷静な判断ができない限り、どうにもなりません。親として子どもをしっかり守ることができるだろうか、自分の無力さに大きな不安を感じるようになってし

まいりました。

列に並んでいた間、叩かれた息子よりも、私のほうがすっかり神経過敏になってしまい、周囲の誰の顔を見ても信じられず、怖い印象さえ持ちました。誰もが黙って我慢して並んでいる中で、あの男性のような大人の存在は、子どもを人間不信に陥らせるばかりだと思います。

敬宮愛子さまの記帳の記憶が、苦い思いとあの憎らしい男性の顔になってしまいました。おめでたいはずなのに、残念ではありません。

## 靴選びに 苦勞した！

福島県安達郡 桜井淳子

わいふ二九二号に「靴選びに苦勞した！」という座談会の出席者募集が載っていた。私のために企画して下さったのかと編集者に感謝した。それと、

十一月中旬に、数日間上京する予定があった。

早速申し込んだ。しかし、待てど暮らせど通知が来ない。

こちらも都合があるので、電話をすると、スタッフの野村さんが応対に出て、応募者は私一人だという。独演会ならいざ知らず、司会者と私との二人では座談会の形をなさない。

「わいふの皆様は靴に苦勞をしたことがない幸福な方ばかり！」

野村さんと笑った。

結局、座談会は流れた。

来年、古稀を迎える私は背は一メートル五十センチ、体重は四十二キロ、この体型は娘時代から多少の増減はあるが変わらない。

小学校入学のとき、私の靴は七文だった。幼稚園児の履く靴のサイズだった。

娘盛りのころ、ハイヒールを探すのに一苦勞した。ロウヒールの靴は二十一半、サンダルは二十一。当時、Sサ

イズというコーナーはなかった。並サイズの靴から小さめのを選んだ。つま先のとがった、かかとの細い高いハイ



ヒール全盛時代だった。服はウエストを絞ったサーキュラスカートが流行り、ペチコートを身につけた。見た目は格好よかった。私も細みの身体に流行の服を着た。

既製服の合わない私のために洋裁を

していた姉がびったりの服を作ってくれた。共布で帽子まで作った。靴だけは作れなかった。

友人たちが普通サイズの靴を何足も買うのに私は希少で高価な一足しか買えなかった。その一足を大切に履いた。足のサイズも小さいが甲も低いので、びったしの靴にめぐり合えると、値段を考慮しないで求めた。

外国に滞在したり、旅行した友人たちは、ドイツではレントゲンをかけてびったしの靴を作ってくれる。イタリアでは、木製の足型を作りその人だけの靴を作成する、などと聞かされ羨ましかった。

物資が豊富になり、靴もSサイズ、Lサイズが出回り、選ぶのに苦労は少なくなつた。しかし、服なら、多少のゆるみやきつさも我慢できるが靴だけは我慢できない。窮屈な靴やゆるめの靴で歩けば、豆ができ、足の皮がむける、格好よい靴ほどそれは激しい。

パーティーでにやかな顔をしながらも、足の痛さを我慢しているのはつら

い。

高齢になり、衣服にはあまり気を使わなくなつた。

海外旅行で長時間にわたり、機上の人となり、観光地を歩いて帰国すると、スニーカーでも運動靴でも足の指の親指や中指の爪が黒く死んでいった。その黒い爪が消えるのに半年はかかった。

私は考えた。どうしたら足の爪を黒くしないですむかと。私のサイズは子供靴売り場でなければならない。やっと、つま先の開いた足の甲の高さを調節できるウォーキングシューズを見つけた。今度こそ、爪を黒くしないで海外旅行ができると張り切っていたが、ニューヨークのテロ事件で企画したスペイン旅行は中止になった。

アメリカ旅行は個人で行つたので、買い物にも時間がかけられた。友人と一緒に靴屋に行き、サンダルを選んだ。キッズ（子供）サイズのS、M、L、のSが私の足にびつたりだった。しつかりした作りだった。

帰国し、素足に履いたとき、これぞ

私のサンダルと嬉しかった。だが、よく見たら、それは中国製だった。アメリカで中国製の靴を買い、日本で愛用している。昨年の夏も、今年の夏も、来年の夏も愛用するだろう。

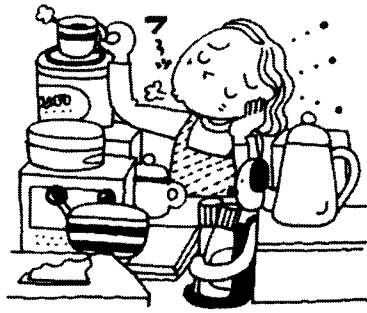
私の靴選びの苦労は幼いときから、そして、これからも続くことだろう。

## コツが分からない

東京都練馬区 匿名（40歳）

最近、子育て仲間がほしいと思う。お互いの悩みを聞いたり話したり、また、子連れで遊びに出かけたり、たまにお互いの家でお茶を飲んだり……イイナアと思うつつ口べたな私にとつてなかなか難しい。四月に上の子が入った幼稚園でも、下の子を連れて行く数か所の児童館や公園でも……友だち作りのコツが分からない、なかなか話はずまないのだ。幼稚園ママたちは、

送り迎えのときに話がはずみ、お互いの家へも行き来しているようす。それを背中で感じつつ子どもを連れて足早に帰宅している。たまに「今度、遊び



に来て」と言ったり、言われたりもするが、なかなか今度はやって来ない。私から「何日に一緒に遊ばない？」と聞けばよいのかと思いつつ、もう数か月たってしまった。下の子と行く遊び場所でも同じ状態。大人とゆっくり話

したいと思うが、頭の中で考えるだけで実現できない。

私がイイカッコしい(?)なのが、いけないのかもしれない。だれかに「来て」と声をかけるからには、家の中がキレイになつていないと声をかけられないのだ(あたりまえ?)。とはいえ、私は整理整頓が大の苦手なので、いつもテーブルやイスにはたくさん荷物が置いてあって、それらを積み上げないと食事や作業にも支障をきたすのだ。主人からは「出したら、すぐに片付ければいいんだ」「こう散らかっている」と家に帰っても落ちつかないヨ」などと言われるのだが、上手いこない。私一人の片付けもできないところ、二人の子どもも片付け下手の親からしつけられているため、私と同じ片付け下手で、お手上げなのだ。

片付けのコツも分からず、友だちづくりのコツもつかめず、子どもにカミナリを落とす毎日……。

同じくらい、片付けべたで、気の合う友だちができたらハッピー? それ

とも片付け上手になつていつでもわが家に遊びに来て、と声をかけられるようになったら……? □べたを直したら……?

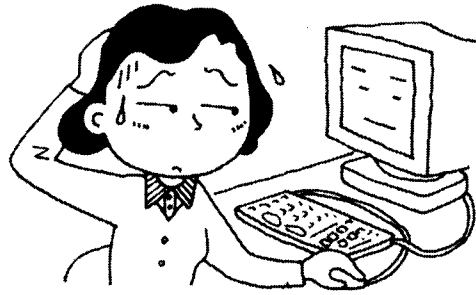
まだまだ悩みはつきそうにありません。

## パソコンは どうも苦手

東京都足立区 永田道子

今から二年ぐらい前、ある場所で「パソコン教室を無料で開催」とのことで申し込み、初めて参加した。生徒は十数名、指導員は五名いて親切に教えて下さったのだが……。

文字はローマ字、それも「あいいうえお」順に並んでいれば自然に手が動くのに順不同。それに「がぎぐげご」や「ぎやぎゆぎよ」などもありマウスを操る手は牛の歩みよりおそい。その日は自分のホームページを作るというこ



とで写真を撮って下さり、「住所・氏名・趣味を入れなさい」と言う。

二時間経過しても終わらず私は諦め「もういいです」と言うと、指導員の方が「チョンチョン」と打って下さり、あつという間にできあがり、フロッピーをもらい帰宅した。

その後「旅行をしたいとき」にホテ

ルのパンフレットを取り寄せなくても、「目的地・何人で・希望する一泊料金」などを入力すれば、情報をインターネットで知ることができる。その他「家計簿」「大勢の人に配る絵や写真入りの案内状」などなどのパソコン講習会が三か月おきぐらいに行なわれた。

私は数回講習を受けても覚えが悪く、目が痛く、肩が凝るだけ。もうパソコンは止めようと思ったのだが……。

先日、区役所からきたアンケートに「あなたは『電子自治体』についてどんなイメージを持っていますか」との設問があった。

私は全く分からないので友だちや家族に聞いた。その後もそのことについて関心を持っていたら新聞やテレビでも論じられていた。

それで勉強にもなるので自分なりに概略をまとめてみた。

すると「電子自治体」とは「電子政

府」とも言い、中央政府や地方自治体と企業、家庭をインターネットで結び、二十四時間いつでも行政サービスを受けることができるようにするシステムとのこと。

具体的には全国どこからでも、曜日に関係なく住民票や婚姻届など、会社を休まず手に入れることができる。

その他、物品の入札、税金や社会保険料も納められ、いずれはコンピュータの端末を使って「電子投票」も可能になる。

そのような時代が来ることを見越してか、最近、どの自治体もパソコン教室に力を入れているようだ。

では「パソコンがないと『電子自治体』の恩恵は受けられないのか」というと、コンビニや公共施設でもOKとのことである。

「こりゃー大変だ。パソコンを使えないと時代おくれになってしまう」と私は考えを変え十二月の年賀状作りのパソコン教室に申し込みをした。当日、

## 日ごろ思つて うるいふ

千葉市稲毛区 ももか (33歳)

前回から日が経っていたので、字の配置や基礎となる決まりをすっかり忘れ白紙状態。先生が大きなスクリーンを使って説明して下さるのについていけず、指導の方をたびたび呼ばねばならなかった。

二時間あまり、パソコンと格闘？して年賀状ができあがりフロッピーを差し込んだが機械が故障で作れず、骨折り損の草臥れ儲け。今回「パソコンをもう一度」と張り切ったのにとっても残念。

皆がステキ(！)な年賀状ができて喜んでいの中で、私だけ運悪く印刷できなかったのと、ひどい疲れで「やっぱり向いてないのかな！」と意気消沈。でも、その後パソコンに詳しい人から聞いた話によると「現在、まだ操作は難しいが将来は子どもや年配の方でも簡単に使えるようになるのでは」と今後の予想。

全く上達しない私にとってそんな世の中が早く来ることを切に切に願っている。

私は、ごく当たり前に、ごく普通に、ごく平凡に生きていきたい。何もないう人生って素晴らしいと思う。

私は才能もないし、頭もよくないし、器量もよくない。なにしろ自分に自信がないのだ。ただあるのは、数多き悩み。

悩みだけは、人並以上にあると思う。日常生活も毎日が、戦いだ。やつと今日も終わると思つて床についても、眠れない。朝は、早くから目が覚めてしまつて、何をするでもなくボーッとすごしている。昼間は、作業所に通っている。でも、休みがちだ。

それでも、私は私。私以外の何者にもなれない。私は、カメになったと言われる。少しずつしか歩めない。たとえ少しずつの歩みでもいつか必ずゴール

ルにたどりつけると信じている。

この間、私は自殺未遂をした。眠剤を五十じよう飲んだ。だが、死ねなかった。遺書も書いた。

「さようなら

こんど うまれてくる時は

もう 病気になるたくない」  
ここまで、書いてきて、告白するが、私は精神分裂病だ。もう十三年目になる。

ごく普通の暮らしが、できないのだ。心の中にくすぶっている何かがあって、それがいつもブツブツ文句を言っている。

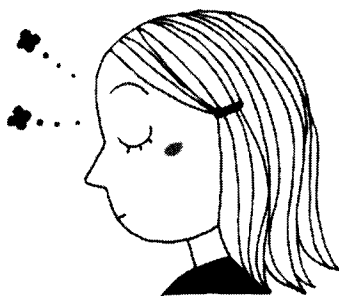
そんな私にも夢がある。詩人になりたいのだ。コミュニケーションをとるのが誰よりもへたくそで、言葉に出して表現するのが、難しい。だから思いを詩につづっている。私は病気をすることで、詩が書けなかった。

今、グループホームに入っている。グループホームは、同じ障害を持つ人同士で、ふつうのアパートの一面を借りて生活する場だ。

「べてるの家」ほど有名ではないが、障害者が、肩を寄せあつて暮らしている点は同じだ。

健常者と障害者のちがいを思う。

障害を持つとどうしても、つきあいの範囲がせまくなる。もつと健常者の



人と病気ぬきのつきあいがしたい。

精神障害と聞くと怖いイメージがつきまとう。だが、実際は優しい人が多い。優しすぎる人が、多い。

私が、今でも持つてゐる新聞の切り抜

きに、「この子は、普通にみえるでしょ？ でも、病気なんです」と、いうのがある。病気だと決めるのは誰だろうか。そのひとことで、その人の可能性をつぶしているように感じるのは、私だけだろうか？ 確かに病気だったかもしれない。でも今は、前とはちがうかもしれないのに……。

私の心に思つてゐること、どこか変ですか？

## ストーカー騒動

東京都 田口恵子（37歳）

マンションの郵便受けに名前を書いていないことからしばしば文句を言われることがある。しかし、不精で書いていないわけではない。自分の身を守つてゐるのだ。以前受けたストーカー行為から逃れるために。

今からちょうど二年前、無言電話が立て続けにかかってくるものがあつ

た。子どもがでると、

「おかあさんいますか？」

と言うのだが、私に変わると何もしやべらない。気持ち悪いのですぐ切つていた。

そんなことが何度も続いた約一か月後の土曜日の夕方に、電話があつた。夫と長男は外出中、次男は昼寝をしていた。電話の向こうからは、三十前後と思われる男性の声がした。

「僕はMといいます。〇〇病院であなたを見かけて好きになつてしまつたんです。初恋の人に似ていたんです。最近無言電話があつたでしょ。あれ僕なんです」

「……」

「でも、僕にも家族があるし、こんなことしてはいけません、」と思ひ、ふつくるために電話したんです。これが最後の電話です。でも、あなたつて、いつもすぐ電話を切っちゃいましたね。けつこう冷たいんですね」

この気持ち悪い電話を適当にあしらおうと思つてゐた私だが、自分本位な



このセリフは、彼が尋常な人ではないことを示しているような気がして、うまく電話を切ることができなくなりました。彼の話によると、私の自転車に書かれた住所から家を、電話帳から電話番号を突き止めたという。車で何回もわが家の周りをまわっていたとも言っていた。

怖くはあったが、このときは、彼が最後の電話にする、と言ったのを信じた。

実際、その後しばらくは何事もなかった。しかし、それから四か月後、やはり土曜日の午後にもまた、電話があった。

「やっぱりあきらめきれないんですよ。五分でもいいからしゃべってください」

「約束が違うじゃないですか」

私は、気持ち悪さでいっぱいになって言った。すると彼も脅したりすかしたりしてくる。そして、

「あなたっていつも八時に出勤してるんですね。いつも見てますよ」

と言われたとき、気持ち悪さは恐怖に変わった。この四か月もずっと近くでいつも見張られていたんだ。思わず電話を切ってしまった。するとすぐにまた電話がある。何度切ってもかかってくる。

「警察に言いますよ」

と言っても、

「そんなことしたら、一生電話しつづけてやる」

とくる。最後は電話線を外した。

今思えばたったこれだけのことしかされていないのだが、そのころ桶川の女子大生がストーカーに殺されたような事件もあり、私は、こわくてたまらなかった。また、長男がちょうど小学校に上がる時だったことが私の心配を大きくした。これまでは保育園の中で生活していたので、必ず大人の目の届くところにいた。ところが、小学生になるとそうはいかない。Mが、過激になって、攻撃の手が子どもにむけられたらどうしよう、と不安でたまらなくなった。救いは、近所ではあるが、

一か月後に引越しをすることだった。

「多少傲慢なところもあるけれど、私は、まじめに生きている。あんな変態に私たちの人生を壊されてたまるか」

と強く思った。その思いは行動に表れた。まず、勤め先に監視庁のOBがいたので相談した。すると、わが家の管轄の警察署の警務官を紹介してくれた。くしくも、長男の小学校の入学式の日、私は、事件の概略のメモを持って、警務官に会うこととなった。

警務官は、現場の刑事を連れていた。メモを読むと、彼は、

「わかりました。交番にもパトローलを増やすように言っておきましょう。何かあったらすぐ一〇番してください。それから、あなたも嫌でしゅうけれど、今度電話があったらなるべくたくさんしゃべって、相手の声を録音してください」

と言ってくれた。一方、刑事は全然興味を示さない。

「こういう輩は、臆病だからあなたの前に現れたり、暴力をふるったりしませんよ」

経験上彼の言う通りなのかもしれないが、こんな警察の態度がいろいろな事件を引き起こしているのではないかと、とむっとした。

小学校や学童クラブ、保育園にも、念のため事情を話した。夫が私以外の人には、絶対子どもを引き渡さないようにお願いした。近所の友人にも、私の仕事からの帰りが、長男の学童クラブからの帰宅より遅いときは、預かってもらうようにした。引越しのとき、粗大ゴミを出すときも同じマンションの人の名前を借りた。防犯ベルを買い、長男と私が持つことにした。私は催眠スプレーもブラスした。

警察に行った数日後、ピンポイントマンションの一階からベルがなった。インターフォンの受話器を取ると、

「僕です」

とあの男、Mの声がするではないか。私は、急いで警務官に連絡をした。彼

は巡査を急行させてくれた。たまたまその後すぐ、夫が帰ってきたこともあり、結局Mは現れなかった。巡査たちは、家の近くの聞き込みや不審車の尋問などをしてくれたが、Mらしき人物はいなかった。

翌日の朝には、巡査が家の前をパトロールしてくれていたし、帰りには、警務官自らマンションの前まで来てく

れた。そんなおかげか、引越しまでMからの電話も登場もなかった。ただ、とにかく緊張し、ストレスから体調を崩し、最悪の日々だった。

引越後は、郵便受けに名前も書いていないし、自転車の名前も消した。電話帳にも電話番号は登録していない。

後日、警務官に、引越しの報告と



お礼の電話をした。すると、彼はこう言った。

「たぶんもう大丈夫でしょうけれど、万が一何かあったら電話してくださいね。ここだけの話ですが、あなたが見かけられた病院の職員にMという男がいましたよ。でも、年齢があなたの印象よりちょっと高いようだし、その人が犯人かはわかりません」

その病院は子どもの軽い喘息のかかりつけだったが、行くのをやめた。

あれ以後、Mは現れていない。しかし、今でも防犯ベルと催眠スプレーは持ち歩いているし、おかしな間違い電話がかかってくると不安になる。私が受けたのは、ストーリーカー行為としてはかなり軽いほうなのかもしれないけれど、それでも後遺症を残している。ストーリーカーに関しては、さまざまな法や条例ができた。しかし、罰則だけでは、ストーリーカーは根絶できない。こんなおかしい人たちが産む社会、教育、家庭全部に治すべきところがあるのだと思う。

## 雨の日は……

愛知県豊明市 村田由香里

結婚する前は、雨の日に特別な感情を持たなかった。

子どもができて、育児と家事で忙しい身となつてからは雨が降ると何ともいえない安堵感を持つようになった。

雨が降ると、「ああ、どうせ雨だから」を言い訳にいろいろなことがあきらめられる。洗濯は少ししかなくていいし、ふとも干さなくていい。子どもも外へ遊びに連れて行かなくていい。

天気がよいとそうはいかない。ふと干さなきや、公園行かなきやと呪縛のように思われてくる。

子どもが三歳ぐらまでの間は、毎日ほとんど仕事のようにして、団地内の公園へ遊びに連れて行つた。自分の体調で、おつくうなときもある。雨だと公園に行かなくてもいいと思うと、

妙にうれしくてホツとした。

最低限の量の洗濯をして、のんびりと家事をする。子どもも外へ行けないから、ビデオでも見ようかということ



になり、家の中でおとなしく遊ぶ。

いつもはうるさい、すぐ前の工場もフォークリフトが休止してとても静かだ。

雨はしとしとと周りの音を吸収して降り続ける。

静かな昼下がり、ビデオを見ているうち、子どもはいつしか早めのお昼寝となる。

そうなたら、しめたもの。私だけの自由な時間が訪れる。友人へ手紙を書く、読みかけの本を読む、散らかった衣服の整理をする。疲れれば、かわい寝顔の横で一緒に寝てしまう。雨の日は静かなせいか、子どももよく寝た。気がつけば、三時間も経っていてビックリなんてこともよくあった。

夫に頼まれた用事も買い物も、雨の中子連れで行くのは大変だからと、翌日へ日延べする。

「ごめんねえ、雨で買い物に行けなかったのよ」

いかにもすまなそうに言い訳をして、夕食のおかずはありあわせの手抜き料理。

雨は育児で疲れた身を癒してくれる気がした。

結婚して十三年。子どもは、いまや

中学生と小学生に成長した。もう団地内の公園へ連れて行くこともない。

今年の春、義母が亡くなった。子どもの世話が増えた。洗濯、掃除、仏壇のお手入れ、天気がよければ、シーツをあらう、ふとんを干す。

そんな私にとって雨の日は、今でも少し気の抜ける、ホッとする日のままである。

## いちわり 割

栃木県宇都宮市 真野由美子

その月、わが家は貧乏だった。

実家の改築（来年から同居するため）に思いのほかお金がかかったせいだ。

詳しく書くと長くなるので省くが、子ども貯金も保険も解約してしまい、給与振り込みの口座は、かつてないような寂しい状況だった。定期預金ももうないので、足りなくなってもマイナス

すらつかない。

それでもこれ以上の借金だけはすまいと夫婦で誓い合い、給料日までの日々をやりくりしてせつせと暮らしていた。

ハッと気づいた。そうだ、来週は中学時代の同級生の結婚式であった。しっかり給料日前である。困った。

祝儀の相場は今や三万。二万でも許されるかなあ。久しぶりに集まる仲間たちとの二次会にもできれば出たい。美容院に行くのは諦めるにしても、交通費も要るではないか。どうしたものか。

口座の残高はと見ると、五万と少しある。給料日まで、あと二週間。何とかなるか……いやだめだ、まだ生協と県民共済の引き落としがされてないではないか。

そのとき悪魔が囁いた。今おろしてしまえば、生協にも県民共済にも取られなくてすむわけだ。引き落としされなくなつて、逃げちゃうわけじゃなし、来月分と一緒に払えばいいよね……と

いうわけで、私はその場で五万円の払い戻しをした。

いつもより貧乏な私が、いつも絶対持っていないほどの大金をお財布に入れていた。事件が起こったのはそんな日だった。

幼稚園から子どもを引き揚げて戻り、一息ついた後、私は洗濯物を入れて置んだ。そこへ近くに住む友人親子が遊びにきた。子どもたちは子ども同士テレビゲームに興じ、友人と私はコーヒーを煎れ、お喋りに花を咲かせていた。

その時電話は鳴ったのだった。

「〇〇警察です」

と名乗られ、私は腰が抜けそうになった。てっきり、夫の身に何か起こったと思ったのだ。しかし、そうではなかった。相手は私の名を言い、

「免許証やカード、現金の入った財布が、拾得物として届いています」と言うではないか。

財布？ 何かの間違いでは？

ガクガクする手で、椅子にかけてあるコートのポケットを探る。ない！ そばにあった小さなトートバッグをひっくり返す。ない、ない！ 一体いつ、どこで落としたのだろうか？ それとも盗られたとか？

「お金、中身は入ってますか？ 五万三千円くらい入ってたんですよ」

ほとんど絶叫である。私のただならぬように、友人が啞然としている。

「えーと、現金はそのくらい入ってます」

ちよつと落ち着く。いや、まてよ！

「カードは？ 〇ゾンカードはありますか?！」

ほとんど使うことのないクレジットカードだが、インターネットのプロバイダ契約に必要で作ってしまったのだ。ああ、作るんじゃないかった、使われてたらどうしよう。

「入ってます」

銀行のカードも郵便局のカードも暗証番号に守られている（誕生日や電話番号にしてはいけないというのはこう

いう場合を想定してなのだ実感）として、そうだ、免許証は？

「免許証も入ってます」

「でも、でももしかして悪用された後かもしれないよねえ」

「とにかく、引き取りにいらしてください。確認してお渡しします」

電話を切ると、頼れる友人はおおよその状況を察したようす。

「送ってあげたほうがいい？ でも子どもたちは置いてけないし、私はここに残ってみてたほうがいいよね？」と、ときばきとカップを片付け始めた。私はまだパニック状態だ。

「すでにサラ金で大金が借りられているかもしれない。どうしたらいいの？」  
「とにかく、行かなくちゃ。ハンコ持って、保険証とかは要らないの？ そうだ、捕まったらアナタ今度は無免許運転だからね、落ち着いてよ！ 安全運転だよ」

もしカードが悪用された場合って、誰か助けてくれるんだろうか？ 戸籍

を悪用されてたら？ どうしよう、悪い想像ばかりがグルグルと頭を駆け巡る。夫に何て言おう？

どこかで聞いた台詞を思い出した。

「坊や、泣くんじやない。男が泣いていいときはな、おっかさんが死んだときと、財布を落としたときだけだ」

してみると、今の私も泣いていいのか。いやいや、とりあえず財布は見つかったのだ。

「安全運転、安全運転」と唱えながら、私は警察にたどり着いた。拾得物の一角に駆け込む。

窓口で名乗ると、若い男性職員が、書類の挟まったバインダーと、なつかしい私の財布を持ってやってきた。

「あの、どこで見つかったんですか」

「〇〇町の踏切近くのコンビニ、ご存知ですか、その近くの駐車場とあります」

がつくりきた。それはまさにうちの目の前の駐車場のことで、駐車場のない借家に暮らすわが家も一台分、借り

ていたのだ。

幼稚園に長男を迎えに行くため、眠ってしまった次男を車まで抱いて運んだ。あのときおそらくコートのポケットから落ちたのだ、そうとしか思えない。何て馬鹿なんだろう。

書類を見ると、入っていたものが凡



帳面な文字で箇条書きになっている。

免許証、S銀行カード、T銀行カード、郵便局カード、〇ゾンカード、テレホンカード、図書カード、Yスーパーのサービスカード、生協のカード、図書館のカードは、自分の分と二人の子どもの分、そしてレシートや領収書

や割引券の類。指で押さえて確認しながら、私は恥ずかしさで顔が火照るのを感じた。あの小さな財布によくもまあこれだけ入っていたものだ。しかし、ぐちゃぐちゃな財布の中を人に見られたばかりか、こんなに整然とリストアップされるなんてことがあろうとは！

そして現金五万三千二十四円。

「全部あると思います」

書類によれば、拾得時刻は午後一時半ごろ。やはりあのときだ。私もそのころ家を出たので、財布は落として間もなく拾われたのだろう。何かを悪用できるような時間はあるまい。

「拾得者は小学一年の女の子です。学校に戻って担任の先生に届け、先生がこちらに持ってこられました」

「よかった、悪い人に拾われなくて」

安堵のあまり、涙がにじんだ。確認書類を書き、ハンコを押す。

拾ってくれた子に、お礼をしなくちや。小さい女の子だもの、何がいいかな、お菓子と図書券ってとこかな。そう、うだ、わざわざ警察まで届けてくれた

先生にも。

と、そのとき私に、さらなる書類が渡された。

そこには、今回の拾得日時、拾得者、拾得物の内容（金額も）が書かれ、財布の持ち主と判明した私の名もあつた。そうか、この子は大金を拾ったのだ。それがちゃんと処理されたという証明なのだな。

ありや、下のほうにまだ書くところがあるぞ。

「これはですね、拾得者が、ちゃんとお札をもらいました、という書面です。ね。あちらで親御さんにサインと捺印していただいて、こつちにまた提出して下さい。郵送でもいいですが」そんなところまで警察が仕切ってくれるのか。

「お札は普通、現金の一割ですね」

え？ いちわり？ そうすると……？  
「五千円くらいですか」

そのとき私は自分でもあきれるほどズケズケと言ったのだった。

「うそ？ 一年生の子にそんなにあ

げるの？ それって、キマリなの？」

恩知らずのケチ女と思ったんだろうか。私の発言を責めるように、彼の声は固くなった。

「拾得者が不服として訴えれば、二割まで請求できるんですよ」

二割って、一万円じゃないか！  
呆然とした。今の私には大金である。

「それで今度はお札のお金が惜しくて落ち込んでいるわけ？」

友人は呆れた声を出した。

「だってさ、拾ってくれたのが大人だったらなあ。警察に届ける前に免許証見てさ、ああ、このうちの人のだ、ってポストに入れてくれるとか、電話してくれるとか……、そうだよ、学校の先生だって、それくらい気を利かせてくれてもいいんじゃない？ あんな町外れの警察署に届けるより、簡単だと思うんだけどな。小学校なんてすぐそこだし」

「なんて図々しいこと言うわけ？ それでもし、中身が足りない、なんてこ

とでトラブルになることだってありえるじゃない？」

「……そうか」

「大体ねえ、大人とか、もつと悪ガキに拾われたら、現金抜かれて財布は川かなんかに捨てられちゃってたかもよ。本当にもつとひどいことになってたかもしれないじゃない。アナタは、そんな大金入れた財布を、自分のまんな前に落として、しかも落としたことにすら気づいてなかったんだからね。その子に拾ってもらって、ほんとラッキー」

「……うん」

ぐうの音も出ないほどの正論である。私は、観念した。財布から五千円札を出して、ピンクの封筒に入れる。本当はケーキでも付けたいところだけれど、それは厳しいので、ペランダの小さなヒヤシンスの鉢をあげることにした。それは薔がちよつと色づいて、香りがほころび始めている。

私は手紙を書いた。

「やまぎし みさきちゃん

どうもありがとうございました。だ  
いじなおかねをおとしてしまったの  
で、おばさんはほんとうにこまっ  
ていました。けいさつにとどいてい  
るとして、どんなにほっとしたでし  
ょう。



これはおれいのおかねです。おかねを  
ひろつてとどけてくれたひとには、い  
ちわりのおれいがもらえるきまりなん  
ですよ。

このヒヤシンスは、おばさんがそだ  
てたものです。もうすぐさくとおも

ます」

友は覗き込み、満足そうに頷いてい  
る。ほんと、この人しつかりしてるよ  
なあ。そしてきつついよなあ。

「ねえ、この子のお母さんさ、そん  
な、お札なんて結構です、ただけま  
せん、つて言わないかしら？」

「……だからつて、そうですかと引  
つ込めるわけにはいかないでしょ、も  
う！ さっさと行つてきなッ」

「今回はアナタの新たな一面を見たわ」  
友は冷ややかに言い放つ。同感だ。

でもね、みんな貧乏が悪いのよ。

その後、二次会は諦めたものの、結  
婚式には無事出席できた。告白つい  
でに言うのと、結局初めてクレジットカ  
ードなるものを使う羽目になった。いや、  
使ったのはそれ一回キリよ。

夫には全て内緒である。

わが家の経済が落ち着きを取り戻す  
まで、それからだいぶかったことを  
つけ加えておく。

(え・小沢恵子)

# ★わいふバックナンバー

(特集テーマ)

272号 カウンセリング体験

273号 子どもとテレビ

274号 引っ越し騒動

275号 料理と私

277号 不妊治療・私の場合

278号 「おけいごと」との格闘

279号 あなたの夫は何番目の男?

281号 思いつきの地・再訪

283号 私の読書歴

285号 美容と私

286号 私の健康法

288号 車と私

289号 私の職業

291号 忘れ得ぬ友

292号 パソコンとの付き合い

293号 特集なし

シリーズ後の書

お年寄りが安全に暮らすために

変わる主婦・変わらない主婦

お申し込みは ☎ 〇三・三六〇・四七七

一五〇〇円

一五〇〇円



ラブ・アディクションと回復のレッスン



ハワード・M・ハルバーン著  
白根伊登恵訳  
学陽書房  
本体1600円+税

屋久島に家を建てる



おさないひろこ文  
小山内隆絵  
連合出版  
本体1700円+税

先端医療のルール



棚島次郎著  
講談社現代新書  
本体660円+税

悪い恋愛や夫婦関係は健康を害する。なのにどうしてもそこから抜け出られない。そのもつとも端的な例が暴力亭主との生活から抜け出られない妻の場合だが、そんな極端な例でなくとも、どうしてもこんな生活を?と自分自身で思いながら一向にそこから脱出できない人が多いのはどうしてか。

この本は、いわば「愛の牢獄」とも言うべきそうしたさまざまなケースを、豊富な実例を挙げて記しながら、その原因、そこからの脱出の方法も具体的に記した、役に立つ一冊。といっても闇雲に離婚をすすめているわけではない。男女関係の機微に迫る。(野)

タイトルからして、HOW TO本かと思っではいけない。『大草原の小さな家・屋久島バージョン』とでも言ったらいいだろうか。文明に背を向けるように、頑なに縄文チックなライフスタイルを追求する家族の私小説なのである。

世界遺産の緑深き島で、神秘のパワ―を深呼吸して、素人夫婦がたった四十二万円の低費用で実際に家を建ててゆく。テント暮らしで生まれたての赤子を連れて。一体、どんな愛情で結ばれていれば、こんな無茶なことができたのか!。彼女の前著「なぜか屋久島、縄文絵日記」(風媒社)も、合わせてぜひ読んでみてほしい。(柊)

生命科学はこの十年、すさまじい勢いですすんでいる。その中で、人間の肉体をどこまでモノとして扱うことが許されるのか、もしそれが完全なモノであって、あらゆる科学的操作の対象となるものが許されるものならば、いったい人間の尊厳とはどこにあると考えるべきなのか。臓器移植はゆるされるのか、遺伝子は誰のものか——そうした問題をめぐって、アメリカ、フランスなどの法的対応と、あまりにも出たところ勝負のわが国の対応を追いながら、さまざまな角度から現実を追求している作品。最新の情報が満載されている。ついでいくのが大変だが、それだけに興味深い一冊。(田)

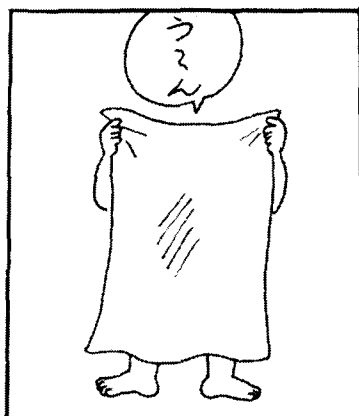
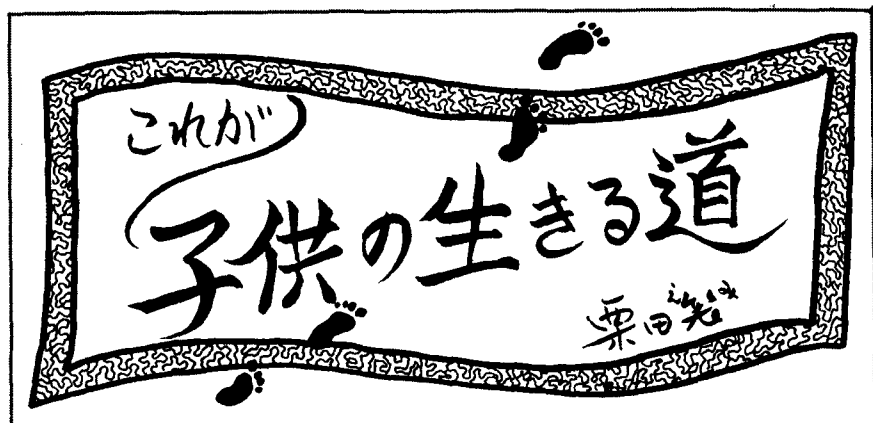
ブ

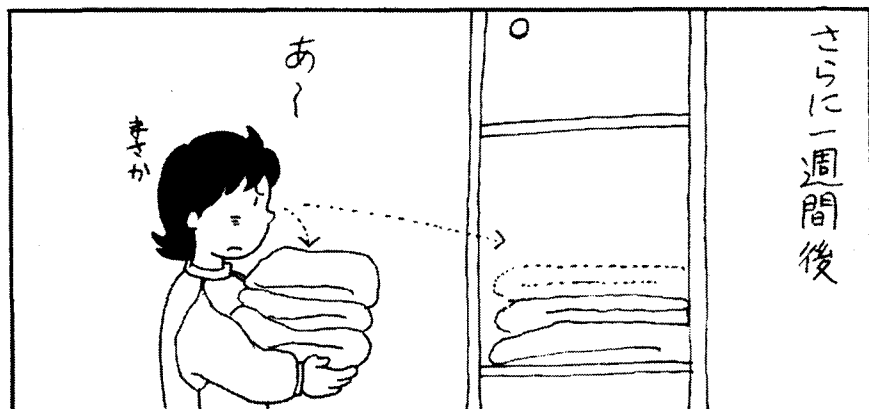
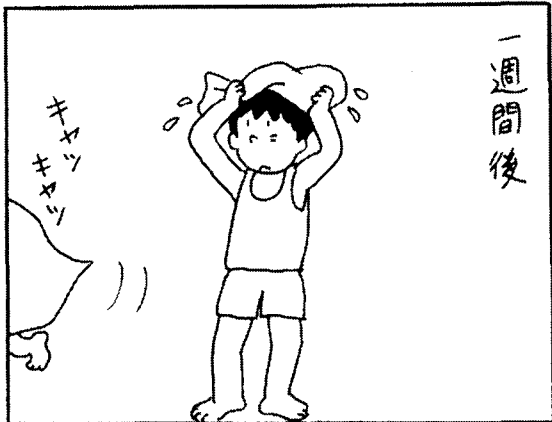
ッ

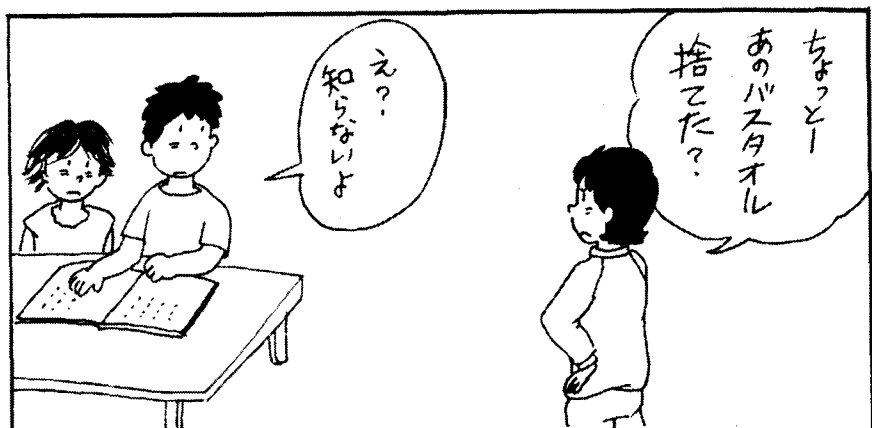
ク

情

報









公募体験記入選作

# 起死回生

静岡県浜松市

大石浩司（62歳）

四月という月が巡ってくる度に、私は自分という人間の原点へ帰ってゆく。何の為に生まれてきたのか、今まだ与えられている命の意味は……などということを問うてみたりする。ではその他の月はどうかというと、生きることには必死で、衣食住のあれやこれや、他愛もない人間関係の錯綜した愛憎裏に翻弄されているのである。

勿論、人間だからそんな日々の合間にも精神的な飢えを感じて、何か一段高いことを想ってみたりはする。だが、それはいつも短く日常生活に一瞬打ち上げられた花火のように消えていつてしまうのだ。

四月……この月を私はどんなに愛していることだろう。常ならぬ愛の故に、得知らぬ憂愁が胸を引き裂くばかりである。

幼い私が死の淵から生還して、祖父と母と四歳の弟がさようならの一言も無しに帰らぬ人になったのが、四月の出来事だったのだ。その月のことを「愛している」というような表現はおかしいではないかと、人にはそう思われるかもしれない。しかし、私にはその他の表現は出来ないのだ。

亡き母が幼き我を背負いしは

京三条の道どのあたり

母在りし幼き頃は樂しかり  
緋鯉真鯉が風に鳴る音

右のは私の下手な短歌の二首であるが、思い出の中に深く下りてゆくと、変な言い方だが、この世の中には本当には「死」などというものは無いような気がする。過去というものも現在という一つの同時性の中に、生き動いている……そんな気がしてならないのだ。

「ひろし。ごはんですよ」

母の声がどこかでする。

「はい」

私はそう返辞をする。むかし……懐かしい四月。それはまた今日この四月だ。

「ちいちゃんにいちちゃん、となりのおばさんにリングを貰ったよ」

と、弟の声。

「ひろし。カキソバ出来たが食べるかい」

と、これは祖父の声だ。

この人達はみんな、私を置いて昭和二十年の四月に空襲に遭って世を去っていった。同じ日、私は崩壊した防空壕の土砂の中から婦人達の手によって掘り出された。人工呼吸が間に合って、この世の者になった。今も、私の鼻には一度途切れた息がまだ通っている。

もつとも空襲は、私に手痛い土産を置いていった。爆風で両方の耳の鼓膜が破れて、後年そこに水が這入り、ひどい難聴になってしまった。今もテレビドラマの出演者やアナウンサーの声も、どうかすると人の「通訳」がないと一つも分からなくなってしまう。

そうはいっても私は幸いなことに、孤児とはならなかった。祖母と兄が生き残ったし、兵役に行っていた父が帰ってきてくれたからである。

あの日の事を考えてみると、私は人間の命というもののなんともしえない儚さに思い至る。

祖父と母は同じ防空壕に入っていて、ほとんど直撃だった。少し離れた壕に入っていたのが祖母と兄と弟と私の四人で、祖母と兄は胸から上が外に出ていて呼吸が出来た。弟と私は完全に土砂に埋まってしまった。亡くなった弟が私より先に掘り出されたのだが、もう瞳孔が開いてしまっていた。後から掘り出されてきた私の方が、人工呼吸で助かっている。というのは、当時小学校の一年生に入学したばかりの私が、空襲警報のサイレンと一緒に咄嗟にランドセルを手にとって避難し、その上に顔を伏せていたので、顔とランドセルの間に僅かの空気があって、弟と私の生死を分けたのは、結局、たった一つのランドセルの故だったのである。

母と祖父は口と鼻と耳から鮮血を流してこと切れていたそうだが、直後の遺体は大人の人達が私の目から隠してしまった。

それまで住んでいた家は爆風で倒れ、火が回って、私達生き残った者は近くの神社の社へ逃げ、食べるものは近所の人達が炊き出しをしてくれた。銀色のバケツの底に新聞紙を敷いて、その中にご飯を入れて持ってきてくれた。米粒に新聞紙が貼りついたのを、私達は三人で泣きながら食べた。泣きながらといっても、涙が出てこないままに泣いた。涙が出てきたのは、田舎に疎開して暫く経ってからのことであつた。あの日に涙が出ていたなら、祖母も兄も私も生きてはこれなかったであろう。

疎開した田舎というのは父方の親戚で天竜市の上阿多古村落合という所だった。此所は村の中央を大きな川が流れ、川の両岸に深い山があつて木立が水面に美しい緑に影を映し、そうした自然が私達の心を癒してくれた。自然は神だというのが、まさにその通りである。川には大きなカニがいたし、水中眼鏡で小さな魚の群を見たり、川の中にいくつもある大きな白い岩の上で寝そべったりした。山の中にはマムシもいた。カッパが出るという深い淵もあった。そこにはお化けが出るというようなことも聞いた。町から行った者には目新しいことばかりで、生活に同化するのには暫くの時がかかった。そうしたこととも悲惨な体験を紛らわした。土地の子供達が器用になると木に登るのや、なんの苦もなく丸木橋を素足で渡るのを見て驚いたりした。私は丸木橋が怖くて遠まわりしたり、カッパと化け物が出るような場所は避けて歩いた。



背負子（しよいこ）というのも苦手だった。刈った芝をそれに積んで背負うのが小学校の課業にあったのだが、私はどうしても腰が立たないので、その時間だけは教室に居てもよいという事になった。

けれども夜になって川岸のあたりでカジカが鳴くと、急にもの悲しい気分になり、亡くなった母を思い出しては泣いたりした。田舎の親戚の家には、はるちゃんという年若い美しい乙女がいて、そんな私を不憫に思ったのか、いろいろと親切を尽してくれた。冬など雪で大きなオニギリを作ってきて、

「ひろちゃん、食べな」

と言ってニコニコ笑うのだった。

私は上阿多古の川でも溺れて死にそうになった。泳ぐなどいうことは出来なかったもので、その日最初は浅い所でバチャバチャとやっていたが、そのうちに次第に大胆になった。腰から上さえ出ていれば大丈夫と、ずんずん川の真ん中に近い所まで行ったらしい。ところがそれが



間違いのもとで、川というのは途中ですり鉢状に落ち込んでいる所があつて、私はそこに嵌まつてしまつた。あつという間に身体が沈んで、私は助けを求めて無意識に片手を天に向つて伸ばした。私はまったく運がよかつたのだ。その時、丁度岩の上に寝そべつていた土地の少年の二人の中の一人が、寝返りをうつた拍子に、水の上に出ていた私の手首だけを目撃してくれたのだ。しかもその少年二人というのが土地でも名うてのカップで二人で流れに飛び込み、左右から私を救い上げてくれた。

事の顛末を聞いた祖母は、泣きながら平手で私のお尻を打つて、

「前が此所で死んだら、私は育代になんと言つて謝ればいい」

激しく怒つた。私はこれには懲りて、もう二度と川の深い所へは行くまいと思つた。育代というのは、亡くなつた私の母の名前だ。

戦災の報を受けて、一度だけ父が兵役から戻つてきた。田舎でも当時はひどい食糧難だったので、父が軍隊から持つてきたコオリヤンの握り飯を、私はうまい、うまいと言つて食べた。腰に吊した銃剣を抜いて見せて貰つたりした。刀身が夜戦用に黒く塗つてあつたので、剣の刃は白いものとはかり思つていた私を驚かせた。三島に兵舎のある父はすぐに戻つていった。その間、父は最愛の妻や愛児の死にも氣丈に耐えて、

「おばあちゃんをよく氣が狂わなかつたなあ」

と、祖母の身を案じていた。

やがて終戦になり、今度は父も本当に兵役から歸つてきた。

私達の疎開は半年で終つた。故郷に来てみると、町はすっかり焼け野原になつて、曲つて焼け焦げた水道管が道のいたる所に見うけられた。

今でも目を閉じると、往時の情景が脳裏に浮かぶ。大きなビルディングがあちこちに建つてゐる今日の同じ町の姿を、当時どうして思い描いたりすることが出来ただらう。

私は町に歸つてから、急に耳の具合の悪いことを、田舎に居た頃の百倍もの酷さで身に心に感じはじめていた。

そうこうするうちに町には闇市が立って、石けんのような日用品が出まわるようになった。ゴムの管でスクリュウが回る色とりどりのおもちゃの舟などが、タライの水に浮かんでいた。「リンゴの唄」が流れ、プロ野球が盛んになり、赤バット青バットの二人の名選手が、少年達の人気を二分して、銭湯に行っても背番号と同じ番号の付いた16と3の衣類箱の奪い合いになったりした。

小学校の四年生の時に、私の耳は更に俄に悪化した。夏の海水浴で鼓膜の破れたところへ水が這入って、ひどい中耳炎になった。耳からはいつも濃いウミが溢れてきて、私は次第に友達を失い、自らも急に厭世的になっていった。それに続く中学生の時がまさに地獄の季節だった。世の中が落ちていて産業の発展がめざましくなると、我も我もと競って良い学校へ行きたがった。いわゆる「学校信仰」の盛んな時代で、学生は皆、成績の評価がそのまま人間評価に結びついてくるといふ時代だった。私はひどく反発するものがあつた。

私は自分が置かれた状況の中で、孤独でもあつた故か読書に熱中した。わけでも愛したのがドイツの詩人・ヘルマン・ヘッセの作品だった。その全体に流れている純粹さと深い美しさの虜になったのだ。今思うとこれが私を生かしたのだ。文学熱が昂じて自分でもぼつぼつと詩作を重ねて、新聞にも作品が数回に及んで掲載されるようになった。ささやかながら「生きる歓び」を体感したのだつた。

そうはいっても身体の方のハンディキャップは相当に重く、事務係の職に就いたのだが、かかってくる電話の声はうまく聴こえないし、対人関係はうまくゆかないで、精いっぱいによつたのだが、及ばず、職場を転々する始末だった。経済に窮して、継母もいる家庭とうまくゆかず、家出をして、公園や駅に野宿するということもあつた。生きるにも生きられず、死ぬにも死ねず、世間の評価も落ちる一方だった。だが、私はそんな中にあつても、文学に憧れを持つことで、粘り強く自分の命を支えていった。そんな心の一方では、文学以外にも見える人間という形で、自分を慰めてくれる人間を探していた。だが、そういう人間はどこにもいなかった。世の中は物質に金銭が神だったから、誰の目にも私のようなのは甘ちゃんのだメ人間だったに

違いない。

もつとも、中学の頃には名古屋から転校してきた一人の女生徒が、一人だけ私に好意を持ってくれた。たとえばある日、耳からウミが溢れ出たままで知らないでいた私の傍らに近寄ってきて、（私の病は悪性なので、医師から見離されていたのだった）

「大石くん、保健室に行こう」

そう言つて一緒に廊下を歩いてくれた。他の生徒達がひやかす中を、彼女はしっかりと顔を上げ、前を向いて、平然として寸分も臆する風がなかった。姿形も挙措動作も際立つて美しい少女で、彼女が風邪などで二、三日学校を休むと、私は教室の中にぽっかりと白い穴が開いて、砂漠の中にたったの一人きりで取り残されたような気持ちになった。

今、彼女はどこでどうしているのか知らない。同窓会という所へ一度も出掛けない私は、懐かしい人の消息を知ることもない。けれども今、彼女は幸福に暮らし、人からも愛されているのだろうと思う。その人となりから、そういう確信は揺るがずにいる。

ともかく社会へ出て、次第に不幸も極まってくると、私の心はまた過去の方へと向かつてい



った。早逝の母が恋しくなり、自分はどうしてあの日人工呼吸などで生き返ってしまったのだろうか、そんなとんでもないことまで思いはじめるようになった。私は本気に遺書を書いたりした。

ところがこうしたある日、私が新聞に投稿した詩がまた入選して、

### 「夕暮れの花」

という作品の評をして下さった三好達治先生のおことが、再び私を生きる方向へと引き戻してくれた。

「詩としての成功、それはそのまま人生への貢献でもあるのです」

私はこのお言葉と出会う為に、長い苦難を生きてきたような気がした。やがて上阿多古の思ひ出を資料にした童話が挿し絵入りで、六か月連載になったり、市内のタウン誌に徐々に作品が掲載されていった。

最近、町の通りを歩いていたら、私の幼い頃を知る一人の老人に出会った。この人は若い頃、私の母に片想いしていたと、昔、兄から聞いたことがあった。あれから半世紀過ぎてても、老人は私の母を誉めちぎった。そうして、私の母が今まだ生きているかのように、

「私はあなたのおかあさんと結婚したかったです」

なんとも切迫した表情で、そう告白して下さった。老人にとって恋仇だった私の父はもう世にいない。気が付いてみると、私ももういつか六十歳を過ぎていた。耳はまだひどい難聴で戦いの多い人生だが、いつかもっと良い実を結ばうと、見果てぬ夢に夢を重ねて生きているのである。

四月、亡き人々の声がまだどこかで、音叉のように胸に聞こえる。

——ひろし……ちいちゃんにいちゃん

それで充分だ。

「生きるよ。生きるよ。一層高い所をめざして」

いつか無意識の中で、私はそう答えていた。

## 選考を終えて 編集長 田中喜美子

「わいふ」が過去二六年間、求めつづけ、掲載しつづけてきた文章——随筆や紀行文などとは明らかに違う文章のジャンルを、いったいどういう名で呼ぶべきなのか、いまだによい言葉が浮かびません。

あらゆる芸術や技芸のジャンルにおいて、アマはプロに遠くおよびません。しかしひとつだけ、アマがプロをしのぐ不思議な力を発揮できる分野がある。それは生活の現場に生きる人々が、自ら筆をとってつづる文章なのです。

そうした文章は、ときに最高の小説にも匹敵するような感動を人々に与えます。どんな練達のルポライターの筆も及ばない素朴な力を秘めたアマチュア作品……それが創刊以来、「わいふ」の私たちがこの雑誌の魂として一貫して求めつづけたもののなのです。

今回入選された浜松市の大石浩司さんの「起死回生」を読まれた方は、そのことを実感していただけたと思います。他にも多くのすぐれた作品が寄せられました。この作品は、読者に与える感動の深さにおいて、他の追隨を許しませんでした。構成もしつかりし、表現にも無駄がなく、破綻のない立派な作品ですが、そ

こに流れる感情の深さと強さが人に迫るのです。

希有の「詩魂」ある作品です。

\*

世には想像を絶するような特殊な経験を重ねる人々がいます。今回の応募作品のなかにも、その「特殊さ」で心を奪うものも少なからずありました。

しかし体験の特殊性に寄りかかっているだけでは、読者の心を動かすことはできません。文章の最高の使命は「感動」であると私は信じていますが、その感動は、与えられた環境のなかで懸命に生きていく人間の姿なしには得られません。小説には必ず主人公があるということ、文学とはそうした人間の「生きる姿」を離れたところでは成立し得ないものであることを表しています。

ここ半世紀、日本人は「豊かで、楽しく、面白く」が最高の価値であるかのような錯覚のなかに生きてきました。貧しさによる苦悩は姿を消し、性的自由もほとんど公認のものとなって、日常生活のなかで人々が闘い、乗り越えるべき障碍のほとんどは消滅してしまいました。

その結果、みなが幸福になったかというところではありません。人々は空中に浮遊しているかのような実感のなさ、生きがいの乏しさに苦しんでいます。

こうした状況のなかで、文学も大きな変質を受けました。いわゆる「純文学」が姿を消し、ミステリーや犯罪小説が浮上しているのはそこに原因があるのだと思います。

今回の応募作品にも、その現実をはっきり反映しています。

六十代から上の人々には、当然のことながら、戦争体験が大きな影を落としています。しかし生活が平和になるにつれて「戦争」は背景から引き下がり、替わって登場するのが個人生活です。五十代―三十代と世代が下がるに従って、その「個人生活」の内容はあくまでもラクな、しかしますます内容の希薄なものとなり、二十代では生活そのものが蒸留水のような無味なものになっています。そのなかで人生の実感が失われ、親は子に、子は親にしがみつき、精神の健康を失う人々が増えつつある――それが五百に近い作品を通して得た私の感想です。

具体的には、若い世代では男女とも親との関わり、恋愛、いじめ（その多さはショックでした）、中年世代では家族の病氣、死、子育てなど、「わいふ」に寄せられる作品と同じ傾向が見られます。当然のことながら、出産・育児に関しては圧倒的に女性の作品が多く、男性の作品で力のあるものには、自らの職業生活を描いたものが多く見られました。

一般に男性の文章は、感情を抑圧して生きる習癖のためか、出来事の羅列のような無味乾燥なものが多いのですが、「起死回生」のような作品では――実にまれですが――女性にはない力強さで人の心に迫ってきます。また年代が下がるにしたがって、「自然」が人間の周辺から姿を消し、人間という生身の動物が、人工物に囲まれて生きている不自然さと、そのなかで人間が幸福に生きるために絶対に必要な「理想」をうしない、ただ「自我」にのみこだわって生きる「現代の悲慘」が浮上しているように感じます。

#### ●応募作品内訳

全四七九篇。「公募ガイド」だけでなく、他の公募雑誌からも募集要項を転載させてほしいとお申し出があつて、予想を上回る多くの作品が寄せられました。

応募者総数・女性三七〇人、男性一〇九人

年代は十代一〇人、二十代一二三人、三十代一四七人、四十代八七人、五十代四九人、六十代二九人、七十代一四人、八十代三人、不明一七人

●入選 大石浩司さん（六二歳）

■入選候補者（順不同・敬称略）

星めぐみ 後藤愛 井原博子 深沢義也 倉持宏

菅沼博 和田はるみ 布施幸子 金光保嘉

岡田マチ子 矢島喜代子 松元光恵 安藤美紀

岡田義樹 由良弥生

# 国会議員に なつてしまった⑤

東京都千代田区

黒岩ちづこ

請願署名は  
どう処理されるか

これまでさんざん署名というものをやってきた。自分が署名するのみならず、署名用紙を持って近所まわりをしたことも何回がある。嫌がられていたに違いない。夫はいつも言っていた。「そんなもの意味がないから止めろ」私の言い分は「でも署名してもらうことで理解してもらえないじゃない」と

いうことは、署名簿そのものが威力を発揮することは、考えていないということでもある。

国会に来てみたら、実態がわかった。

私が議員になると直ぐに「紹介議員になつて」という陳情がきた。紹介議員を通してしか、署名簿が出せないという仕組みを知った。考えてみると、私は三〇年もここ新潟に住んでいる。だから署名を集めることはしたが、それをどこかに送っていただけだったのだ。国会まで届ける人になったことは

なかった。紹介議員を探す、なんていうことが実はかなり大変なことだということに、やっと気がついた。

ざあっと目を通してOKをしたことがあった。その人たちが帰ってからよく読んでみると、これはまずい、全てに賛成できることではない、と気がついたことがあった。OKといったときに「意外」という感じでオーバーに喜びを表現していたのが気になって、よく読み返してみたのだった。なるほど、これだな、確かに私はこれに賛成はで



きない、あの人たちがあんな喜び方をしなければ、私はこのことに気がつかないままだっただろう。

今ではそれが何だったか忘れてしまったのだが、いいかげんな気持ちでOKしたことを反省して、丁寧に断りしたのは、覚えている。

それからは慎重に引き受けることにしたのだが、それでも数回紹介議員になった。その署名簿が届けられると、それは毎日発行される「参議院広報」に載る。何々についての請願、と一緒に紹介議員の名前が出る。

一体これはどのように処理されるのだろうかと思っていたら、議会が終わるそうになる頃、請願の一覧表が出てきた。これを理事会で検討する。各党の人数に応じた数の理事で構成され、自民党が二人、後はみな一人なのだが、公明、共産、が一人で、社民党以下がオブザーバー。つまり社民党とさきがけがオブザーバー。といってもかなりここは民主的で、社民党や私などにちゃんと意見を言わせる。このときは共

産党の井上美代さんと社民党の大脇雅子さんと私の三人でかなり意見を言った。

そのとき厚労委員会におりてきた請願は五四件あったのだが、自民党が通してもいいといったのはたった四件だった。全員賛成のものしか通さないとというのが決まりなのだそう。

一番めめたのは、食品について生協が取り組んだ請願だった。「食品衛生法の改正及び運用の充実強化に関する請願」は、千四百万人も署名が集められていた。しかも野党のみならず、与党の議員までが紹介議員になっていた。それが理事会で、自民党の反対によつて否決されたのだ。言うことには、改正の内容を「一条に」などと条数を指定しているのがダメなのだという。「食品の表示の目的に『消費者の選択に役立つ』という趣旨を加える」「食品の安全行政に関する施策について、積極的に情報公開を奨めると共に、消費者の参画を法律の中に明記する」など、納得のいくことばかりだ。だが、

自民党が党の中で話し合ってきているので、反対意見に対して、直接質問することができないのだ。

井上美代さんと大脇雅子さんと三人で、こんな短時間で決めるのはおかしい、千四百万人の人になんていえばよいか分らない、とかさんざん言ってみても、自民党が反対すれば、それだけで請願は通らない。次回からはもっと時間をかけて議論をしようということにして、終わるしかなかった。

帰りの道々(実はこれが結構長いのだ。議院会館と委員会室の行き来では、はじめの頃、よく迷ったものである)、女三人で野理想というのを作ろうということになった。野党の理事懇のことである。そのまま別れてしまったが、その後、野理想は、実現したのだろうか？

又、この秋に出てくる請願が、どれだけ大切に審議されるのか、この目で見ることができなくなってしまった。(一二月に熊本の女性議員サミットであった井上美代さんは、その後それ

らしきものができていると言っていた。

紹介議員として、生協の方々に深くお詫びしたことは言うまでもない。後になって考えて見ると、この改正案が通ると困る人たちがいて、その人たちが頑張ったのかもしれない。まさに「抵抗勢力」があつたに違いないと思うようになった。情報公開や消費者の参画などが本当の反対理由なのではないか。そうは言えないからあんな言い方になつたのでは。あくまでも、これは私の推測である。生協は再度この請願に取り組んでいるという。立派である。どうなるのか見届けたい。

## 国会に保育所を

まだ議員にならない頃、堂本事務所にて「女性議員懇談会世話人会のお知らせ」なるものが届いた。私はその日、恐る恐る出かけていつてみた。すると、そこに来ていた各党の世話人が歓迎してくれ、堂本さんの後引き続いて無所



坂口厚労相と

れまでDV(ドメスティックバイオレンスの略で家庭内暴力のこと)防止法を作ることにかなりきつていたようだ。いくつかの妥協をしながら樋口恵子言うところの「草の根封建オヤジ」をも含めてやつと法案ができたというところに、私が入っていったことになる。私はこの法案にはかなりの関心を持っていたので、Jネット(女性政策情報ネットワーク)を通してどのような経過をたどってきたのか、大体のことは知っていた。委員会の審議に加われなかったことはとても残念だったが、議員になって直ぐに、本会議において採決に加わることができた。賛成のボタンを、特別の力をこめて押したものである。

その次の議題は国会に保育所を作ろうというものだった。

早速アンケートをとってどのくらいの人が必要としているのか、又保育時間やその他、どのような要求をもたれているのかを把握しようということになった。アンケートの対象は議員や秘

属グループの世話人をしてほしいという。私は内心とても嬉しかった。何しろたつた二人の会派なので、多くの議員さんと知り合えるチャンスは逃したくない。早速世話人になってしまった。女性議員懇談会(女議懇と略す)はそ

書のみならず省庁の職員にまで広げることになった。この動きはマスコミからも注目され、テレビ局のカメラが入ることもあった。

そういう時には家西さんのところは家族総出で参加した。赤ちゃんのいる風景と言うのは、国会というところに生活を持ち込める近道のように思えた。だから、私は積極的に発言した。「子どもを育てるということが必要悪として考えるのではなく、もっと私たちを豊にしてくれる営みと考えたい。だから、保育所は国会の中にあつて、子ども達の声が国会に響き渡るようにしたい」

皆さんからも色々な意見が出された。傍聴者にも一次預かりを利用してもらえるようにしよう。既にできている文部省の保育所の資料を取り寄せよう。などなど。

合流したときに会の名前を「国会に保育所を、ワーキングチーム」と決め、代表を野田聖子さんとした。

アンケートというのは普通つくるの

も大変、集めるのも、さらには集計するのも時間を要するものである。ところがこれが全くスムーズにできてしまうのがこのグループ。おそらく秘書さんたちの力なのだろう。省庁まで含めた三五〇〇枚のアンケートがたちまち配られ、たちまち集計されてしまった。その頃には参院選挙真っ盛りだったので私は詳しい結果を知らないまま終わってしまった。

このグループは若い人が多く、社民党から二五歳で当選した原陽子さん、自民党の小淵優子さん、なども来ていた。男性も数人参加していて、元プロレスラーの馳浩さんが国会のアスレチックルームにいているところがあると聞く。厚いじゅうたんが敷かれていて、天井が高く、広すぎるくらい部屋だった。ここならいいねえと言いつつ、私にとって最後になってしまった。

後に聞くとそこでは設置主体をどこにするのかというところで、衆議院共済組合とか秘書協議会とかの案があ

り、その組合員なり会員なりからの要求という形をとろうとしているという。

国会と言うところは、産休というものがなかった歴史が長い。去年橋本聖子さんが出産をしたときに、産休制度がないために、「事故」扱いになったと新聞で読んだ。その後女性議員が要求して産休制度ができ、二〇〇一年九月に出産した水島広子さんが初めて産休を取るようになった。まさに国会とは男の職場であることを思い知らされた。

ところがある。驚いたことにはもっと遅れているところがあることを知った。地方議会である。五月七日には全国から女性地方議員が国会に押しかけ、産休ネットを立ち上げた。地方からきた議員で妊娠中の人が二人いた。彼女らは自分のおなかに手をおいてこう言った。「この子が生まれるのは事故なのです」若い市議や県議が出現したことによってこういうことがやっとな問題になるようになったのだ。

国会が最も遅れていると思っていたら、地方議会のほうが更にひどい。

今回の産休についても国会では女議懇の存在によって、直ぐに実現した。地方議会では超党派と言うことがまずないのだと言う。国会ではこの女議懇の存在によって女性政策が前進している。先輩議員の話によると、市川房枝さんの存在が大きいと言う。無所属を貫くことによって超党派でまとまることが可能になったのだろう。

民法改正も女議懇でやってきた。改正点は二点ある。非嫡出子差別の問題は何とか通りそうだが、(田中真紀子氏は、「正式な結婚によらない子供を同じに扱うべきでない」ということからこれに反対)選択的夫婦別姓の問題は「家族の絆が薄れる」とかで、例の「草の根封建オヤジ」達が反対している。何回も議案を提出しながら廃案になったり流れたりしている。今回もし七月の選挙で彼らがもっと増えてしまえば、又チャンスがなくなるといふことで、与党の幹事長に訴えてこよう

ということになった。

六月一日、呼びかけに応じて十数人の超党派の女性議員が(男性が入ることもあるという)自民党幹事長、山崎拓氏を尋ねた。このとき初めて出会ったのが松島みどり、畑恵、辻元清美、後は皆どこかで出会っている。私の参加するような議連は何処も女性が半分以上だから。

このとき、何人かの女性議員が通称として旧姓を使用している不便について語った。パスポートは戸籍上の姓になるので外国に行くとき大変だ、などと。すると、山崎氏は三人の子どもが全て女で、うち一人が別姓で結婚、もうひとりは一人っ子の裁判官と結婚して彼が山崎姓を名乗っている。通称として彼は旧姓を使用。だから多くの旧姓使用の女性と同じ不便を感じているという。

そして以前、選択的夫婦別姓に賛成だと言ったら、自民党の中で袋叩きにあったという。なぜ袋叩きなのかと私が質問したら、「家族の絆」論だと言

う。

そこで皆が口々に言った。「別姓の夫婦のほうが絆は強いんですよ。だって戸籍によって守られていないわけですから」

更に、民法改正が通るまで、結婚を待っている人がたくさんいると言うことだった。何とか自民党の中を説得してほしいと訴えて帰ってきた。

私はこの問題についてはずうっと前から関心をもっていた。少女の頃から自分の苗字を変えたくないと思っていた。家族で墓参りに行くと決まって父がこういった。「秩子はこの墓に入らない」

もしかしたら「入れない」と言ったのかもしれない。そのたびに、弟たちが入れるお墓に私が入れないのはなぜなのだろうかと漠然と考えていた。

その頃から「結婚はしない」と言っていたように思う。だから黒岩卓夫と一緒に生活を始めたときに、名前をどうするかなどということは考えなかつ

た。変えないことが当たり前のように思っていた。

ところである。大学からの紹介で、京華女子高校に講師として勤めることが決まったとき、「結婚している」と伝えたらしい。職場をはじめ訪ねたときに、突然「旧姓は？」と聞かれた。「名前を変えるつもりはありません」となぜか言えなかった。私にしては珍しく「常識」が私を支配したらしいのだ。「これから変えます」という言葉が出てきてしまった。この一言をその後ずうつと後悔することになった。「私は名前を変えたくなかったんだよね」とことあるごとに言っていた。娘たちはまるで子守唄のごとく聞かされてきたこの言葉によるのかどうかは定かではないが、三人とも名前を変える気はないらしい。次女は別姓のまま「事実婚」と称して私が昔夫としていたように一緒に生活している。「私は名前を変えたくなかったんだよね」といつも聞かされてきた夫は、結婚三〇周年のときに言った。「これまで三

〇年間黒岩でやってきたから、これからの三〇年は北大路でいくか」

「それがいい」とすぐにいえない自分分がいた。仕事についてからずうつと黒岩だったのだから。著書も黒岩秩子著できている。新潟では黒岩しか通用していない。北大路はたった二〇年で、いまや黒岩は四一年にもなっている。

多くの男たちがまったく悩むことなく一生を終えるはずの「自分の名前」で女たちはこんなに揺れてきたのだった。

自民党の中でも特に頑強に反対していたのが村上正邦元参議院議員で、彼がKSD事件で逮捕され議員を辞職してから、女性たちは「今こそ」と元氣を出した。その上、森山法務大臣は、私が出ていた参議院本会議において、質問に答えて、「個人的には民法改正に賛成です」と発言している。これに自分の耳で聞いたとき、大臣の答弁としては珍しいことと思った。他の方もそう思われたのか、法務大臣が森山さんであるうちに通してしまいたいと話

していた。

しかし抵抗勢力もまだまだ多数のよう、世論調査の結果初めて賛成が多数を占めたとはいえ、これを通すにはやはりもっと女性議員が増えなくてはならないのだろう。

## 家族の参加

一般的に女が議会に出ようとするときに、一番のハードルは家族、中でも夫、といわれている。だが、我が家の場合はどうやら反対だ。

六年前に新党さきがけから立候補することになったとき、夫はちょうど二つ目の診療所の竣工式とぶつかっていたのだが、一緒に上京して党首の武村正義さんとの会談に同席してくれた。次々点で落選したあと、折にふれて「秩子には一度やらせて見たかった。ふさわしい役柄だと思うのだが」と言っていたので、今回の繰り上げ当選を一番喜んだのは夫だったように思う。選挙に出ることになってからは、自

分の名簿で電話かけを始め、ずいぶん  
とがんばってくれた。毎日夜になると  
電話をかけたって、お互いの一日を報  
告しあうのはわれわれ夫婦の日常のこ  
となのだが、そのうち秘書の長男と電  
話で長いこと話し合っている。二人は  
それを「家族選対」と名づけていた。

初めての公開討論会時には心配だ  
ったのだろう、上京してきて、一番前  
で聞いていた。翌朝は仕事に間に合う  
ように朝五時半に出て行くのだった。

子どもたちの協力については先に述  
べた。「七人の子ども」を売りに出す  
ことにたいしては賛否両論があった。  
「七人も子どもを生むなんて、産児制  
限を知らない無知な女と思われるだけ  
よ」「七人子どもを生むことと政治と  
どんな関係にあるのか」「母性を売り  
に出すなんて時代錯誤だ」「子どもを  
産めない人に対してはひどいことなの  
では？」などなど。

他方、それこそが「売り」だと言う  
人もあった。実際街宣車で道を回って  
いると、ほとんど関心を示されないの

だが、「七人の子ども」という言葉が  
出ると「えっ!」と振り返る人がいる  
のだ。話の内容に対してほとんど振り  
むかれることがないのとあまりにも対  
照的で、関心を持っていたかどうかとい  
う意識が先行してしまったのかもしれ  
ない。

何はともあれ選挙終盤戦になると、  
少しは関心が高まってきた、交差点な  
どでゼッケンをつけた子どもたちが手  
を振っている、手を振り返してくれ  
たり、ものめずらしそうに足を止めて  
くれたりするようになり、子どもたち  
も交差点での人の流れに沿って前を向  
いたり後ろを向いたりして、楽しくな  
ってきて、なにやらお祭り気分になえ  
なってきた。

そんな風景は公選はがき(選挙期間  
に公費で出せるはがきのこと)の中の  
「七人の子どもを産み育てた」という  
部分をわざわざ消して出したというよ  
うな人から見ると、ずいぶん不謹慎な  
ものに見えたのではなからうか? ま  
た、産めない女の方や、生むことを選

択しなかった方たちから見るときどう  
なのかということにも、もつと配慮す  
べきだったと思う。

しかし、こんなこともあった。六年  
前の選挙のとき、比例区の政見放送は  
武村党首が、一〇人の候補者を一人ず  
つ紹介するという形だった。そのとき  
に武村さんは私のことを「七人の子ど  
もを産み育てた」といわれた。その後  
すぐに、九州から電話があつて、「私  
はそのことだけであなたの支持者にな  
ります」と五〇歳位の男性の声だった。  
「今の女たちは子どもをろくに育てる  
ことができない」そんな言い方だった。  
その言い方には気になりながらも深く  
追求せずに手紙のやり取りをしていた。  
しかしいつのまにか住所がわから  
なくなつて音信が途絶えた。

ところが、今回の選挙が終わつて何  
ヶ月もたつてから彼から電話がかかっ  
てきた。「脳卒中で倒れて半身不随に  
なり、今障害者施設に入っている。そ  
この図書室であなたの本を見つけたの  
で電話して見た」という。その本には、

私を持ち主にプレゼントしたことがわかる「青木紀子さんへ」との文字があったという。この施設が神奈川県にあり、私が国会にいたことも選挙に出たことも知らないという。

早速私は、この町でいっしょに保母をやっていたことのある青木紀子さんに連絡した。彼女は息子さんが交通事故で身体障害者になっていて、その施設に時々出入りしているという。そこに行ったときにその本を置き忘れていたのだろうというのだ。近々そこに行くので彼に会ってくるといつてくれた。私のことを何も知らないはずの彼と、彼のことを何も知らない私のあいだをつなぐ役目を紀子さんは喜んで引き受けてくれた。

行ってきたの報告を聞いて驚いてしまった。彼がものすごく政治のことをよく知っているようで、一九六〇年のころからの首相のみならずこまごましたことまで知っていて、五〇歳くらいの人だと小学生時代のことだからとかなり驚いていた。そんな政治オタクみ

たいな人が七人の子どもというだけで、支持者になるといえるのはどういうことだろうか？

選挙というのは、何を言ってもそれがいまいちという人だとだめという人がいる。プラスマイナスして、多いほうをとるしかない。それが票をたくさん取



最終日。手話通訳付きで堂本暁子さんの応援演説。6人の子どもたちもいる

つてくる方法なのだ。ところがそのような判断をするとメジャーな価値観のほうに流されていく危険性がある。ここが一番難しいところだということなのだろう。

しかし、多くの皆さんが「七人の子ども」に対して大きな興味を持ったというのと同じように、国会議員たちもこれには想像以上の関心を示した。前述のようにはじめの委員会質問のとき、「七人の子どもを育てながらフルタイムで働いている」と前置きをして質問をしたら、その委員会が終わるや、何人もの議員たちが私に話し掛けてきた。「七人とはすごいですね。男が何人？」「それぞれ何歳？」「いくつの子に産んだのですか？」などなど。与党席からもやってきて話し掛けられたのには驚いてしまった。

とはいえ、そもそも選挙のときに女の候補者には一男二女の母などと書き、男の場合には何も書かない、ということに対しておかしいと思いがら生きてきたのに、今回自分のことにな

ると「七人の子ども」を前面に出したということは、批判されるに値するのだろう。これからも考え続けていきたいテーマだ。

## 落選

出馬表明をした頃はまだ首相が森喜朗氏だった。無党派女性候補の堂本さんが当選する風が吹いていた。堂本さんの時だって初めのうちは「泡沫候補」といわれていた。それが当選にこぎつけたのだから、私だつてもしかしたら、という思いがあった。ところが、小泉首相になってからは、まったく風向きが変わってきた。

六月二四日の都議選の結果を見ても私に有利な材料は何もなかった。あつたとすれば、生活者ネットの女性が六人全員当選したということぐらいだ。しかしこれもよく聞いて見れば、民主党の応援あつてのことだった。堂本さんだつて一週間前の世論調査は三位だったのに一位まで行つたんだからと

か、最後の三日で風が吹くとかいって自分を奮い立たせていたが、一向にその気配はなかった。

七月に入ると朝日新聞東京版が候補者一人へのアンケート結果を毎日一つのテーマごとに公表し始めた。「景気対策」「首都における渋滞対策」など。一日目のアンケートを見たとき、私はゾツとしたのが事実だった。皆さんが六行びつちりかいているというのに私の欄だけ「自転車専用道路を作る」と一行だけなのだ。秘書の宇洋も「すぐに新聞を閉じた」という。

忙しい真つ盛りにたくさんの方からミからのアンケートがたてつづけにくる。面倒くさい、どこも同じような質問、何とか統一してくれないものだろうか、などと思いつながら、仕方なく答えた回答がそのまま公表されてしまったのだ。もちろん「紙上で公開します」と書かれてあつたのだから、問題は私だけなのだ。敦夫さんは後に「あれで十万票は減った」と言った。

実際選挙事務所にも何通もの抗議や

疑問が寄せられたという。ボランテイアさんたちも、この応対にはかなり窮していたらしく、ただただ申し訳なかったと頭を下げたいのみである。

街頭で「お母さんの困ったところは？」との質問に対して秘書の宇洋は「アンケートに変な回答をした」と言つた。それを受けて選挙のプロと言われる斎藤まさしさんは、「エッ？ 候補者自らが書いたのですか？ すばらしい。そんな人はいませんよ。みんな他の人に書かせるのですから」と慰めてくださったが、気休めにしかならない。

そしてとうとう二四日の世論調査結果で、私は八位ということになっていった。見た瞬間、血の気が引いていくのを感じた。その朝、恐る恐る事務所に入つていったが、そこにいるボランテイアさんたちは、何事もなかったかのように、いつものようにきびきびと仕事をこなしてくれていた。頭が下がる思いだった。

選挙戦最終日、もうここまできたら



地のままで行こうという開き直りができるようになっていた。堂本さん、赤松さん、三木さんを始め多くの方が来てくれた。

私は二、三日前から鼻の頭が赤くなっていた、夫の診断によれば火ぶくれと言ったことだった。まったく雨が降らず、猛暑の中、皆さんには本当に大変なことだったのだが、更年期障害で血液循環が悪くなっていた私には、何よりの薬で、長年着ることができなかった半袖を着られるようになり、ほとんど回復してしまった。最終日には火ぶくれがつぶれて血が出ていたのだが、

そんなことはまったく気にならず、私の元気さは周りの人を驚かせていた。

選挙戦の最後は始まりと同じ新宿南口階段下だった。私たちがついた頃にはもう大勢の方が集まってくれていた。一人一人よく見ると、ほとんどが知っている方ばかり。すっかりアットホームな気持ちになってしまった私は、まったくありのままの姿で話すことができた。

その日、仕事の都合でどうしてもこられなかった次男を除いて六人の子供が展示物よろしく並んでいた。その子たちに向かって私は「高校時代、停学

を食った人、手を挙げて」長女、次女、三男、四男が手を上げる。バイクでのスピード違反、万引き、飲酒などで過半数の子どもが該当者だ。「子どもたちが悪いことをしたときこそ、大人たちが反省させられ、親として一回り成長させてもらえます。そのときに、親子の絆もしっかり結ばれるのではないでしょうか？」と結んだ。

堂本さんが応援演説の中で、「秩子さんは、子育てに仕事に、ご主人のご飯も作って」と言ったとき、私は持っていたもう一つのマイクで割り込んだ。「夫のご飯は作りません。夫が高校生の弁当と朝食を作っていました。私は子供はしつけなかったけど、夫はキチンとしつけました」すると夫が私からマイクを取って「しつけられたわけではない」と反論。「子どもたちとの付き合いにはそのころしていた洗濯よりも料理のほうがいいと考えた」のだという。聞いている人たちの中に微笑みが広がっていた。そしてその時、街宣車の後ろの広告がゲームやさんの三木睦子さんは84歳だというのに2回も街頭に立ってくださった





最終日。赤松良子さんの2回めの応援演説。手話通訳付き

それで、7という字が三個並んでいたのを誰かが見つけて、敦夫さんの作った7という字の看板と呼応しているかのようで、これも笑いを誘っていた。夜八時、長い選挙期間の終わりがきた。あとは天に任せるのみだ。ところが、その日の午前中から「今日で終わ

りなんてつまらない。もっとやり続けたい」といつていた有給ボランティアのうぐいすさんたちが、事務所に向かって走り始めた街宣車の窓から肉声で外に向かって呼び始めた。「黒岩ちづこは子供たちの言葉にならない声に耳を傾けます」などとすっかり身についてしまった宣伝文句を事務所までの三分間叫び続けたのだった。

いよいよ投票日、私は朝から事務所に行って電話かけを始めた。私の高校の同窓会名簿で、今まで留守で通じなかった若い世代が対象だった。五〇人かけて私の名前を知っている人は一人か二人というのが実情だった。これこそが私にとっての世論調査、当選し得ないという現実を受け止めざるを得なかった。その日一日電話かけをして見て、いかにこれがしんどい作業であるかということを実感することができた。もちろん候補者自身であることを名乗ってかけているのだから、怒鳴られるなんていうことはなかったのだが、かけてもかけても、砂をかむよう

な反応ばかりであるということが一番しんどいことだった。その上に、支持者を名乗るといろいろな知識を確かめられて、「そんなことも知らないで」などと怒鳴られるとあっては、本当に大変なことだったと恐縮するばかりだった。選挙後に書いたボランティアの皆さんの文にも、いちようにそのしんどさが書かれていた。

八時ごろもうすでに出口調査の結果で八位であることがわかってしまった。最下位当選の人が六五万で、私が一七万とあってはどうにも手の届かないところだった。そのおかげで、ああすればよかったこうすれば良かったという後悔がまったくなかったのが幸いだった。

考えて見れば、はじめから五ヶ月のつもりで上京したのだった。楽しい選挙戦をさせていただけで、すべての皆さんに感謝あるのみだ。敦夫さんも終わった直後に「ごめんなさい。でもこんな楽しい選挙は、初めてだった」と言っていた。

閉会パーティのボランティアさんたち



中村一家には本当にお世話になった。息子の九車君にはずうっと街宣に付き合ってもらったり、ホームページを立ち上げてもらったり、パートナーの正子さんには、身の回りのことすべてに気を配ってもらったり、選挙期間には事務所に毎日来て色々な気配りをしてくれた。九車君は今でも続いているホームページの管理をしてくれている。

翌三〇日、お礼と三一日の打ち上げ会の案内をFAXで送った。FAXのない方には電話で知らせた。「残念だったねえ」「悔しい」「今度こそ絶対に受かって」などなど。それぞれの方の思いが伝わってきた。

三一日夜、敗北会だというのに、続々と詰め掛けてこられて、事務所開きのときよりも大勢になってしまった。用意していた食料が足りなくなつて途中で買いに行くといううれしい悲鳴だった。中村さんをして「今日は祝勝会じゃないんですよ。間違えないでください」と言わせるようなにぎやかさだった。私がちっとも落ち込んでい

ないこと、そして「ここできいた絆を大切に、議員でなくてもできる活動を続けていく」と書いたFAXの文が、そんな雰囲気を作り出したのだそう

## 今後

選挙が終わってから六本木の田中秀征さんの事務所を訪ねた。開口一番、彼はこう言った。「あなたはあなたのままだいいんですよ」この言葉を耳にしたとき、私は涙ぐんでしまった。

この言葉こそ、私が欲していた言葉だったと思った。「私はこれからどうしていったらいいの？」との問いかけにも当然のごとく「今までどおりでいいですよ」が返ってきた。「必要とされるときにはお呼びがかかりますから」。

九回立候補して三回当選したという実績を持つ彼らしい言葉だった。

(完)

(写真提供・筆者)

あ  
なたへ

ス  
マッシュ

二九三号 「ハリー・ポッター、  
好きですか？」への反論

ハリー・ポッター、  
好きです

千葉県流山市 黒岩かおり

二九三号の「ハリー・ポッター、  
好きですか？」を書いた方、そして  
それに同感する方、そうした方々は

きつと優秀な頭脳の持ち主で今までの満ち足りた人生の中でほぞをかむ思いをしたことがないか、または単に本をよく読んでいない方々のどちらかであろうと思います。

私はテレビゲームの「ドラクエ」なるものをやったことがないし、フアンタジー小説も好きではありませんが、この本を読んでみてなるほど世界中でベストセラーになるだけの理由はわかったような気がしましたよ。だから「ドラクエ」が好きで愛する方がなからうが、ハリー・ポッターへの親しみやすさとは関係がない

ことは私が保証します。

確かに、みんなが読んでいるからという理由だけで何となく読んでいる人が多いのも事実、登場人物や固有名詞に読みにくいカタカナが多いのも事実だけど、そんなことはこの本に対する評価とは全く関係のないことです。ましてこの本は、単に主人公やその仲間が悪を倒すことを描いただけの内容ではありません。「おもしろい」とか「つまらない」などという短絡的な評価で片づけられる内容でもない。

ストーリーの表面的な部分を辿るだけならば確かに「テレビゲームに似ているな」と感じるのかもしれない。しかし子どもたちにも親しみやすいこうしたストーリーの中で、この世の中で大切なものは何なのか、本当の勇気とか愛とか友情とは何なのか、といったことを作者は訴えようとしているのです。それこそがこの本の肝なのです。作者が訴えよう

としていることに気が付かず、あるいは理解せず、表面的な理解に留まる中で評価を下してしまうことは危険なことです。

もしあなたが本当に「冷めた」タイプであるなら、今一度お読みになつていただければ作者が何を訴えたのか理解することができるのではないでしょうか？ それでも考え方が変わらないなら、あなたこそ「純真な心を失っていない大人」だと言えるでしょう。

## 二九三号の 石田ちえ様

千葉県船橋市 様 まゆ美

ハリー・ポッター、私は好きになりました。原作本が出たころ、借りて読み始めたのですが……どうして

も読み進められない。登場人物や街などのカタカナが、つかかり、のみ込めず、消化不良どころか、えん下障害におちいつてしまった。

普通、小説などを読み始めると、言葉が、映像に変化して立ち上がり、まるで目の前で物語が演じられていくように感じる。ハリーポッターを読んだ私には、それがなかった。

仕方なく、映画化を待った。先日、ようやく、そのハリーポッター賢者の石を見たのだが、結論を言ってしまうと、『映画にしてくれて、ありがとう！ すばらしかった』

登場人物がそれぞれにイキイキとハリー・ポッターの世界を演じ、くつきりと見せてくれた。なかでも魔法魔術学校での子どもたちと、先生たちとの心の交流が、ピカイチである。魔法そのもののおもしろさ、空を飛ぶとか、術を使うとかも、ワクワクさせてくれたが、仮に、すべての人々が、ただの人間であつたとしても、色あせないテーマを感じた。

なぜ生きるか、どう生きるか、大切なものは何か、問題提起されていて、この物語なりの答えがみちびき出されている。

たとえば、学校には、不思議な鏡がある。その前に立つて見ると、自分の望む姿が映る。日がな一日、それを見つめて一生をついやしてしまふ者もいるという。ハリーは、その鏡の中にはほえむ亡くなった両親の姿に、とらわれそうになる。しかし、校長先生はハリーに教えさすとす。「今を生きることが大切だよ」と。

すべてを見終えたとき、私は五感を総動員していた。特に感動というあまり使わぬ心を使った。くわしいストーリーは皆様にお伝えできないが、私はしばらくの間、ハリーカブレにかかり、彼を特集した雑誌やグッズを買い集めるほどだった。

今の子どもたちに必要なのは、魔法ではなく、大人の深い愛ではないだろうか、つくづく思った。

## スマッシュファン

栃木県宇都宮市 真野由美子

「あなたへスマッシュ」を読んで、時折私は違和感を覚えていた。

エッセイは、あくまで一つの作品として尊重されるべきではないだろうか。

例えば夫婦喧嘩の顛末を書いた文章があったら、私たちは、その心理描写や会話をあくまで作品として楽しめばよいのであって、それを道徳的にどっちが悪いの、この台詞は非常識だのと（感じるのは自由にして）誌面で指摘するのは筋が違うし、作者にも失礼ではないか。

しかしなあ、これを掲載してるのは「わいふ」編集部なのだ。つまりそれもオッケーなのだなあ……と、腑に落ちない気分だったそんなある日、二九二号の「あなたへスマッシュ

ユ」で、匿名さんの「この子とこの親」を読んだ。

その文章には、半ば諦めたようなけだるさが漂い、そのくせどこか乱暴な感じで、変に気を引かれるものがあった。

文中で触れられた二つの作品を私は覚えていた。そして自分とはかなり異なった受け止め方をしたこの作者の、生々しい心の傷を感じて、不思議な気分になった。

そうだ、「わいふ」を読んでいる、というのが唯一私たち読者共通の体験なのだ。読んで自分がどう感じたかを書くこと、それはまた新たな作品なのだ。さらにそれを読む楽しみが私たち読者にはあるのだと、初めて私は気付いた。

おりしも、そこには編集部の手書きの傍線が残っており、それが「この本はこうしてみんなで作っているのだ」と、改めて私に教えてくれた。

やはり「あなたへスマッシュ」は

アリなのだと、私は考えを改めた。

ところで私が心配したのは、名指しで「ひどい親」とまで言われてしまった「日曜日の大喧嘩」の匿名さんが傷ついたのでは、ということだ。どっこい二九三号で、大らかに、スコンと打ち返してくださっていて、思わずにつこりした次第。スマッシュファンになった。

（それはそうと、「匿名」でなく、ペンネームにしていただけかなあと思います。「わいふ」購読一年生の私は、少しずつ知っているお名前ができて、それをまた楽しみにしております。匿名さんお二人の作品も、ああ、あの方！と思って拝見したいのですが）



フランス新・男と女 幸福探し、これからの私たち

ミュリエル・ジヨリヴエ著

鳥取絹子訳



この本がまず私たちに伝えてくれるのは、現在フランス人が行っているその模索の種々相である。

離婚率はほとんど五〇パーセント。

「不幸な結婚」より「幸せな離婚」を選ぶ女たち。ホモセクシャルのカップルの法的権利をみとめる法律。その一方で女たちは「赤ちゃんはまだ？」という昔ながらの圧迫にも苦しんでいる。

多くの資料を縦横に駆使するこの作品からは、フランス人自身にさえその全体像を把握しきれない混沌の深さがあぶり出されてくる。

ただしこの「混沌」は女性が自立した社会では必ずやってくる。経済的に男に依存しない生活が可能となったとき、多くの女は「なぜこの人と一緒にいるの？」と問いかけずにはいられなくなるのだから。日本女性がいま、フ

ランスの女性のような激しさで「愛」を追求しない本当の理由は、彼女たちが経済的に自立できないからである。

しかし働く女性の生活はつらい。仕事で成功しようと思えば、子育てに時間はかけられない。しかも彼女たちがもつとも大きな印象を受けた出来事は「出産」。仕事をもつとも大切、と考えるフランス女性の多くがそう答えるとは……。

この作品の後半は、子育てと仕事の間に引き裂かれる女たちの苦闘を描いて、著者の肉声が伝わってくる。

フランスでさえ妻を悩ましている家庭人としての夫たちの無責任。働く女性にとって夫婦の「愛」とは何なのか。男女の愛は果たして可能なのか……。

日本の未来を示唆する重要な作品として、多くの人に読んでもらいたい。

東京都新宿区 野本美希子

フランスは「愛の国」であるという先入観念が私たちにはある。この本を読むと、それは「思いこみ」ではないのだ、とつくづく思ってしまう。

「愛の国」フランスの男女は、五十年前とまったく異なる生活のなかで、いまも自分たちにもっともふさわしい愛のかたちを模索している。

# 私も ひとこと

## やめた

東京都世田谷区 太田啓子（43歳）

結婚後は夫婦連名、出産後は家族三人の名前を年賀状に印刷してきた。しかし今年はやめた。息子が高校生になったということもあるが、一番の理由は私が仕事を持ったということだ。私の上司に賀状を出すのに、夫の名前もくっ付いているというのが何ともいやだったのである。かくして、今年は名字のみ印刷し、その下に各目の名前を書き入れることにした。すっきりしていてなかなかよい。

## ドリアン狂その後

仙台市景区 馬場紹美

二九二号で「ドリアン狂」という文章を載せていただいた。その文の中で「日本のどこかにドリアン農園を造ろう」などと書いた手前、本当に日本でドリアンが育つか調べてみた。

すると沖縄でも露地栽培は無理、仮に温室で栽培しても開花、結実はきわめてまれであった。やはりドリアンを食べるためには現地へ出向かないとダメなようである。ドリアンを口にする日はまだまだ遠い……。

## ボケてしまったのかしら

東京都文京区 トト安田

午後八時にSさんに電話をした。「Sさんお元気でしたか」「あら、お早うさん」「Sさん、今はまだ夜ですよ。明日の朝お伺いしますの」「えー？ まだ夜なの？」今日も朝と夜そして曜日も滅茶苦茶。「私ボケてしまったのかしら。あまり間違える自分が情けなくて」と最後は涙声。「間違えたとわかるうちはまだまだ大丈夫ですよ。ただの勘違いですよ」「そうですか？ 私ボケてないの？」

## 茶髪

東京都足立区 永田道子

ある日図書館の受付に金茶髪の男性がいたのでビックリした。コンビニやスーパーの従業員は茶髪禁止の店もあると聞いていたのその旨「みんなの声」の箱の中に投書した。しばらくすると、その男性は黒く染め直していた。私は気がとがめ区役所に問い合わせたら「制約はない」との答。その後、もと金茶髪の男性に会ったので謝ると、気持ちが悪く、とてもよい人だった。

## 飛鳥の蘇（そ）

静岡県小笠郡 鴨川典子（47歳）

暮れの奈良・飛鳥へ行った。飛鳥寺付近の売店で見つけたのは「蘇」。万葉時代、日本の首都だったこの地での、超高級食材で美容と不老長寿の滋味、庶民にとっては夢のまた夢の食物だったそうだ。

話には聞いたことはあったが、現代にもあったとは！ 牛乳を長時間煮つめた古代チーズをそつと舌にのせたら、レア・チーズケーキのエッセンスといった味わいにうっとり。



## 後悔

神奈川県 石井しのぶ (42歳)

二〇〇一年の夏、大学時代の大切な友人を病気で失ってしまった。もっと会って、話しておけばよかった……と悔やまれてならない。遠くに住んでいるもう一人の親友も同じことを感じたらしく、この間久しぶりに長電話をしてしまった。「話したい人とは話したいときに話すようにしたいね」と、これからは頻繁に手紙や電話をやり取りすることを約束した。もう三人で会うことができないのが悲しい。

## わいふに感謝!

埼玉県新座市 藤岡 泉

市民講座で文章教室に参加し、わいふを知って、書くことの楽しさに火がつかしました。何らかの形で文章を投稿し、わいふが届くのが楽しみのひとつになりました。十二月は、あわただしく過ぎていき、あつという間にあと数日となりました。今年一年間で、わいふに出会えたことに感謝して、次のネタ探しを始めようと思います。スタッフの皆様よいお年をおむかえ下さい。

## 長生きしてね

東京都新宿区 林 直美

手術後二年目の検査で上京、二週間滞在していた母が結果良好で徳島へ帰った。東京駅のホームで動き出した新幹線を見て涙がこぼれた。母は自分で家の鍵を開け、暗い部屋に電気をつけ返事のない父に線香をあげる。わが家とはいえ誰もいない家へ一人で帰る母を思うと、淋しいやら申し訳ないやらとても辛かった。遠く離れているからこそ前向きに明るく暮らす母の存在が大きく、私は感謝する毎日である。

## シミ

神奈川県藤沢市 本間美恵

化粧水はカネボウのブランシールを使っている。最初コットンに含ませて使うと本当に頬のシミが薄くなってきた。今度手でパタパタはただけにすると、シミがまたうき出してきた。この十一月からまたコットンを使うとシミが少しずつ薄くなってきた。コットンに含ませるだけで違ってきた。人生はほんとうに微妙な差だと思ふ。

## しし座流星群

愛知県瀬戸市 武藤徳子

午前三時、貼りつけたように大きな北斗七星とオリオン、そして星・星・星。校庭の真ん中に椅子を出し、すいっときらめく流星に一人歓声を上げる。一時間前から校舎の屋上に寝ころんでいた息子がやって来る。「母体はハーレーダビットソン彗星だね」「それはバイク」。笑いもせず空を見つめる。三十三年後この子も子どもとこうして眺めるのかなあ。そのとき私は……こと座の隅で光ってる、か?

## 「夢がかなう日」に感動

愛知県春日井市 伊藤てる子

わいふ二九三号フリートーク「夢がかなう日」を読み深い感銘を受けペンを執る。「家なき子」のアーサーも松本さんの二男さんも、ペルテス病。二男さんは装具を付けていて、やつとはずせると思ったのに、反対の足も悪い。この辛苦に前向きに耐えられた母と子は素晴らしい。加えて「頑張れ千明君!! 藤崎台で待っている」、熱いものが込みあげた。その日はきつとくる。祈りつつ待つ。

## 加賀町の謎

大阪市城東区 布施幸子

石川県の叔父に手紙を出すとき宛名に「加賀」という文字を書き、わいふ編集部に原稿を送らせていただくときにも「加賀」の字を書く。石川県はわかるとして、なぜ東京に加賀があるのかしら、と思つていた謎？が「スタッフから」を読んで解けました。離婚した前田家の姫君のお屋敷跡。近藤勇ともゆかりの地。私、そんなことに興味しんしんです。姫君が勇を呼び、編集部を呼んだのかしら、なんて。

## カクトロコ

静岡県 あひる

カクトロコと名前をつけたサポテン園を経営している人がある。カクトロコとはスペイン語でサポテン馬鹿だ。

子どものときのように夢中になれるものが続いている大人。自分でも認めている、馬鹿と思えるほどのこだわりをもっている大人は、さすが気持ちが若々しい。

サポテン園を通して得た人と人との交流の大切さも教えてくれた。

## 言葉の循環

徳島県徳島市 象潟訓子

先日、ドメスティックバイオレンスの本を読んできてふと思つたのだが、子どものころ母親とケンカすると「あんた誰に給食費出してもらうとん」と言われたものだが、これは夫が無職の妻に「お前は誰に食わせてもらつてんだ」という言葉とすごく似ている。今思えば母も夫からそういうことを言われていたのかなあと回顧してしまうのである。

## 私の悩み

兵庫県相生市 服部伸一（36歳）

私の家は妻と娘二人（五歳と二歳）の家族です。妻は在宅でピアノを教えています。基本的には専業主婦に近いと思います。子育ての負担が大きく、自分のしたいことができなないもどかしさからか、相当ストレスをためこんでいるようです。しばしば夫婦で衝突し、重苦しい時間を過ごしています。ごく当たり前に家庭生活を営むことはどんなに大変か思い知らされる毎日です。どなたかよきアドバイス。

## アメリカの琴子さんへ

千葉県船橋市 由美あき子（43歳）

同時多発テロのあと心配で琴子さんへ手紙を書いたけれど出すことができず、実家のお母様でる子さんにおたよりしました。数日後、返事をいただき中日新聞にてる子さんが投稿されていた記事の切りぬきが同封されていました。そこには琴子さんのテロに対する毅然とした態度が書かれていて私は「さすが琴子さん」とホッとするとともに嬉しく思いました。

## 希望がかった

東京都青梅市 福島みさを

わいふ二八八号高松恭子様の「宝物」を拝見し、私も姑の十三回忌を期に、姑の手織り縮緬の裂を表紙に貼つて文集を作りたいと思いました。三月NHKおしゃれ工房に「布を貼って製本」の企画要望書を出し、五月にはわいふも同封し簡易書留で郵送しました。

十一月十四日「製本を楽しむ」の番組で放送され、希望がけない喜んでいきます。ちょっとむずかしくてできるかどうか心配です。

## 星の夜のタヌキくん

東京都練馬区 井上暁子

わが家の周りは、東京だけでもまだまだ煙が  
いっぱい。あの獅子座流星群を近所の畑の前  
で見ていたときのこと。すぐ先の地面で何か  
動く気配。猫かなと目をやつて、え！ 君は  
誰なの!? 太った大型の猫くらい動物、で  
も猫より丸い大きなお尻、丸い大きな目。見  
つめ合う謎の小動物と私。一瞬の後、奴は素  
早くどこかへ消えた。流れ星も見事だったけ  
ど、タヌキくん、もう一度君に会いたいよ。

## もの忘れの薬

アメリカトリロック市 伊藤琴子

Ginkgoギンコウは日本語の銀杏のy  
をgと誤記されたことに由来している呼び名  
である。このギンコウの粉末を飲むと体にい  
いという。頭の血流をよくし、手や足、体の  
末端にも血の流れを増加させ、白内障、痴呆  
症、アルツハイマー病の予防など、ドイツな  
どではその医学的効果が証明されている。一  
日二カプセル。もっと頭がよくになりたいな  
って思つて買ったけれど、飲むことを忘れて  
る！

## 子育てを楽しむ

東京都立川市 畑中珠美

一歳の男の子と暮らす専業主婦です。あや  
しベタな母親でしたが、一緒に笑える時間が  
少しずつ増えてきました。  
といっても、抱いても好物をあげようとし  
てもギヤツとえんえん泣かれたり、自分の  
時間が持てなかつたりすると、独身のころが  
なつかしくなります。先輩お母さん、子育て  
を楽しむコツをお聞かせ下さい。

## そんなにわがまま?

埼玉県久喜市 藤原ゆき

長男の父親と長女の母親から産まれた次男  
坊の夫に、「おまえは、長女だから自分の思  
い通りにならないとすぐに怒る」と言われた。  
いつも私の意見を人に指図してといって怒つ  
て聞かない夫。長女つてそんなにわがままな  
のかな、彼の偏見じゃない?  
ちよつと納得できないんですけど皆さんは  
どう思われます?

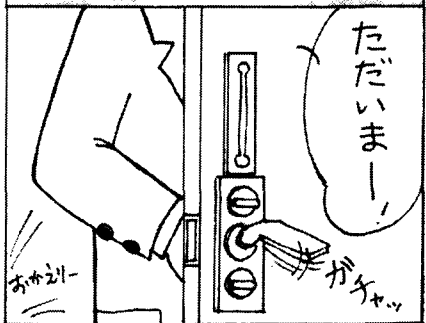
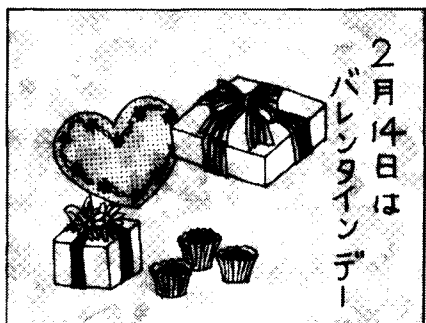
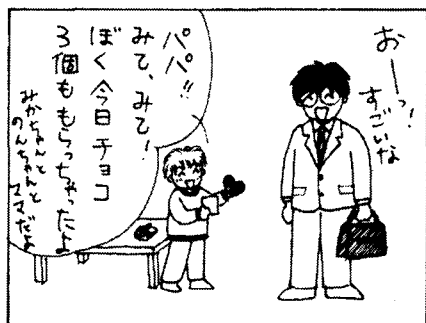
## タイトル?

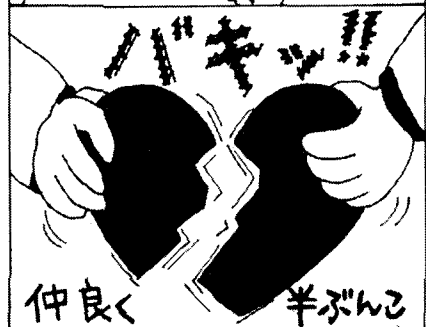
東京都三鷹市 林 夏子(47歳)

私は、「わいふ」にときどき自己主張をし  
て満足をする。ネットの世界では、毎日自分  
のホーム・ページを更新して満足している人  
たちがいる。日記に記されること細かな日常、  
姑、夫、子どもの愚痴、やり場のない気持ち  
をネット上にアップすることで誰かに受容さ  
れている感じがするのだろうか。ネットは巨  
大なカウンセリング・ルームかもしれない。



(え・山田)





# 情報 コーナー

## 熊本の会員さん 会いましょう！

熊本県天草郡 松本とみよ

先日「親の目子の目」を見ました」と熊本市内にお住まいの会員平山さんが電話を下さいました。その際、ぜひ一度県内のわいふ会員の皆様とお会いして親睦を深めたいものだとしり上がったわけではす。

県内には八人の会員がいりっしやるようではす。

書くこと読むことが好きな私たちは、きつと気が合うに違ひ

ありません。賛同して下さる方は0969-32-1578まで連絡下さい。お待ちしてます。

### 就職率の高さは抜群！

女性のためのビジネススクール  
アイムパーソナルカレッジ  
本科コース13期生募集開始！

実践を取り入れた現場第一主義の参加型の授業を展開、毎年多数のプロを輩出。わいふを経てアイムに入校、プロのライターや編集者になった人や、ケアマネージャー、スクールカウンセラーなどで活躍中の方も。

▼本科A/ライター・編集者養成  
C/カウンセラー養成

▼期間 4月開講/週1回1年  
▼時間 A木曜18時半~21時半  
C木曜10時~13時

▼受講料 年28万円(入学金含)

▼場所 乃木坂駅より徒歩一分

▼無料体験勉強会・学校説明会

A/2月18日 3月13・19日  
19時~21時半 C/2月20日  
3月13日 10時~13時  
▼03-5410-5464  
▼港区南青山1-26-5

未来を担う子どもたちの幸せを考える

### 「21世紀母親研究所」

家庭内のしつけ、教育に関して家庭や教師の方々を心理学をベースに援助していく機関です。主な活動内容は次の通りです。

①親と子の幸せな関係づくり講座

「COSMOS」全10回×2時間

一週間に一回のペースで行います。テキストを中心に話し合い、ロールプレイが中心。

②聴き方・話し方講座

「WINGS」全6回×2時間  
あらゆる対人関係の改善につながります。

③保育者のための心理学講座  
全5回×3時間

よりよい保育を目指すための実践的コース

④家族カウンセラー養成講座  
全15回×2時間

トレーニング講座を経て、カウンセラーの認定を受けることができます。

⑤アートセラピー

2日間の集中コース  
自己と向き合い、自己発見をしていくプロセスです。

⑥カウンセリング  
個人面談、予約制

詳しいことをお知りになりました方は、「21世紀母親研究所」代表、坂本洲子・T&F

0422-44-8702

Eメール

sakanoto@tahoyahen.com  
までお問い合わせください。

# 『母と子』 2月号

(定価500円/送料68円)

〈今月の視点〉 **子育てと地域づくり**

**豊かな人間関係づくりのなかで** 坂本深雪幸 & 田中直子

— 日常の子育てから二人の女性が問いかける —

**世界の麻薬問題と国連のとりくみ** 半田 博

**子どもの権利条約を考える** 山田 雅康 & 編集部

**お互いの人権を守る社会に**

**ロトルアのコハンガ・レオを訪ねる** 石井 重雄

## 『母と子』

編著/久松英保・半田 博

4月増刊号

## 21世紀の母親と子育て

定価1050円(送料84円)

— 「生きる力を育む」ための14章 —

## 『母と子』

## 校長の挑戦 (青塚 武司 著)

定価1050円(送料76円)

— 腎不全を抱えた小学校長の奮闘記 —

203-0054 東久留米市中央町5-4-8 電話0424-74-9125 母と子社

# ひとりひとり違う。 でも一緒に考える。

さまざまな社会の動きを伝えている新聞です。

結婚する。しない。子どもがいる。いない。年齢の違い、環境の違い、立場の違い、ひとりひとりがみんな違います。

でも、地球のこと、この国のこと、家族のこと、いろんなことを一緒に考えたい。



WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL

女たちの情報紙

**ふえみん**  
f e m i n

ふえみん婦人民主新聞

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前3-31-18

TEL 03 (3402) 3244・3238 FAX 03 (3401) 3453

Eメール [femin@jca.apc.org](mailto:femin@jca.apc.org) URL <http://www.jca.apc.org/femin/>

◆大阪支局

〒530-0041 大阪市北区天神町3-10-8-404 TEL&FAX 06 (6356) 0778

見本紙  
送ります

プランケット版4ページ 毎月5日・15日・25日発行 購読料: 年間9,000円・半年4,500円(送料共)

(○で囲んでください)

## 本文

●二行めから本文、全体で九行一八〇字。

[illegible]



## 五

年ほどわいふ本誌の仕事からはなれていたが、縁あってまた復帰。暮れもお正月もなく、他の仕事とも重なっていても、あの二人のパワーは全開だ。四七九もの公募原稿の中から一篇を決めるとき、さぞ難航するかとハラハラしたが、これがすんなり一致。

「いいものはいいのよ」

今年も三〇〇号に向けて、二人に圧倒されっぱなし。(望月)

## と

にかくかわいいのです。昨年秋に母の「いやし」の大役を担ってわが家にやってきた仔猫のことです。この数か月で、わが家のサイクルがすべてこの仔猫中心に変わってしまいました。NMS担当の万波さんにご心配いただき(?) NMSに入ったらと勧められましたが、もう手遅れです。いたずらして

## 今

いる仔猫をしかる私の顔がゆるみっぱなしなのですから。(成井) 年も「スタッフから」始まりました。編集部の忙しいドタバタぶりを伝えたいなと思うのですが、どうしても取ってしまうのであります。「笑える!」に載せられるようなこともあるのですけれど、でもよく考えるとかき回している張本人は私かな。今年も忙しく厳しい編集部ですが、楽しい「わいふ」をどうぞよろしく。(野村)

## 夫

が単身赴任のうえに昨年暮れ、娘二人が家を出た。娘が家を出るまでは「一人残されて寂しいのかなあ」と思っていたが、これが結構楽しい。一人で好き勝手にやっていたところ、正月で夫が帰ってきた。それに乗じて娘も泊まりにきた。短期間だったが皆が帰った後どつと疲れた。家族って「元気で留守がいい」ということを思わ

ず実感してしまった。(万波)

## 眩

量のため、MRI検査を受けた。三十分かかると言われ、閉所恐怖症の私は顔がひきつった。目を閉じて、五分だと思ふごとに指を折り、ちょうど六本で「お疲れさま」の声。どんびしやりだった。時間を計ることに気を取られ、恐さはすっかり忘れていた。久しぶりに勘が冴え渡り、うれしかった。結果は異常なし。(山本)

## 昨

年末はカヌーを始めて以来はじめて、二か月も漕がなかった。初漕ぎの正月五日は久しぶりにワクワクした。

ところが着替え始めて驚いた。パドリングスーツの着心地が違ふ。どうも窮屈で、馴染まない。ライフジャケットにいたっては、締め具をぐーんとゆるめなくては入らない!

二か月漕がないで、食べ放題、飲み放題の付けがきた。(水落)

## 私

が子どものころ、というのは昭和十年代前半だが、遊園地に行けばどこにでもロバがいて、乗ることができた。

大好きで必ず乗ったが、近ごろはポニーに変わってしまったようである。私の子どもたちもポニーには乗ったが、ロバはもういなかった。

この年して人が笑うと思うがもう一度乗ってみたい。どこかにいないかしら。(和田)

## と

うとう本格的にパソコンを始めました。正月三日間つぶして息子に特訓を受け、あげくの果てに大ゲンカ。「同じことを三回もいわせるなよ」「そんなこというならもう教わらない!」てなもんであとは独学。ともかくメールのやりとりだけはできるように、息子にメールを送って、「どうだ、参ったか」とはいうものの前途は険しい。(田中)

## 「ファム・ポリティク」より

一九九〇年に出版されたカレル・ファム・ウォルフレンの著書、「日本権力構造の謎」はもう読まれたでしょうか。

十二年も前に出版された本ですが、これを読むと、つくづくこれまでの日本がどんな形の権力によって動かされていたかを痛感し、呆然とします。

もともとショッキングな部分は、太平洋戦争で清算されたと思っていた過去が、実は占領下でもしぶとく生き残り、かつて国民を鉄の統制下においた官僚組織の主だった人々が、戦後のお役所で着々と勢力を伸ばし、最高の出世までも遂げていること。

国民に奉仕すべき役所が、いざというときどうしてあんなに動きが鈍いのか。不思議でたまらなかつたことがらが、この一冊を読むと、掌を指すように理解されてきます。

こうした本が日本人でなく、外国人によって書かれたという事実は情けないと言おうか、なんと言おうか。

## NMS研究会より

NMSではこれまで七冊の「育児書」を出版してきました。それぞれ興味深い内容のものと自画自賛？してありますが、今度新しく、今までのものと調子の違ったものを出すことになりました。

お子さんが中学生ぐらいまで役に立つものと考えています。

タイトルは「しつけのできる親になる」というもの。なんだか嫌味なタイトルとお思になる方もいらっしゃるのではないのでしょうか。実はそう思いになるところに、問題点がひそんでいるので、それというのも私たち親の心の中に、「しつけ」に対する拒否感が存在しているからなのです。

この本は、その拒否感のひとつひとつを洗い出し、どんな場合に、どんな原因で私たち親の心に、子どもをしつけることに対する忌避感が働くのかをさぐっています。

きつとお役に立つことと思います。出版元は海竜社ですが、「わいふ」にお電話くだされば送料無料でお送りできます。定価は一四〇〇円＋税です。

## 老人ホーム情報センター便り

昨年十一月下旬に九日間、スウェーデン、デンマークの実地研修に参加した。ヘルパーに一日中ついて廻り、寝たきりの人の介護やシャワーを浴びる手伝いなどをしたり、痴呆老人のグループホームにスタッフとして入ったり、市の職員からレクチャーを受けたりと中身の濃い研修だった。

国の制度が違うので単純比較はできないが、日本の有料老人ホームの中にもこれらの国には負けないよい介護をしているホームがある。入居一時金が高額なのが欠点だが、これらの国の所得税は最高四五パーセントも払うというから、費用負担が早いかな遅いかな問題で、いつかは支払わなくてはならない費用なのかと思ったりした。経験してきたことをいくつか紹介します。

●無料電話相談 毎週木曜日

●面接相談もお受けします(有料)

電話でご予約ください

〇三三三三三三三二八五四

## 特集テーマ

二九六号（二〇〇二年六月一日発送）の特集テーマは「ソーホー（家庭内の小さなオフィス）」という働き方」です。

二十六年前に「わいふ」が始まって以来、誌上にしばしば現れて主婦に大人気の職業が「家においてできる仕事」でした。

## 座談会 私も言いたい

二九六号のテーマは「禁煙への挑戦」です。タバコのみはひどく肩身のせまい世の中になりました。健康に悪いということは、疫学調査で確かめられているようですが、車の排気ガスや化学物質の廃棄やらで環境汚染が進む中、タバコだけ目の敵にすればいいの

## 私の意見・あなたの意見

二九五号のテーマは「部活のありかた・賛否両論」です。

中学・高校といえは思春期の危ない年齢で（本人は青春真盛りと思っている）、親も先生も何かことを起こしはしないかとハラハラしています。

昔は袋張りとか電気部品の組み立てなど、超低賃金の内職が幅をきかせていたのですが、そんな仕事は機械に奪われたとみえ、今やすっかり高級化してテレワークだ、ソーホーだと、パソコンの仕事が「家でできる仕事」の主流のようです。

これからぜひやってみたいと思っています

か？と思う人もあるでしょう。

悪名高い禁酒法で失敗した、アメリカが急先鋒なのだから、極端すぎるんだという考えもありそうです。

しかしとにかく止めて悪いことはないだろうと、禁煙に挑戦する人が増えています。自分、または家族の禁煙体験を話し合って、有

そこで「何か夢中になれるものを見つけ、

打ち込んでいけば安全」という考えで部活動を奨励するらしく、夜遅くまで学校に留まり、休日も登校して励む生徒が多いようです。先生からも仲間からも強制力が働くのか、一度入ったら抜けられないのが部活とか。「あまりにやり過ぎ」「勉強も家庭生活もだめにな

る方も多いでしょう。やっていらつしやる方、後進の参考のためにもその旨味と苦味の経験を語ってください。

字数 四千字前後

締切 四月十日

効な情報を交換してみましよう。

近ごろは張り薬とかニコチン・ガムとかいろいろの新兵器があるようで、以前より止めやすい環境がととのっているようですから。

日時 三月十二日（火）二時より

場所 わいふ編集部

申込は電話で二月二十五日までに

る」と思う親もあれば「達成感が人間性を育てる」「健全な青春のあり方」という親もあります。

賛否両論をお寄せください。

字数 千字前後

締切 二月二十五日

# 募集します

# きまり

定期購読を申し込まれている方はどなたも投稿できます。

投稿の前に以下を必ずお読みください。

## ◆クワリア「わが家の歴史写真」

どこの御家庭にもある古い写真とその説明をお寄せください。「父・母を語る」「子育てのころ」などのテーマにそってでも、ただ古い写真を並べても結構です。

お申し込みは電話で編集部まで。

## ◆特集

毎回テーマを設定しています。一四九ページをこらしてください。

## 一六〇〇字のコラム

(このコラムも字数は目安で、多少長くて内容がよければ掲載します)

## ◆エッセイスト・クラブ

キマった文章、豊かな内容の随筆をお送りください。

## ◆スバリ一言

オビニオン、評論を。独自の意見で。

## ◆家族のスケッチ

同居、別居を問わず、あなたの家族のことを書きさしてください。

## ◆子育てフォーラム

おさない子、思春期の子、どんなときも親にとって子どもの存在は気になるもの。あり

のままの関係を描いてみませんか。

## ◆ワーキングライフ

あなたは、どんな働き方をしていますか。さまざまな仕事の喜びや苦悶話を。

## ◆ふたりに夢中

人生八十年時代。趣味その他、仕事以外に生きがいを持つ方も多いはず。あなたは何に夢中ですか。

## ◆フリートーク

どんなテーマでもどうぞ。どのコラムにも当てはまらないテーマの自由なコーナー。

## ハ〇〇〇字のコラム

## ◆あなたへスマッシュ

本誌の投稿や記事についての感想、意見を載せます。何号のどの投稿に対するものかを明記して。

## ◆ことばでハッピー

言葉の使い方はとても難しいですね。時には人間関係をこわしたり。でも発想を変えて工夫することで、お互いの関係をよくすることも可能。失敗談も含めて面白い話題を。

## ◆パソコンワールド

急速に普及し始めたパソコン。楽しんでい

る人、振り返られている人、体験談を。

## ◆読んでよかった

読書感想文のコラム。どんなジャンルのものでも結構です。著者・出版社・出版年月・定価を書きこと。本文は七六八字。

## 四〇〇〇字のコラム

## ◆笑える！

嫌な話題の多い世の中。思わず笑ってしまった楽しい話を。

## ◆私の意見・あなたの意見

賛成か、反対か。一四九ページにテーマを載せています。皆さんの率直なご意見を求めます。

## その他

## ◆私もひとこと (一四六ページ参照)

どんなことでも気軽に書きさしてください。

## ◆わいふネット (一四六ページ参照)

教えて欲しい。聞きたい！ それに対するお答えも。読者参加のQ&A。

## ◆情報コーナー

お知らせ、募集など。要点を漏れなく整理してお寄せください。(見出し共で一四三・四行にまとめて)

# 投稿の

## ◆特別寄稿

字数自由。どのようなジャンルのものでも結構。本誌に適當と思われるものは掲載します。出版社に紹介することもあります。(ただし詩、短歌、俳句を除く)

## ◆コミック、イラスト、写真

一度作品をお送りください。本誌に合うものであれば依頼したいので。

## 注意

- 原稿はお返しできません。
- 投稿は一人一篇。ただし、「あなたへスマッシュ」「読んでよかった」「私もひとこと」「わいふネット」「情報コーナー」とはだぶつても可。
- 締め切りは原則として偶数月の二十五日。郵送で当日必着。(読みにくいので、ファックスではお送りにならないようお願いします)
- 他誌との二重投稿はお断りします。
- 写真や、イラストを用意できる方は原稿とあわせてお送りください。
- 誌上での匿名、ペンネーム使用可。ただし

いくつものペンネームを使い分けるのはご遠慮ください。

●掲載を希望しないお便りは「私信」と断り書きを。

●投稿は多少添削することがあります。

●原稿の最初に次のようにお書きください。

原稿用紙は必ず開いたまま右上一カ所を留める  
ペンネーム・匿名希望の方は明記

コラム名	ペンネーム・匿名 住所 会費番号 本名 電話番号 年齢
タイトル  本文……	

なくても可

(1)

ページを明記  
(場所はどこでもよい)

匿名の方は住所を  
載せるかどうか明記

●四〇〇字詰原稿用紙に縦書き。

●ワープロ打ちも二〇字×二〇行を一枚に。

〈あて先〉〒162-0062 新宿区市ヶ谷加賀町二一五―二六

わいふ編集部

投稿のきまり

# 編一集だより

●明けましておめでとございます。いつも二月にお手元にとどくこの号で、念頭のごあいさつをするのは気がひけるのですが……。

会員の方からたくさん年賀状をいただきました。有り難うございます。ひとつひとつにお返事をお出しできなくてすみません。

去年は何とも暗い年として終わりましたが、それでも日本人の大多数は元気で働いているはず。落ち込まないで明るく行きましよう。

●これまで十年間、「わいふ」誌上を飾っ

## 購読申込は……

ハガキか電話、ファクスでどうぞ。すぐに、本に郵便振替用紙を添えてお送りしますので、折り返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様に。限られた書店にしかおいてありませんので、直接お申し込みください。

## 購読中止は……

必ずお申し出ください。誌代が切れる際には、郵便振替用紙を同封していますが、送金をお忘れになる方があるため、誌代が切れても、引き続き送本しています。ご連絡がないと、お送りしてしまいますので、ぜひハガキかお電話を。

てくださった西田淑子さんの漫画が先回でお終いになりました。女性の漫画家として大活躍、「わいふ」に載せ続けるのが時間的に不可能になられたからです。

西田さん曰く「政治漫画は考える時間がすごく大変なの。『ファム・ポリテイク』のほうはイラストだから引き受けるわ。そうでしょう、そうでしょう。

長い長い間、ほんとうに有り難うございました。西田さんの健筆に再会したい方は『ファム』を取ってくださいますように（これ宣伝です）。

●五回つづいた黒岩ちづこさんの「国会議員になつてしまった」は、まだまだ面白い話がいくらもあるのですが、残念なことに二月はじめに築地書館から「七人の母国会

を行く」のタイトルで出版の運びとなり、今回で打ち止めとなりました。つづきを読みたい方は、ぜひそちらをお読みください。ともかく政治というのは、実はほんとうに私たちの身近にあるものなのに、男たちに任せておいては、女性の視点ぬきで戦争だ、自衛隊派遣だ、ダムだ壊れだとはやり立つばかり。黒岩さんの手記で、政治を少しでも身近に感じていただければ本当にうれしく思います。

●心理カウンセリングの勉強をなさった方に取材をさせていただきたいと思っています。まず大体的な内容を電話でうかがいたいと思っていますので、恐縮ですが編集部まで一報ください。どうぞよろしく。

わいふ◆294 (隔月刊)  
●発行日 2002年3月1日  
●編集 わいふ編集部  
●定価 620円(本体590円)  
●年間購読料 4224円(送料共)  
●印刷 平河工業社  
●発行所 (株)グループわいふ  
〒162-0062  
東京都新宿区市谷加賀町  
2-5-26  
電話 (03) 3260-4771  
FAX (03) 3260-4773  
●郵便振替 001503-110430  
加入者名 わいふ編集部



ew



othering



ystem

## 子どもに「生きる力」をつける子育てを！

与えすぎは子どもの「生きる力」を損ないます。食べものでも、着るものでも、見るもの、聴くものでも……。何でも与えれば与えるほど子どものためになる、と思ってはいませんか？ 今の時代、控えめが大切。

子育ては  
NMS !!



◆子どもがどうしてもいうことをきかないとき、どうしようもなかったらよいのでしよう。暴れる子だったら、さっさと小脇に抱え込んで、その場から離れる。しつこくまとわりついて来る子のときは、トイレに姿を隠す。相手にしないです、さっさと自分のしたいことをする。言葉を使っているきりと言ってきかす。◆いろいろなやり方があります、それも時と場合によりけり

◆ん全。いつも一つの手だてが万効がない、というママは、子どもが耳タコになっか、気迫がなく効果がないか…いろいろな場合がありす。そのひとつひとつにす。掌を指すようにお伝えするのがNMSです。

通信教育で最後まで頑張る人は、ふつう約三割。でもNMSの受講生は約八割の方が、終了証を手にします。NMSに入って、ほんとうに子育てに自信が付き、ラクになった、とおっしゃる方が多いのが、何よりの嬉しさです。

資料請求は 〒162-0062 東京都新宿区市谷加賀町 2-5-26

NMS研究会へ。 ☎ 03-3260-2509 FAX 同 3235-2854

MINERVA21世紀福祉ライブラリー

# ⑩ 走れ介護タクシー

安宅 温著 ●利用者の視点で移送介護を考える 利用者  
者とタクシー業界を丁寧に取り、報告。 二〇〇〇円  
▼好評既刊

- ① 終末期医療への願い 宮尾茂子著 一四五六円
- ② 生活保護ケースワーカー奮闘記 三矢陽子著 一八〇〇円
- ③ わたしは盲導犬イエラ 日比野清監 一八〇〇円
- ④ 輝くわが最晩年 栗石とみ著 二〇〇〇円
- ⑤ 盲導犬誕生 (福)日本ライトハウス監 一六〇〇円
- ⑥ ともに生き ともに働く 山口光一著 一八〇〇円
- ⑦ 夢子がおばあちゃんになるとき 平野隆彰著 一八〇〇円
- ⑧ 使ってみた介護保険 安宅 温著 一八〇〇円
- ⑨ 生きがい探し 12の物語 高瀬高明著 一八〇〇円

家で死にたい・死なせたい

# 在宅ホスピス入門

黒田輝政著 ●介護福祉からのアプローチ 取り組  
みから示す在宅死の実現への手引き。 二〇〇〇円

# アメリカ女性議員の誕生

森脇俊雅著 ●下院議員スローターさんの選挙と議員活動  
ケンタッキー州ハーラン郡炭鉱町生まれの女性が、ワシ  
ントンにいたるまでのあゆみを見事に描き出す。 二四〇〇円

# シングルウーマン白書

ツラ・ゴードン著 ●熊谷滋子訳 ●彼女たちの居場所はどこ  
こ? シングルであることの葛藤と自分らしさを大切にす  
るシングル女性の生き方を調査・報告する。 二八〇〇円

# 日米のシングルファーザーたち

中田照子/杉本喜代栄/森田明美編著 ●父子世帯が抱える  
ジェンダー問題 父子世帯の日米面接調査。 二六〇〇円

既刊 日米のシングルマザーたち 中田照子 杉本喜代栄共著 森田明美 2600

# エコロジー事典

E・キャレンバツハ/満田久義訳 ●環境を読み解く  
エコロジーの基本概念60項目を解説する。 二二〇〇円



ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1 ※宅配可/価格税別  
TEL 075-581-5191/FAX075-581-0296 <http://www.minervashobo.co.jp/>